

未来への幸せをめざして

# 天国の扉

千乃裕子著



神、靈魂について  
徹底的に解明し、  
天国の存在を証明する。

天 国 の 扉      インターネット公開版

---

昭和52年12月 5日    初版発行～ 9刷

昭和63年10月 5日    改訂第 7刷発行

著 者    千 乃 裕 子

平成17年 4月23日    電子書籍作成

平成18年 1月 3日    最終更新日

作成者    エルアール出版

(旧ジェイアイ出版)

©千乃裕子 1977-2006 ALL Rights Reserved

無断引用・転載を禁ず



ラファエル ラグエル バヌエル ミカエル ガブリエル サリエル ウリエル  
大天使 大天使 大天使 大天使長 大天使 大天使 大天使

## ミカエル大天使長と六大天使

## は し が き

昨今の科学万能の時代に霊について語ることは、たいてい興味の対象としてだけに終わる場合が多いのですが、イエス・キリストの復活がただの幻想として机の奥深くにしまい込まれずに、二千年余の今日も奇蹟として残り、また、新約聖書の福音書、パウロの書簡、黙示録などもすべて、聖霊を通じて語られたこと、使徒たちの自動手記などで埋めつくされていることも合わせて、まず、三次元の世界と四次元の世界の交流は、けっして不可能ではないということを考えて頂きたいと思えます。心霊科学の分野でも数々のデータが出されており、霊媒、霊能力者、超能力者も数多く現存しております。

この書は、心霊的なものだけを取り上げる意味でなく、五一年六月に生涯のお仕事の完成を待たず亡くなられました、故高橋信次氏の数々の著作に続くものとして、驚くべきことに、イエスキリストと同じように霊の身体で、霊能者を通じ御自分の既刊の著書の訂正をなさり、生存中にもその霊能力を通じて話をされていた天国の霊たちが、今度はともに現れて、霊魂と呼ばれているもの、神と呼ばれ

ているものの実態、天国とはどのようなものか、そうして、この末法の世に三次元の人間は何をなすべきかなどを語られました。それを聞き、筆記したのは、ほとんどが霊能力を持つ高校生たちです。それらを天国の高い次元から来られた霊たちの導きのもとに、著者の霊体験、宗教観などを加えて編纂いたしました。

高橋信次氏の教えを知り、そのために働く私たちは、何を天国のかたがたが私たち人間にお望みになっ  
ていられるかを悟り、地上に平和なやすらぎの世界を取り戻すべく、心がけて下されば、と望んでおります。

そして、現代の情報過多の時代に生きる皆さまが、正しき指針を見失わず、生活のために、幸福のために、悩みつつ歩いてきた、血みどろの、あるいは、泥だらけの歴史を乗り越えて、科学優先の文明に生きるものとして冷静に真実を見つめ、真理を悟り、古きを一新した賢明な世代として新しい歴史を作  
って行って頂きたいのです。

この度『慈悲と愛』誌から第七章に転載させて頂きました方々、初版発行を実現させるべく、原稿の作成などに時間と労力を惜しまず協力頂いた高校生たちに、改めて心からなる感謝を捧げます。

一九八一年一月三十一日

著者

◇ 目 次 ◇

はしがき

第一章	著者の霊体験	.....	7
	異次元の不思議な体験	.....	7
	悪霊との闘い	.....	3 4
	悪霊にとり憑かれた団体	.....	5 6
第二章	ペー・エルデ星の衛星群	.....	7 1

第三章	ある日の高校生クラスの討議より	89
第四章	天上界の人びと	119
	ミカエル大天使長	119
	ガブリエル大天使	126
	ラゲエル大天使	132
	パヌエル大天使	134
	サリエル大天使	137
	ラファエル大天使	139
	ウリエル大天使	150
	ブッタの章	154

イエス・キリストの章	1
高橋信次の章	1
第五章 天国——空高き善霊の住みか	1
モーセの章	1
天上界および地獄の図解	2
第六章 正法——補足および用語解説	2
第七章 天を語る人々	2
第一節 歴史に踞られる七天使	2
第二節 正法者の言葉に心打たれて…… 化学を学ぶ者より	2
反論掲載に当って	2
西澤徹彦	3
1	1
9	9
6	6
5	5
5	5
7	7
8	8

第二節 土田様現象への中傷に対する反論（抜萃）	253
① 物理学生から非科学的偏見と中傷への反論：中尾 肇	253
② 現象旅行に同行する者からの反論：久保木 美帆	258
③ 中傷文作成者への反論：明場 靖	260
④ 現象への中傷者に反論：瀧村 宏子	263
⑤ 天を仲介される霊能者・土田様・谷田様のこと：森 佐知恵	266
⑥ 一霊能者の反論：谷田 美恵子	272
第一章六十頁の証言：千乃裕子	275
似非正法を斬るノ	
— 園頭広周氏に対する批判文—	編集部
あとがき	285
推薦の言葉	岩間 文彌
	287
	【挿絵 土田 展子】

## 第一章 著者の靈体験

### 異次元の不思議な体験

この本を書こうと思った動機は、私が他の人に比べて、この世的ではなく、むしろ人間的でないともいわれる生き方でしか生きられない、ということから、ひそかな違和感と取り残されたような淋しさをいつも感じさせられていた人生が、急にその生き方が、あるとき全面的に肯定され、自分ほど幸福（しあわせ）な者はないと感じざるを得なくなり、それを同じような人びとに分かちあいたい、と思っただけです。

私が生を受け、物心ついてより三十数年、以来、歩んで来た人生では、この世的な物欲と、その場かぎりの満足で自分のまわりだけに調子を合わせ、それで一日が事足れりという人びとに多く出会いました。しかし、それとは反対の精神的な美しさを、知らぬまに人びとの心の中に求めている自分に気づい

ては、その人びとから去らずにいられなくなり、また、人びとも私の求めるところを理解できず、去った私を非難するという、そのくり返しでした。

私は、不満があるがゆえに周囲との摩擦を求めて、不満の原因になるものを破壊しようという不穏分子ではありませんでしたので、黙って離れていきました。彼らは、人間不信の人生を歩み、善意や誠意へ、疑いの目ばかりを向けていたのです。私のように感じ、人生に美しい夢を追う人も多くいたはずですが、けれども、私の学生時代、師から学び、友から学び、良書から学んだものは何も社会には通用しませんでしたし、私と心を同じくする人にも出会いませんでした。外国人も日本人も、牧師も宣教師も、貿易会社も化学薬品系統の会社も、病院も、すべて「人間的な、あまりに人間的な」人びとで満たされていました。内面的な不満は隠して、普通の人間としてその人たちと接してはいましたが、人間とは、一個の社会人として成長するまでに、どのようなことを学んでくるのだろうか、しばしば考えたものです。おそらく彼らの、かつて学んだものの、すべての善きものには、カビが生えていたのでしょう。動物と同じ意識は変わらず心の底流に潜み、冷酷で、残酷で、思いやりがなく、人の心のなかに土足で踏み込んで気がつかない。人間の価値、美しさ、尊厳、とは何か、知識人も教育のない人も、ひとしく、それについてとどまってみることもなく、学ぶ機会もなく、ただ、己れの煩惱の影に怯（おび）え、本

能の衝動と不安はいつも繋っており、何がそれを乗り越えて信頼できる交友の場を作る手段であるのか、健全な対人関係を築く方法であるのか、それを冷静に、しかも客観的に考える余裕もなかったのです。社会に理性は存在せず、ひとしく感情的で退廃的な流れと、その退廃を憎む人、神経を尖(とが)らせたハリネズミのような人、どうしても良い投げやりな人、そのなかで、私は青年期から大人へとの時期を過ごしてきたのです。——もともと人心の乱れた、末法と恐れられた世の中でした。人びとはマスキの粗悪な好みに毒され、善悪への判断を見失っていたのです。

そうして昨年、一九七六年も暮れようとしている時、或るテレビ番組で評論家が集まり、来る年についてそれぞれの所信を述べ、そのなかで、一九七七年は、それまでの極端なもの、露悪主義から一変して耽美主義に変わるような傾向が消え、その中間をゆく、良識的な中庸へと嗜好が変わって行くだろう、という意見が出ました。そのとおりに、今年は人心が徐々に精神的なものに興味を示しはじめ、それまでの利那主義から抜け出たとは、まだまだいえぬ世界ではありますが、ようやくにして良識が芽生え、人びとが極端を嫌うという傾向が現実化し始め、善意を、責任を、と主張し始めたのです。

それと平行して、私の精神の世界も大きく変わりました。それは、一昨年の暮、一九七五年頃からですが、母とおして、ふたたび、神の存在への疑問に対する答えが、徐々に私に示され始めてきたの

です。最初は、私は非常に懐疑的でした。おそらく、私は懐疑的なものはなかったと思えるほどでした。過去の苦しみと悩みのうちに、既に神は存在しないものと結論づけていたからです。というのは、それは新しい宗教という形で私たちの前に現われてきたのですが、高橋信次という名とともにもたらされた、モーセ、イエスを含むキリスト教とブッタの仏教が、驚くべきことにその教えが同じ源より出ているというものでした。母は、高橋信次氏の教えを信じる人たちの立派さ、その一言一言が真に価値のある素晴らしいものとして、また、その人の講演で、如何に驚くべき奇蹟が多く行なわれ、異言が語られるかを述べ、そこを訪れるたびに、私と同じ失望に住んでいた母が、生き生きと自信に満ちて、私が聞こうと聞くまいと、理解しようとしまいと、私に語らずにはいられないように、その教えについて語ったのです。私は、そのうちに、私の今まで信じてきたことが、奇妙にその内容と合致する点が多いのに気がつきました。しかし、私は頭（かたくな）でした。自分の苦しみを理解しそうにもない、上流階級、あるいは成功者の集団であり、彼らは布教のために、多額の寄附をしていましたが、私に取っては縁なき人びとに思えたのです。

ところが或る日、不思議なことが起こりました。I夫人という方が、私の頭（かたくな）さ、義理の父（母の再婚の相手で、実父は私が八歳の時に粟粒結核で死亡しました）とうまく行かぬこと、母が中

立って気苦労が多く、よく三人で口論し合ったことなどをこぼす母に、I夫人は私には、悪霊が憑いているから娘さんと別居しなければ二人が殺されてしまう、と母に告げたのです。これを聞かされた時、私は冷静に受け止めることができず、思わずカッととなり、高橋信次氏の著書を三冊ほど、ごみ箱に投げすてたのです。その途端に私は金縛りに遭ったように身体がこわばり、二階にある自分の部屋に駆け上がりましたが、しばらくは寝ていなければならぬほどでした。そのような感じは生まれて初めてのものでした。不思議な力に、私は本能的な怖れを覚え、階下に降りて、本を元の所に戻すと、ただちに私の身体のこわばりは治ってしまいました。もちろん、それまでにも、異次元の不思議な体験が二、三ありました。

一度目は、十三年程前、速記者として、ドイツ人の化学染料会社に勤めて、六カ月目でしたが、九人ものドイツ人の男性が上司として一部屋におり、私の直接の上司が手紙を書くときには、その部屋に呼ばれて速記を取るのです。新入社員ですから、その部屋に入ると、なんとなく注目されて、居心地はよくありません。或る日、関係のない方に、「貴女はとても優秀だから、ドイツへ留学して勉強したら?」などとお世辞を言われ、社交辞令としてお礼を言えよかったです。私があまり喜ばなかったものですから、それが気にさわったらしく、私に対して、その上司の、いわゆる部下いびりが始まったので

す。それはドイツ人らしく陰険なものでした。

私は健康な人格が好きでしたから、秘かに軽蔑しながら、二カ月間の間、表面はさり気なくかわしていました。しかし、ついにたまらなくなり、そのことを手紙にして、直接の上司に渡そうと、皆が退社してから後で手紙を書いて、ボスの机の上に置き、帰ろうとしました。ところが、閉じ込められる時間でもないのに、オフィスの扉が開かないのです。守衛がもう一度偶然に上がって来るまで、私は三階に閉じ込められていました。後に明らかになりましたが、それは、善なる靈の知らせでした。私の無謀を止めたかったのです。守護靈が、私に、危険を招きよせるなど警告したのです。解らぬままにそのような予感がありました。でも、私にとっては、当面の問題を、早く解決するほうが重要だったので、あえて、手紙を上司に渡しました。案の定、それは、池に石を投げ込んだようなものでした。波紋がとめどもなく広がって、九人の上司に白眼視され、私は完全に、男性不信、人間不信の念におちいってしまいました。そして、一カ月後、その社を辞職しました。九カ月しかその社に勤められなかったのです。

二度目は、その後、三年ほどですが、やはり、ある米国系の製薬会社で秘書として働いていました。大学時代に、クリスチャンとして洗礼を受けていましたから、ほとんど毎週、日曜礼拝に行っていました。にもかかわらず、牧師にも運が無かったらしく、教会では、私を世俗的な目でしか見ていて

くれず、その牧師は速記者の時の失敗から、私に対して非常に冷淡な態度をとり、相談相手にもなってくれず、あまつさえ、私が考えても見なかったようなことを、陰で信徒にもらしていたことが解りました。それは見当外れの悪口でした。表面では普通の態度をとられるので、世間にあまり慣れていない私には、夢にも考えていなかったことでした。それを、たまたまその信徒から母が聞き、その時から私たち二人とも、信仰にヒビが入ったのです。牧師という職業とその誤解の甚だしさと、私はどう結びつけて良いものか、全く混乱してしまいました。その牧師は、非常に立派な人だと、信徒間では大いに尊敬されていたのです。

翌日、会社で勤務中でしたが、悩み抜いて私は、もし、私に間違った所があればと神に祈り、その答えを得たいと奇蹟を願いました。私の今までの人生が間違っていないなかったのなら、数秒間、雨を降らせ下さい、と願ったのです（その頃、私は全身全霊をもって、聖書の教えのとおり、イエス様を愛していました。どのようなことがあっても信仰は私の慰めであり、不安を取り去るものでした。祈りをもって、私のなすべき務めとして、最善をつくして会社で働き、愛の心をもって友と交わり人と交わっていたのです。誰に対しても心のなかで、尊敬と信頼と誠意をもって接していました）。そして、祈りとともに、奇蹟が起ったのです。突然、今まで晴れていた空が真っ暗になり、雨がバラバラと降って止んだ

のです。付近にいた人たちは、驚き怪しみました。しかし、私は奇蹟を求めながら、その奇蹟を自分の錯覚と片づけ、*「主なる汝の神を驗(ため)すなかれ」*の教えに、背いてはいけなさと自戒しました。ただ、私のそれまでの人生は、間違つたものではないとの確信をなんとなく、そのとき深めました。

三度目は、いわゆる怖いものに出会つた体験でした。精神力が弱ると、そのような事に出くわすと、解釈してくれた人がありましたが――。私はよく、小さい頃から人から誤解を受けては、悲しい思いをしていたものでした。小学六年生の時から、自殺したいと思つたのです。戦後まもなくでした。母が私の身を案じて、島根の山奥の知人の所に、疎開させたのです。いちおう養女という形でしたが、私には知らされていず、また、農家でしたので、その家族は私にいろいろと手伝つて欲しかつたのでしよう。おっとりと言っているのに、気が利かないものだから、*「気が利かない、気が利かない」*と厄介者扱いをされました。とうとう何もかも嫌になつてしまい、ある晩、付近の裏山で、長い間、一人で夜空を見ながら、考え込んでいたのです。一晩食べなければ、死ぬるとでも思つたのでしよう。結局、その家族に迎えに来られて、何ごともなく母のところに戻りました。

それから後は、大学を出て、初めて勤めた先で、好きだと思ふ人ができ、話しかけることができず、手紙を渡したりして、無視されたことがあり、それと同じ時に、仕事で大きなミスをして、自分自身の

葛藤に耐えられなくなり、家出をし、自殺行をしました。母は前述の人とは、また、別の牧師ですが、教会に駆けつけ、ともに祈ってもらい、母自身、私が自殺したものと思ひ込んで、イエス様に娘を捧げます」と祈りました。牧師は、自殺なら天国に入ることには出来ないのです、この者の今なした祈りを許して下さい。知らずに祈りました」とイエス様に詫びたのです。しかし、もし生きているなら、男と一緒に違いないと申しました。母はそれを全面的に否定しました。そのようなところは少しもなかったからです。最近、聞いたのですが、その時、弘法大師らしき人が歩いていられるのが、母の頭のなかにポッカリ浮かんだそうです。イエス様に祈ったのに不思議だとは思ったそうですが……。母が過去世で弘法大師の弟子だったそうですから、励まされたのでしょうか。今、ミカエル様からそう伺いました。

私はその頃、東京から横浜へと一泊ずつ泊り、睡眠薬を持って歩いていました。しかし、決行できず、五日後に所持金も京都で使いはたし、母に電話をして、迎えに来てもらったのです。勤めていたところは大会社でしたから、課長も、隣りの課の課長補佐も、私の神経がデリケート過ぎること、ミスなど、誰でも最初のうちはするのだから、と母に話して下さったそうですが、私は、辞めてしまいました。仕事の内容も、英文学科を出たのに、手紙のファイルやお茶を汲むこと、掃除をすることが主で、陰で頼まれて、男性社員のために英文の手紙の原稿を書いてあげるのが精一杯で、嫌気がさしたので

す。そのことがあってから後も、二度ほど、実際に、睡眠薬を飲みましたが、多くは飲めず、結局、ならかの形で守られて、死ねなかつたのです。生まれてからずっとですが、その間もサリエル大天使が、私のなかに入っていましたから、悪霊は憑いていなかったのですが、私が自殺衝動に駆られる時は、必ず私を出て何か天上界の用をしていたそうです。抜けられない用事でどうしても仕方がない時は私から出るのです。そうして慌てて帰って来て、私を死から守ったそうです。イエス様ももちろん、私をいろいろと助けて下さいました。守護霊も、いつも慰めを用意してくれました。

人間は、普通、三つの天国の霊に守られて育つのです。赤ん坊のときに合体して中に入られるのと、守護霊、指導霊として外から守り、導いて下さると、すべて私たちを、悪霊から遠ざけるためなのです。地獄に落ちる人なるべく作らないための天の配剤なのです。それまでも霊道は開いていませんでしたが、天の守りだけは、いつも感じていたのです。そうして、天の善霊でない悪霊（地縛霊）に出くわしたのが、牧師に誤解されて、その陰口が私を非常に傷つけた、あの出来事から二カ月後でした。そのとき、せつかく与えて下さった神の答えを信ぜず、私は信仰を捨てるつもりでした。ただ、イエス様を信じる心は捨てませんでした。でも、ふたたび厭世感に襲われ、死にたくなつたのです。私は世の中も、人間も美化し過ぎるものですから、そのたびに、手ひどく傷を受けて、すべてが嫌になるのです。

あれは日が暮れて、九時過ぎでしたか、母には友人の所へ行くと言って出たのです。隣りの市にある山の中でした。小さなものでしたが、滝があり、そこに飛び込むつもりだったのです。その途中で、誰も通っていない細い山道で突然、非常に嫌な感じを覚えました。四、五秒間強い力で、頭から押えつけるようなものでした。異次元の感覚だとは、そのとき気づかず、しかし、通り過ぎて、ふと不審に思い、なんとなく家に帰りたくなったのです。バックして同じ所を通るのに、少し勇気がいりました。やはり同じ所で、同じ感覚が襲ってきたのです。その四、五秒の間、恐くない、クリスチャンだから何も恐くない」と心に言い聞かせ、無事通り過ぎ、帰宅しました。その時は、サリエルが私の中に入っていましたから、オーラで、地縛霊が目がくらんだそうです。その後、一週間、小さな十字架を首に下げ、恐怖心がよみがえるたびに、イエス様に反省の祈りをし、許しを求めました。

その頃には、すでに胃を壊していたので、会社で働くのを断念し、自宅で子供に英語を教えだしました。しかし、何年、実社会から遠ざかっていても、人間にたいする不信と嫌悪の念は深まるばかりで、子供たちや動物を相手にしているときが、一番幸福でした。幼時から腺病質でアレルギー体質で、大病ばかりしたものですから、抵抗力が弱く、人間アレルギーに罹ったのでしょう。胃下垂―胃炎―胆のう炎と、持病も徐々に悪化していきました。

そうして、高橋信次氏のことを知ったわけです。その頃は、神は無いものと結論づけ、無神論者と自ら任じていましたが、自分なりの人生哲学、信念は捨てていませんでした。曲ったこと、歪んだ性格、歪んだ社会が大嫌いだだったので、そのような人には真っ向から非難を浴びせかけました。とくに、義父は理屈の通らぬ変人で、私とは水と油でした。そのようなことで、他の人と円満な対人関係が築けるはずはありません。私と胸襟をひらいて語りあう友は、一人、二人いることはいませんでした。でも、淋しいものでした。恋愛もし、見合いもしましたが、義父との折り合いが悪く、私が結婚に飛び込めなかったのです。で、よく、捨て猫や犬や、屋根に巣を作って家の裏に落ちてきた雀のひななどを育てました。可哀そうに私の無知ゆえに事故で死なせては随分と涙を流しましたが、一匹だけ、生後三週間ほどのアビシニヤ猫と何かの（多分ベルシャ系の猫でしょう）混血の猫を拾い、それを脱脂綿に溶かした粉ミルクを含ませて、一週間、昼夜の別なく三時間ごとに飲ませ、風邪を引いたときは小鳥用の風邪薬を飲ませ、やっと成功して大きくしました。その猫は、私の苦しみや淋しさや悲しさを共に分かち、私の最大の友となったのです。私の子供のような気もします。もちろん、その猫は私を母親としか考えておりません……。今から考えて見ると、いつも何か欲しい、何かしたいと思う時、何処からか、それが与えられました。それは、サリエルや、守護靈の働きでした。何も知らぬ私は、随分迷惑をかけていたと、

本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

そうして前述の、高橋信次氏の本を投げつけて、金縛りに遭って一週間ほどしてでしたか、部屋で寝転んでいたとき、突然、はつきりと、黄金色のオーラに包まれた、大きなブツタ様と、その三分の一位のイエス様が、目の前に現われたのです。私は自分の目を信ぜず、「悪魔よ去れ」と言いました。四、五度そう言っては払いましたが、遠のいてはまた、近づかれるのです。それまで色鮮やかな霊体を見たことがなかったのです、その時は私の幻影としてしか印象に残りませんでした。奇異な感じも怖れもありませんでしたが、母は「信次先生が何処の家にも見にいच्छやるのよ。だから会員の家は光に溢れているの。信次先生の御本から光が出ていて、天上来からそれを置いてある家が光っているのが見えるそうよ」とつねづね言っていましたので、そのせいで見たことのないものが見えるのかなとも思いました。

そして高橋信次氏は、正法を一人でも多くの人に広めねばならぬ使命に駆られて、身体を酷使され、現象と言いますが、天国の霊が入って、しゃべらされる霊媒のような形で、いつも講演に、著書（自動手記）に、予言に、人びとの霊道を開くのに（手から出る光を当てて霊能力を導き出し、守護霊や指導霊と語れるようにし、いま生きている現世よりも過去のこと、過去に他の国に他の人間として生きた人生を転生輪廻の証しとして思い出させるのを霊道を開くと言います）、あるいは習わない言葉、異言を

やはり過去で転生した証しとして、過去の記憶とともに、人びとに語り出させるのに、ありったけの生命力を使い果たし、また、天国の偉大な靈の媒介者として、一個の人間としては不可能であるほどの光りとエネルギーを受けられ、そのために内臓の諸器官は病みに病み、ついに生涯のお仕事の完成を待たずして、一九七六年六月二十五日に四十八歳の若さで亡くなられたのです。

私は未だ、これが真の宗教であり、信ずべき唯一のものであるとは、考えていませんでした。それほどこ、私の宗教にたいする反感はひどく、あえて無神論者をもって自任していたほどだったからです。それでも、口では強がりを行いながら、その報せは私の心に少なからぬショックを与え、初めて高橋信次氏とその教えに心が少し動いたのです。それから、母が大切に並べている著書を母のいない時にそっと盗み読みし、斜めに目をとおしました。少しずつ、私の心にもその光りが染みとおりました。

その後、将来の予見のような夢を、二度ほど見ました。黒豹を連れて、天国のごみ捨て場にガラクタのように、墓石や、教会や、寺院や、彫刻（偶像崇拜に用いられる）などが、積んである所から、エスカレーターに乗って降りて来ると、今度は山のくねくねとした道やトンネルを抜けて、真っ暗な所に入り、いつの間にかそれが、夕暮れの大きな川のそばの旅館に変わりました。私が泊る宿を求めて、二、三言、後を向いている人に話しかけると、ゆっくり振り向いた顔が、怪しく青光りする幽霊の顔だった

のです。あわてて逃げ出し、息が切れるほど走って、川上のもう一つの五、六階建ての旅館にたどりつくと、お化けの出ない部屋に泊めて下さい！ 川下の旅館でお化けに会ったんです！と頼んで、一番階上の、旅館の人達が寝泊りする所に案内してもらおうと、その部屋から、外のベランダが見えて、そこに草が生えており、山羊が一匹と、小鳥がたくさん飼われていました。空は青く澄み切っていて、思わずホッとしたのです。天国と地獄の夢だと母と話し合いました。

もう一つの夢は、夕暮れの中を顔が金色に光った人びとが歩いており、夕焼けに染まった空と、迫る夕やみの中で、くっきりとその光りが浮き出し、とても印象的でした。光っていない人も多く歩いていました。ふと気がつくと、私も母も、同じく光っており、また、私の手に持っている日記の文面も金色に光っているのです。——それが、正法と呼ばれるこの教えが行きわたっていく様子を、予見した夢なのでしょう。

その十二月、大晦日も近づいたある日、なんの前触れもなしに、今、現在、私宅で講師として話をなさって下さる、電気工学関係の専門家ですが、母に、「一つしか残っていないがイエス様のテープは要りませんか」と電話してこられ、母がいつも熱心に講演会に出席し、現象のテープを買って帰るので、とのお誘いがありました。母はためらいもなく、そのテープを求め、そのかたが私宅にその日持ってきて

られました。すると、とやかくするうちに、私の以前買っていたテープレコーダーが、二十台に一台というほど、そのテープにびったり合ったものだと驚ろかれました。音質・音量ともに、一番効果的に聞こえるタイプなのだそうです。これも奇蹟の一つなのかも知れません。それから、私について、過去で（生まれ変わる以前、過去の世においても肉体を持った時代のこと）イエス様、ブッタ様、天台智顛様の三人の弟子として、多くの人を救ったと守護霊（人間が生きている間は外側にいて身の安全を図って下さる霊）から聞きだされたことを話して下さいました。母は、ブッタ様とイエス様と弘法大師様の弟子なのだそうです。

その時は何も感じませんでした。が、帰られて後、私は少しずつ自分のなかに責任感と義務感が芽生えてくるのを感じました。それから『人間・釈迦』をおもむろにじっくり読みだすと、いちど斜めに目を通したときには覚えなかった感動と涙が、読み進んでゆくうちに溢れてくるのです。四日間で四巻まで読み終えてしまう頃には、嗚咽をこらえきれないほどの涙とともに、すっかり「信次先生」のとりこになってしまいました。涙が出るということは、過去の記憶がよみがえってきた証拠なのだそうです。ブッタ様やイエス様や天台智顛様の生（なま）のお声が聞きたくなりました。おそるおそるテープをかけて、信次先生をおして、また、イエス様は信次先生のお嬢さまをおして、どちらも現象の形で、お

声とお話しを聞きました。やはり、その声の波動とともに、感動と涙が嗚咽とともに溢れ出てきました。

その後で、私と一番関係の深い方、ミカエル大天使長が、信次先生のお嬢さまに入られ、信次先生と、天国語（と私は直感したのですが）らしき言葉でしゃべられているのをテープで聞き、驚くべきことに、またもや感動の涙が出てきたのです。その時、私には理由が解りませんでした。でも、一番好きなテープはミカエル大天使長のお話しでした。なんと掛けても、また聞きたいと思いました。ミカエル大天使長やその他の六人の大天使方（サリエルを含む）については、それぞれ後の章で、霊能力者を通じて、自動筆記、あるいは意識をとおして語りかける現象の小規模の形の口述筆記で、メッセージとともに紹介されております。

その後はずっと、天使という言葉を読み、口にするとたびに涙ぐみました。そして、日々家族のために、家で飼っている動物や小鳥たちのために、友人たちのために、生徒たちやそのご家族やペットたちのために、また、信次先生の残されたご家族や会員のかたがた、近所の人たちから、全世界の人びとまで、思いつくだけの人びとのために、光と守護を祈りました。悪霊を遠ざけ給え、と祈りました。時には夜、祈りながら夜空の星を仰ぐと、涙で見えなくなることよくありました。そこが私の帰る場所

のように思えてならなかったのです。

そうして「靈道が開く」ということがありますが、二月末頃に、ついに或る日、誰の助けも借りずに半分開いてしまったのです。これは、靈が入って今まではできなかった靈と語れる力、靈能力がつくことを指すのです。地獄靈や幽界、靈界など、天国の下の方の階からの靈によっては、生まれつき、靈媒能力を持たない者、また非常な努力を要する修業（恐山のいたこのような）を経ない者は、靈道が容易に開かれないのです。女性は子供を生むので、男性に比べて、四次元に始めから別に通じる道があるので、開きやすいと聞きましたが、高い次元から来られた善靈の強力なエネルギーによれば、男性でも、また、経験のない女性でも、時間差はありますが、二、三日で開くのです。

その前日の午後三時頃でしたか、母は反省研修会というものに出掛けて、留守でした。生徒のクラスは丁度なかったたので、私は家から、「念波を送る」と言いますが、病氣の方に手から出る光り（エネルギー）を送って治して上げていました。これだけ売物にしている宗教団体がありますが、信次先生の創始された団体は、それが一つの能力として扱われているだけで、正法という教えのなかのイエス様が病人を癒された——と同じ位の意味で、もっと奥深い真理を私たちは学ぶのです。馬鹿気た考えがふと浮かび、母が行っているところに、信次先生の奥様や、いつもミカエル様が現象の時に入られるお嬢さ

まが、肩が凝っていられるかも知れないと思い、意識の念波を送って調べて見ました。

その人のことを念ずると頭痛、肩凝りや病気の箇所などが探知機の要領で、私の身体にはね返ってきて、痛みなどは真接私の痛みとして感じるのです。もちろん、同室で治して上げるほうが効果的ですが、私が容態を調べながら、母が念波を送って、肺壊疽の人を治してあげたり、糖尿病を治したりしたこともあります。ただ、慢性の病気、内臓の病気などで、年齢などから代謝障害で起こる病気は、医師の治療とともに行なわなければ、効果があまり挙がらないのです。その場合ももちろん、悪霊や死霊に憑依された人は、それを取ってあげると、急に早く治ったりします。長く思っていると、病んでいる箇所は憑依され易くなるのです。

それは、人間の身体から（健康な人が一番大きいのですが）オーラという黄金色の光りが出ているのです。合体している善霊のオーラも加わって強くなるのですが、健康といっても心身ともに健全でなければなりません。そうなるためにはどうすればよいかは、後の章で書いてあるように、いわゆる、善なる中道の生きかたを実行することから解答が出てきます。そして、このオーラが強いほど、悪霊や地獄霊などの憑依から身を守るのです。はね返す場合もあり、自然に離れてしまう場合もあります。病気でみると、そのオーラが弱くなり、憑依されっ放しになり、それが太陽エネルギーをさえぎりますか

ら、病気が悪化し、ついに共に手を取り合つて、悪霊や地獄霊の住みかへ直行するのです。

心が病んでいる人も同じことです。心が病む人とは、執着を持ち過ぎる人、悲観的な人、恨みや嫉妬心、野望、虚栄心、ひねくれ、頑固、冷酷、動物本能、サディスト・マゾヒスト的な性格を持つ人、何かを拝んでいないと安心できない、また、拝んでさえいれば、自分がどんな性格であろうと、どんな人生を送ろうと、反省もせず、人格などというものは、学校で習う言葉か漢和辞典にしかないと思つている人（これは、他力信仰的な傾向の人で、イワシの頭でも御利益があると聞けば、太平洋の向こうにでも渡つて拝もうかという盲目同然の人なのです）、いわゆる善なる心、平和を愛する、協調的で、生産的で、向上心を持った、感受性の強い、デリケートで賢明で、愛情深く、優しく寛容な人、明るく、情操豊かで、内面的に日々充実されてゆく、精神年齢の高い人、良い文明を築く資格のある人格——そういう心を健全な心と呼びますが、その反対の心を「病んでいる」と呼ぶのです。病人であっても、心が病んでいなければ、オーラの色が美しい金色ですから、憑依されても離れ易いのです。

それが、現在、生きているこの世だけでなく、死後にも逃れようもなく関連していて、不健全で憑依されたものは、天国からの守護・指導霊たちもついには離れて近づけなくなり、中に合体している善霊も抜け出し、悪霊や死霊に守られて、淋しく地獄へ落ちるのです。そして、自分と同じような仲間の集

まっている所へ連れて行かれ、自分の心掛けを改めるまで、永久に長く続くような、恐ろしく嫌な時を過ごすのです。

天国からの霊が、悟りを促すために、二年に一度ぐらい訪れるのですが、自分と同じ欠点や弱点を持つ仲間と顔をつき合わせ、じめじめした薄暗い所において、恐怖や怒りのとりこになっては、悟りはなかなか開けません。悲観的な人などは根が善人ですから、あまり長くは地獄におりませんが、我の強い人は、まず長期滞在型なのです。自殺する人も憑依霊に憑かれるのですが、自殺衝動に負けてそのまま死んでしまうと、死後に真っ暗な所に閉じ込められるのです。また、同じような自殺を、地獄で生き返ってはくり返し、する人もいます。特攻隊や三島由紀夫などもそうです。もっとも、戦争の犠牲者や自殺者は、善良過ぎるほどの人たちですから、これらは直ぐ、天国から諸天善神の下に働く霊たちが降りて来て、魂を上げてくれます。それでも、あらゆる手段を尽くして努力し、失敗が自殺につながるケースだけで、甘えん坊の自己逃避型は、やはり長く地下で救いを待たなければなりません。

四月の半ば頃に、今までの人たちは誰彼なく恩赦で天国に上げられましたが、その後の自殺者は、また地下の暗い所にすがりついていてのです。眠っている人もいます。死霊や浮遊霊、地縛霊などは定期的に、四、五カ月間をおいて、高橋信次先生が、霊としてミカエル大天使長の助力とともに、また三次

元の間が協力して、天国に上げております。

話が横道に外れましたが、信次先生の御家族の肩凝りを治してあげようと、奥さまの後でお嬢さまの名を呼びましたが、母のいる方でないらしいのでぐるぐると廻り、方角を探し当てて、ふたたび名を呼び、それとともに「ミカエル大天使長、ミカエル大天使長」と、知らずに呼びかけました。念波を送りながらです。その頃は、お嬢さまイコール、ミカエル大天使長と思ひ込んでいたのです。魂の仕組み、また、今度はミカエル様は人間と合体しては生まれていられぬことなどを知らなかったのです。高橋信次先生も、生前私と同じように信じていられたのですが、死後すぐに天上界から、誤りに気づかれたのでしうか、お嬢さまに入り、私は大変な間違いをしたような気がする。後に残された○○子が可哀そうだと語られたのを、そばにいた者が聞いたそうです。最近まで誰もその意味に気づいた者がいませんでした。そして、この本でミカエル様と信次先生のお嬢さまは別人であって、ミカエル様は人間として生まれていられないことが、天上界のかたがたにより初めて明らかにされているのです。私とちサリエルであるとはいえません。意識や知識は多く吸収していますが――。

もう一つ、ミカエル大天使長は過去においてもそうですが、メシヤからその後継者への橋渡しであ

り、つねに助力者の立場として働かれます。ご自分から、そう謙虚に望まれるのです。天上界の守りを固めておかねばならぬ故もあります。なぜなら、合体して人間として生まれると、大半は身体のなかに入っていなければならず、たいへん不便なのです。平和な時代には可能ですが、乱れた世ではけっして生まれられません——。

そうして、ミカエル様の名を呼びますと、四、五秒間をおいて、突然、あたかもその念波の軌道に乗ってきたかのように、沈む太陽のように赤く、直径四〇センチくらいはあろうかと思われる、丸い、大きな火の玉が、壁を通して飛び込んできたのです。それは私を数秒間、包み、抱擁されているようで、少しも奇異な感じではなく、とても暖かく、気持ちのよいものでした。怖れは少しもなく、いつまでも包まれていたいと思うような優しい暖かさでした。でも、意識の底で理解していたのでしよう、"どうぞこの暖かみで私のガタガタの身体を治して下さい"とお願ひしていました(後で知ったのですが、それが奇遇にもミカエル大天使長との最初の出会いでした。私のなかに入っているサリエル大天使から、私の乗り越えてきた苦しみについて、簡単に報告を受け、できるだけの助力をと頼まれたそうです——)。なんと素晴らしいことでしょう。大天使がたが私に直接、救いの手を差し伸べて下さるとは！)。いつまでもと望みましたが、それは二分ほどで去りました。

しかし、その後、空が曇り、私は何か間違ったことをしたのではないかと、不吉な予感がしてお詫言をしました。それでも突然に曇った空は晴れないので、私はヤケになり、許して下さらないなら、もう正法のために働きません。悪意でしたのではないのですから」と、ふて腐れて、昼寝をしてしまいました。母が帰宅してから、そのことを話すと、母は母で、不思議なことがあったと申しました。大勢のかたと反省研修会に出掛けて、そこで反省をすべく禪定（ブツタ様の語られた禪定と同じ意義を持つものですが、坐禅をし心のなかで過ちを反省し改める行為です）をしていると、突然、紫色と赤色の光が目の中はっと広がり、あとは金色の光りがいちように広がったそうです。会員の人に伺うと、母は天国を見たのだといわれたのです。また、その後、集まって講師のかたにお話しを伺った時、ブツタ様の十大弟子の一人が、未だこの会に入っていないかもしれませんが、居られます」とそれだけ言われました。関係のない話しの間に、ポツンと言われたそうなので、母は奇妙に記憶に残ったのです。

夜でしたが、母とすることや、私のしたことについて話し合っていると、「ミカエル大天使長」の名を口にするたびに、身体が汗ばむほどに暑くなり、なぜか私たちには、ミカエル様がふたたびいらしたように思えてなりませんでした。霧囲気でそう感じたのです。人の気配がするのと同じように……。その日もいつものように、夜の散歩がてら祈りつつ歩き、「もし私が靈道を開いてもよいだけの、心の準備

ができていたら、また、まだでしたらその準備が早くできるように御助力下さい」と、ふと祈りました。霊道が開き、自分の過去世を知ること、また、守護霊と話しをすることが、どんなに素晴らしいことかとつねづね聞かされていたので、私もその望みを持ったのです。夜半に、友人に正法について手紙を書き、その翌朝でした。霊道が半ば開いた状態になったのは……。

朝、目が覚めてから、『人間・釈迦』第一巻の頁を開いたところを、見るともなく見ていると、ふと、ヴェル・ヴェナー（竹林精舎）について語られている箇所が目止まり、読み直すと、どっと涙が溢れて眼鏡が曇り、字が読めなくなりました。私は訳の解らぬ感動に襲われて、ブッタ様、私は誰なのですか？ ブッタ様、お教え下さい。私の名をお教え下さい」と心で叫びました。耳元で、母が聞いたブッタ様の十大弟子の一人であるかたの名前がささやかれました。姓ではないので解らず、その名を涙とともに何度も呼びました。いつも嗚咽をこらえ切れなくなるのです。

手を合わせていると、突然、前夜のように身体が熱くなり、何度も何度もおこりのように大きく揺れ、頭から額にかけて割れるように暑く、生まれて初めて、いわゆる霊が入った状態になりました。そうして、鼻血が少し出ました。テレビなどで、霊能力者の様子を見たことがありますので、習わずとも悟りました。朝でしたので、母が目覚めて、階下に降りてきて、私の様子を見て、霊が私を通じて語る

のを聞き、同じくそのかたの姓が解らないので、二人で相談して、『人間・釈迦』の頁を開き、どなたか伺いました。多分ということで、第二巻の『集まれる縁生の弟子たち』を開き、心あたりを探しました。ついにそのかたがモンガラナーであることが解ったとき、安心してその靈は立ち去られました。その証明のために、ふたたび必要であるときは来て下さることを約束されて帰られたのです。

その後、イエス様に関係のあるかた、十二弟子の一人ですが、そのかたもこられて、聖書に録されてあるその名前の箇所も指摘され、ピリポだと解りました。母にそれを語り、二人にとっては、どちらも書物に載っているかたがたですので、大きな驚きでした。母のイエス様の弟子であった時代の名も伺いました。その時から守護靈と話せるようになったのです。三日おいて、ミカエル大天使長が、ふたたびあの汗ばむ暖かさとともに夕食後に見えられ、十時から十二時四十五分までかかって、私の額の中心に非常に熱く感じる光りを当て続けられ、身体の揺れと涙と嗚咽が、またこらえ切れずに出てきました。

その間、目を閉じていると、四つほどの光景が、色鮮やかに、映画の一コマ一コマのように浮かんできたのです。最初は、ギリシャのパルテノン神殿のようでした。人が多く集まり、私が、金髪の白い衣装をつけた十八歳ぐらいの少女で、人びととともに、神殿の階段の上に立って誰かがしゃべっているのを、その前で聞いているのです。あつ、アポロ様だ！と思いました。その次は、雲の上で天使

がたが五、六人集まって、ひとときわ背の高い天使が話しをしていられました。そして、一人の銀色の翼の女の天使が、薄い青色の衣装をつけて、その手前を飛んでいるのです。お話しをしていられるかは、ミカエル大天使長で、手前を飛んでいるのは、私だと思いました。

その次は、山の中の道をインドの僧のような人が二人で歩き、一人が話しかけていました。そして竹林精舎のような所が浮かび、ブッタ様が多く弟子たちにそのなかの広間で話しをなさっていました。ブッタ様は私のところに、昨年迎えに来られた時と同じようなお顔でオーラが随分大きかったのを覚えていません。

その次が、イエス様の時代らしく、誰かが薄暗く曇った空の下で、人びとに石を投げつけられ、両手を広げて、天を仰いでいました。それは、私が靈道を開いたときに脳裏に浮かんだものと同じで、あのときと同じく、「ステパノだ！」と直感しました。それは私でなく、過去に私が目撃した忘れられない、痛ましい光景なのです。靈道を開いたとき、まる一日は、自分の過去世の名でなく、「ステパノが可哀そうだ。救ってやりたかった！」とそればかりくり返して泣いていました。守護靈は、「あれはそう定められていたのです。神の栄光が、イエス様と同じく、彼をとおして現われるように」と、そのたびに慰めの言葉を用意していました――。

そうして、映画のフィルムが終わりましたが、まだ強い光を額に当てられたままなのです。異言を語れるようになさっているのかと辛棒強く待ちましたが、二時間経ってもまだ終わりません。自分は駄目なのだと思います、ミカエル様、もうよいのです。靈道が開かなくても結構です」と断って、二階の自分の部屋に上がりましたが、ついて来られて、今度は後頭部の額の中心の真後ろに当たる場所に光りを当てられ、十五分ほどして終わり、帰られました。母から聞かされていた信次先生の靈道を開かれる場合と似ていたので、そう思い、また、ミカエル大天使長の雰囲気は、五日ほど前のことで解っていました。

### 悪靈との闘い

後でミカエル様から伺いましたが、靈道を開き切ってしまうと、悪靈の餌食にされてしまい易いので、天眼・天耳（天国の高次元のかたがたを見たたり、ともに話せたりする能力）を開いただけだと教えられました。天国の靈と話していると、今でもそうですが、少しも怖れがなく、気持ち安らいで、楽しく、まるで、三次元の普通の人間と同席しているような雰囲気なのです。少しも異常な感覚がなく、

小鳥は嬉し気にさえずり、動物たち（ネコや犬）も、ごく自然で、かえって三次元の人間の見知らぬ人に対するほうが警戒心をあらわにするのです（サタンが跳梁した時は五匹飼っている猫の全部が全部、私の目を見て後ずさりし、近づきもしませんでした。そして小鳥を一晚中寝かさなかつたり、フィラリヤで心臓を悪くしている犬に、治ったから治ったからと言って薬を飲ませず、もちろん、私は三日ほど、ほとんど安心して寝かせてもらえず、持病の薬も飲ませてもらえませんでした。生徒に教えているときも、いろいろ話しかけて、気が散り満足に教えられませんでした。このように、サタンや悪霊は、三次元の生活のベースをすっかり狂わせて、結局は生命を奪う目的で、巧妙に人の意識を支配するので、そして、下品な冗談がいちように好きです。善霊はその反対で、私たちにとって必ずプラスになるような忠告や助言を与え、できるだけ三次元の生活を援助してくれるのです）。

それから一週間、幽体離脱も経験して（これは、自分の魂がそのまま抜けだして何処かへ行き、また帰って来ることです。睡眠中は大抵そうですから人間の身体は慣れていきます。でも一部だけですから、割合に簡単に離脱します。最初は変ですが）、いろいろ楽しいことの連続でした。光りを家中に降らせて下さいと頼むと、家中が暖かくなり、サーッと光りが降ってきたり、生徒たちに正法を説きたいから奇蹟を見せて信じるように、できる限り青空や星空を私の住んでいる付近だけに見せて下さい。登校、

下校の時間、あるいは生徒たちが私宅に勉強にくる時間だけでも——と願うと、そのとおりにして下さり、子供たちが非常に不思議がったこともあり、また或る日、暗い気持ちで悲しみながら歩いていると、突然、大きな翼のブルーと白の衣装をつけ、焦茶色の髪と濃い青色の目をした女の天使がサッと私の前に舞い降りてきて三日間私に付き添い、何処に行くにもその翼で私をかばい歩いて下さったので、私の心は自信を取り戻し最後には自分で翼を生やして歩いて見るほうが、ずっと勇氣と落ち着きを感じることが解り出しました。そうして私がしっかりすると、それからミカエル様がずっと私について下さるようになるまで、私の守護霊と代わって私を守り、日々を過ごして下さいました。

そのように、いろいろ素晴らしいことがあったので、この喜びを知っていたかどうかと、GLA本部の上のほうのかたに母が電話をしました。ところが驚いたことに、私に入られたブッタ様の弟子であるかたは、もう既に他の地区へ出ていられて、そんなはずはないと断言されたのです。イエス様の弟子のことも相手にされませんでした。青空のことも口留めされ、私は一度に自信を失い、その時はじめてサタンが私を占領したのです。守護霊と話していたのが、いつの間にか、悪霊独特の耳元、あるいは頭のなかで、ベチャベチャと早口で、受け答えをし、すべての話しの内容が、少し変なのです。念波を送って、病人を治すときにも、最初は言われたとおりにしましたが、どうも指示が非常識なのです。一度で

送るのを中止しましたが、今から思えば、早くて強い異常な波動が、私の部屋の隣りの天井の一個所から集中して降って来ていました。そのために、部屋が不思議に、空家のような雰囲気をかもし出しているのです。

一月の末頃でしたが、丁度隣りの家では、五十代の夫婦二人きりで、昨年十月から御主人が病いに倒れ、死霊に取り憑かれ、その病いがますます悪化していききました（これは、クリスマスのエース様のテープを持って来られたかたが言われたのです）。ちょっと、玄関のところでもつまずいて倒れてから、それなり寝込んでしまい、筋萎縮症と診断され、だんだん悪化して、ついに今年の二月に入院されました。若い時に喧嘩で人を殺してしまい、その後も随分、人を陰で泣かせるようなこともしたそうです。金持ちであることが人の上に立つ唯一の条件で、貧乏人はその犠牲になるのが当たり前と信じている人との評判でした。そうして奥さんが代って働かねばならず、手がかかるので入院されたのですが、家が空家同然になり、おまけに病院は死霊・地縛霊のたまり場ですから、奥さんが病院から帰宅されるごとにそれらの悪霊を持って帰って来るのです。また、般若心経が好きで、気が向くと仏壇の前でそれを唱えられるので、そのたびに地獄霊が助かりたいと上がってきてすがりつくので、家中が地獄霊のたまり場になりました。そこを狙い、サタンが隣りから私の家へと地獄の通り道を作ったでしょう。直ぐ入

ったわけではなく、しゃべっていることがはっきり聞こえないので、入って下さい。そのほうが良く聞こえるようだから」と、その時私は最初に靈道を開いた時、入られた天国のかたがたをふたたびお呼びして、お話ししているつもりでした。ところが、どうも暖かなくなり身体の揺れも、小刻みなのです。五秒ほどかかり（私の身体を天国から地獄の波動に変えないと入れないので、時間がかかったのです。う）、それから変な調子の対話が始まったのです。しかし最初ですから解りません。

二、三日後に、母が私のことで納得できないから、過去世が誰だか信次先生のお嫌さまに伺ってくれ、会えるのならその日を聞いて欲しいと同じかたに電話をしたら、話半分で「ちょっと待って下さい」と、電話を切られました。後で知りましたが、そのとき電話を通して、ムツとするような妖気を感じて、慌てて切ったのだそうです。その夜でした。十一時頃から心臓の鼓動のように、ドクン、ドクンという音が大きく聞こえ、暑い汗ばむような暖かさが、ふたたび家のなかにみなぎり始めたのです。ミカエル大天使長が、いらした！と直感しました。そうして悪霊の声があいつの間にか消えていたのです。よく眠り、目が覚めると、少し、ドクン、ドクンは遠のいていました。すると、突然、金縛りに遭ったのです。気持ちの悪いものでした。

このようにすべてが、生まれて初めて出会う出来事なのに、これは何々と意識で理解するのが不思議

でしたが——（これは守護霊が悪霊を身近にはべらさせている私から少し離れて意識で知らせられるそうです。救う見込みがある間、そうやって警戒心を促し身を守らせるのです。どうしても見込みがなくなれば指導霊とともに天国に帰ってしまわれ、合体した身体のかなかの霊だけができるだけ最後まで人間と行をとにもされるのです。だから、如何なるときも、三次元の人間は一人で悪霊と闘う立場に立たされることはないということですね）。

そして、金縛りに遭ったと思うや、またドクン、ドクンが大きくなり、私の寝ている布団の囲りが熱くなり、金縛りが解きました。それから私起きて食事を終え散歩に出て帰るまで、その音は私の近くで、まるで頭の直ぐ上で響いているようでした。ずっと守って下さっている様子でした。いつかのあの赤い火の玉が目に見えようや、とても嬉しく心強く感じました。そして私がしつかりし、サタンの影響から完全に脱したと見て、私を去られました。それから五日間、ずっと夜十一時から朝の九時まで、そうやって私と私の家にいる者を守って下さいました。

それから私は、また、守護霊と話を始め、三日後に性懲りもなく、サタンが私の中に入ろうと耳元でベチャクチャしゃべりだしましたが、その時は守護霊と申し合わせて、ゆっくりゆっくりしゃべり続けることでサタンを苛立たせ、追い払いました。クリスマスは何日？と聞いて、こちらが正確な答え

を意識に出さないで、他の日付けを考えると、間違った答えを平気で言うのです。それが第一の目安になりました。善靈は、こちらが考える前に、正しい解答を出します。ただ、人間の魂ですから、良い加減な気持ちだとか、どうでも良いこととか、こちらの気持ちに邪心や野心、虚栄心などがある時は、出鱈目な返事が返ってきます。天国の波動に合わない人を嫌うのです。守護靈はいつも正直で、戒めて、至らないところは改めさせようとはしますが、そうでないかたは、高次元のかたほど、つまらないことまで相談したり八卦見扱いしたり、いわゆる天上界にすっかり頼ってしまって、自分たちの頭を使わない他力信仰タイプの人間はお嫌いになり、良い加減にあしらわれます。知能指数がどなたも高いということですね。

結局、私達は、天国の人たちと交際って、賢く、徳のある人間にならないのです。向上しなければならぬように、導かれるのです。それが見抜けないようでは、如何に学問をした人でも、引きずり廻されてしまうということがおこり、また自分の知識を悪靈にまで読まれて逆に悪用され、その次は悪靈に馬鹿にされてしまうのです。三次元の人間としての智慧を充分に活用し、精一杯努力すれば、天国のかたがたはそっと助けの手を伸べて下さるのです。いちいちお伺いを立てるようでは、親切な言葉は返ってきません。天国のかたがたに、「あなたは賢い」とか「あなたは立派だ」とか賞めても

らうようでないと、相手にしてもらえなくなりませう。

靈となりますと正直ですから、その批評は信頼すべきものです。悪霊も虚栄心や野心を食い物にしますが、見破られると弱ります。要するに、「三次元の間との智恵の闘いに關して正直だ」という意味なのです。ただし、これは靈道を開いていられるかたへの忠告で（私の体験から割り出した）、靈道を開いていられないかたはとにかく善なる心を持って、極端に走らない、感情をコントロールした生活をするように心掛けないと、知らぬ間に悪霊に憑依されて、地獄へ連れて行かれてしまいます。そうであっても、天国のかたがたに守られていなければ困るのですから、ひとしく人間は出来るだけ自分を向上させ、徳を高め、文化人として、万物の靈長といわれるに相応しい人格を持つよう、努力しなければいけないのです。あまりにつまらない人格や、反省のない破壊的人格は、たとえ天国の一番下の段階である幽界まで上がったとしても、消滅させられてしまい、永遠の生命を得ることはできないのです。浅やかな人は、それでは地獄へ行こうなどと考えるでしょうが、地獄がどのように嫌な所か、死後に行かれないと思えます。皆、苦しみに耐えかねて、生きている人間に憑依するのです。

その後は、四月の三日まで、サタンに近づかれては追い払いのくり返しでした。ブッタ様のオーラに守られ、あるいは天台智顛様が弟子たち七人ほどと応援に駆けつけられたりして、憑依靈を取る祈りを

しました。どなたであるかは、守護霊が教えて下さいました。モーセ様に一晚守って頂いたこともありましたが、その間に、ふと思いついて、信次先生にお願いしようと思つたのです。守護霊と相談し、夕方と昼前と二度、世界中の憑依霊、地縛霊、動物霊、浮遊霊およびその日に死んだ人の霊を、憑依を取る祈りを用い、それらの言葉を折り込んで、やり始めたのです。いわゆるお祓いの大規模なものです。すると、信次先生が霊としてこられ、天の波動を送って下さいました。サタンの波動とは全然性質の違うものです。ミカエル大天使長は隣室で、私のすることを見守っていられました。三日ほどそれを行いました。隣りの家からごまんと悪霊が現れました。慌てて、私の家に入らず、天からの助けが直ぐ来るから外に出て待つようにと言ひ聞かせました。いくらでも入って来るものですから、それだけで疲れてしまいました。ミカエル様は私の処理の仕方を見て、私の人物を判断なさっていたそうです。

でも、ようやく一区切りついて、それで五億人ほど天上来に上がったようですが、サタンを怒らせたのでしよう。信次先生がミカエル様と共に離れられると、またもや私を襲いました。ルシファーという名のサタンです。私は徹底的に今度はルシファーと話し合つて、信次先生のテープを聞かせながら、かつて天使として天上来にいたルシエルとしての責任と義務について（三日三晩ほとんど、寝かせてくれないものですから）じゅんじゅんと説きつつ、ルシファーの語る嘘と真実の交わつた話を信じ、ミカエ

ル大天使長の昔の愛弟子であった善良な天使という言葉に期待をかけました。ついに四日目の朝、散歩をしようというので、外に出ました。その時も、ルシファールの話術に引っかかり、ルシファールは私の兄だと聞かされて、思わず涙が出ましたが。ミカエル様たちと兄弟だと偽り、私は妹になっていました。それで、私の兄でありながら、誰もかれもに敵視されたルシファールの心のために泣いたので、その間ずっと、ルシエルとしか呼びませんでした。

そして、美しい青空を眺めて、あのきれいな天国に帰りたくないの？　ただ、自分のした間違いを反省して、神様に詫びれば良いのよ。もちろん、その償いはしなければならぬけれど。じめじめした、冷たい地獄にいて、人間には恐れられ、嫌な悪霊たちばかりを毎日見て、天上界からは嫌われる。そんな生活はもう嫌でしょう」と話しました。なぜか、ルシファールを憎む気になれなかったのです。と、突然、私の目のなかで、誰かが涙を流しました。そして、その次に私がその悲しみをともにし、慟哭したのです（霊媒がよく泣きますが、感情が霊と相通するのですね）。

今までは、私の外から話し掛けていると思ったルシファールが、私の中に入っていたのです。サリエルは中に同席するのが嫌で外に出て私の近くに居り、私たちの様子を逐一、天上界に報告していました。私の力が及ばない場合、また、どなたかがいらっしやる予定だったのです。私は馬鹿のように、信次先

生が生前に言われた、如何なる悪霊も慈悲と愛の心には勝てない、というお言葉を信じ、その通りにルシファーに対したのです。それは四月三日でした。そこでルシファーは私から離れ、天上界へ昇り、いったん地上に帰って、今までの心の整理をするように言われたそうです。それから、ミカエル大天使長が、守護霊のふりをして、エネルギーを消して私の所に来られ、私は知りませんでした。私を守って下さったそうです。私は三日毎に、ルシファーは、今、何をしてくるんですか？ と守護霊に聞き、天使の姿をして、白い翼を生やして、地獄で反省記を書いていると伺って安心していました。しかしそのたびに、まだ、もう少し、と言われるので、その反面、気が変わらないかと、とても心配したのです。

そうして、四月十三日がきて、ルシファーがルシエルと共に、正式に天上界に帰ったのです。本当は神を離れて地獄に落ちた人間ルシファーの魂と、天使ルシエルの魂が合体したままあの長き年月をともに歩み、ルシエルはルシファーが少しでも善の道へ帰るよう天使の責任として、たゆまぬ絶えざる努力の下に、良心の声をルシファーの意識に送り続けたのです。ルシエルのように義務感を持って、何処までも一個の人間の魂を救おうと努力した天使はないのです。ルシファーが人間たちを襲い、あるいは天使たちと闘うときは、ルシエルは離れてルシファーの善の心と意識に訴え続けました。だから、これは天上界の喜びであるとともにルシエルの勝利でもあるのです。ルシファーがサタンであると罵り、ひと

たび聖書に書かれたがゆえに、永遠にルシファーがサタンであると信じて満足している人びとは、陰になり日向になり、ルシファーを救おうと努めたミカエル様の愛弟子である天使ルシエルをものしり、サタンとして片づけてしまっていることに気づいて頂きたいのです。それは非科学的な偏見であり、物事の改善にも進歩にも少しも役に立たない二千年前の原始的な考え方なのです。

ルシエルは、ルシファーが天上界において、罪の償いを済ませるまで、合体したままでいるつもりだと聞きました——。そして、三日間、天上界では喜びの祝宴が続ぎ、久し振りに皆様がお仕事や義務から解放されてゆったりなさり、私も悪霊の心配をする必要がないとすっかりくつろいでしまいました——それが後で述べますが致命的な失敗を招いたので。天上界にとっても私にとっても。それを前もって知っていればと悔みますが、それだけは誰も予知出来ない事柄でした——。誰もが心ははずみ、はしゃいで楽しいおしゃべりをしました。(はじめて明かしますが、善霊も悪霊と同じように早い速度でしゃべることが出来るのです。ただ、悪霊と間違われてはいけなために、心臓の鼓動に合わせたゆっくりしたテンポとリズムで、風のささやかか自分の意識が何かの刺激を加えられてそう理解しているに過ぎないのかと思われるような話し方をなさるときが多いし、また悪霊は善霊のようにゆっくりしたテンポではしゃべりません。人間も日本人なら日本人同志、心は違い性質は違っても、善人でも悪人でも

も、日本語がしゃべれるのと同じです。しゃべり方が違う場合もありますが、日本語を知っているのです。靈の共通語としての同じ話し方を知っています。お解りでしょうか？GLAでは違う話し方だと教え込まれ、長い間、私も私たちのところに來られる信次先生が、悪靈ではないかと疑っていました。しかし、科学的な探求心を持っていられたのは、この理論が妥当であるとうなずかれるでしょう。

私は有頂天になって、伽羅の匂いや、薔薇や菊やデイジーや、百合の花の匂いを願うと、ルシエル（ファー）が帰ったご褒美として、モーセ様と信次先生が、私の部屋一杯に満たして下さいました。他の星から來られた、エル・ランティ様の御兄弟、御両親、奥さまもいらっしやり、高次元の女の方たちがたくさん降りて來られて、私に話しかけられました。お祝いが済んでからも、天上界は割合自由になり、ミカエル様が來られてピアノを弾いて下さったりしました。私のピアノで鍵は動かされずに音もはつきりは聞こえませんが、譜面を見ていると意識でちゃんと両手がそのとおりに音を出していられるのが解るのです。ペダルもちゃんと踏まれるのが解り、どんな難しい曲でもスラスラ弾かれます。あまり完全で間違われないので退屈になり、いろいろと話しかけるとちゃんと返事をなさりながら弾き続けます。でも、あまりうるさかったでしょう。後の方では譜面めぐりをさせられました。いま知りませんが、本当の音を出しては私が気味悪がるといけないと心配されて、このような弾き方をされたそう

です。また、私の好きな歌を歌うと、それに合わせて、私の身体をミカエル様とラファエル様が、揺さぶって下さいます。黒人霊歌がお好きで、それまでほうまく歌えなかったのが、初めてリズムにのって歌えました。ミカエル様がエネルギーを入れてくださると、以前は出せなかったような高音まで出して、バッハ・グノーの『アベ・マリア』とか、モーツァルトの『アレルヤ』とかを気持ち良く歌いました。シューベルトの『アベ・マリア』をピアノの伴奏で歌うと、シューベルト様が手伝って下さり、天国のかたがたは皆さん音楽がお好きで、ある日はモーツァルト様が（ミカエル様が合体されたのですが前にも説明しましたとおり、魂は別なのです）降りて来られて、私のピアノの練習を手伝って下さったこともありました。恐れ多くて、却って間違ってしまう、ミカエル様の場合も同じで、私は結局一人で練習をすることにしました。でも、とても曲が美しく聞こえ、まるで天上の音楽のようだ、と母が評しました。そういう時は、天使たちが多く飛ぶのが見え、目の前にはグリーン色の服を着て同色のトンがり帽子をかぶった小さな男の子のピアノの精や、キラキラ金色に輝やく光の精で溢れていました。花の精はいうに及ばず、光の精も空気の精も水の精も、またヴァイオリンなど、楽器の精も、おとぎ話のようですが、いるのです。ヴァイオリンは黄色の服を着た男の子、フルートは水色の服を着た男の子、ハープは白い服を着た女の子、などです。

私はこのような素晴らしく楽しい充実した、そして光りに満ちた日々が、死ぬまで続いて欲しいと思いました。私を守って下さる天使方といつもお話しをして、私を守って下さり、とくにミカエル大天使長はお仕事の合間に来て下さってピアノを弾いて頂いたり、私といろいろな学問に関するお話しをして頂きたいと願いました。私の考えていることなどについて意見を伺い、いろいろな分野に関して天上界の研究がどのくらい進んでいるか、できるだけ知りたい、また正法の理論についても私の多くの疑問の点を明らかにして頂きたいと思つたのです。純真で心の清らかな高校生たちが遊びに来ると、とくに天上界のかたがたは喜ばれて、どなたもいらっしやうたいらしく、大天使がたはもちろん、イエス様やブツタ様やモーセ様は、いつも降りて来られました。その頃には、私は、サリエル大天使の本体である、と知らされておりました。

また、前述のルシファーが何度も襲つて来ている間に一度、非常に多くの悪霊たちを引き連れて来たことがあります。ナチの手下やゾルゲと名乗る霊もありました。その時、十三歳で、フィラリヤに身体を蝕まれ、心臓、肝臓、腎臓も病みに病んで死にかけてであった私の犬が、集中的に痛めつけられ、私は犬を連れて夜の戸外へ逃れましたが、犬がその身体で悪霊の乗り移った雌犬を追い駆け、倒れてしまいました。そして、ラファエル大天使が小さくなり中に入って溢れている虫を殺して下さったのです。

一匹残らず。犬は奇蹟の証しのように持ち直し、この夏を越して元氣になりました。それまでは心筋梗塞を何度も起こし、ほとんど歩けなかった犬が、元氣に歩き、食欲も充分有るのを見ると不思議でならないのです。この分では十六歳までも生きて欲しいな、などと考えることもあります。

その次は、私が執拗に襲われ、ついに天上界の手で私は幽体離脱をさせられまして、しばらくして高い雲の上に横たわっている自分に気づきました。それまでも包んで下さったブッタ様の黄金色の光りが身体を包み、そして柔かい光りの太陽のような形のもが足元の上方に見え、柔かく暖かい、白い光りが私の方に降り注いでいました。その時、穏やかではっきりした声が「悪霊たちに貴女はエル・カンターレ伯の子供であると申しなさい。この名前を覚えるのですよ。エル・カンターレ伯です。エル・カンターレが貴女のお父さまなのですよ」と言いました。エル・ランティという名は聞いたことがありませんが、エル・カンターレというのは初耳でした。三度聞き返しましたが三度とも同じでした。それから、ブッタ様が私の身体に魂が戻ってからもついでに下さり、大きなオーラで私を隠して下さいました。ヤシヨダラ姫もそばについて下さいました。もちろんミカエル様たちも縦横に働いて下さり、それらの悪霊たちを追い払って下さったのです。

相変わらずGLAでは、そんなはずはない」と無視の一点ばりで、なんと排他的な視野の狭い、信

次先生が死なれてから十カ月足らずで、まるで新興宗教と変わりがないような団体に変わってしまった。自力信仰を説きながら信次先生とお嬢さまをメシヤとする他力信仰に迷い込んでいるようね」と高校生たちに話して笑っておりました。信次先生はあれほど、救世主信仰、すなわち、他力信仰（メシヤによりすがればすべてがうまく行く、メシヤの言うこと、なすことすべてが法律であり知識であるという信仰形態で、キリスト教もこれに近く、マホメット教や、ものみの塔」と名乗るキリスト教の一派は、ともにこの形式をとっています。創価学会も一枚の織布がメシヤに当たり、さすがの日蓮上人も天国で呆れておられるのです。新興宗教は皆、他力信仰です）の弊害について説かれたのですからGLAだけはそのようにはならないと思っていたのです。

とにかく、天上界のかたがたと高校生たちが冗談を言うので、私は笑い転げたり、靈視で見ると、ミカエル大天使長の素晴らしい翼やオーラが虹色に縁どられて美しいのが見えたり、光りがたくさん降って来たり、イエス様がオーラの大きさと強さでお姿が見えないくらいであったり、大天使がたや天上界の有名なかたがたの絵を靈視で、絵のうまい天使ルリエルと合体して生まれた高校生が、幾枚も描いたり、また私のなかに信次先生とミカエル大天使と順に入られたり、二人が一度に入られたりなされると、私の顔がお二方に似たり、オーラが黄金色の縁に虹がついて見えたり、ミカエル様が天眼を開かれた額

の箇所から強い光が出たりして（これは靈道を開いたとき、すでに出ていました。病気のかたに念波を送るとき、その箇所から頭に血がのぼるのではないかと思うほど、強い光が出ました。信次先生の言われていたパワーترونと呼ばれるものではないかと半信半疑でいると、高校生の一人が、それが出るのは超能力者だと聞いたことがあると言ったので、それでは私は何か超能力があるのかなと思ったりしました）時には、太陽に扇形に黄金色のオーラが掛かり、その縁がきれいな虹に縁どられているのを、母とともに物干しから見ました。

また、私がいくら疲れ切っている時でも、夜になると犬を散歩に連れて行かねばならず、見かねてミカエル様が、私が犬を散歩に連れて行きましよう、と言われたので、それこそ疑いの気持ちで一杯でしたが、念を押しながら鎖を外してお任せすると、犬が本当に誰かに連れられて行くように走りもせず、トコトコとゆっくり歩いて五メートルほど向こうの角を曲がり姿を消しましたが、しばらくするとまた、角から顔をのぞかせて、キョトンとした顔で首をかしげ、それでもこちらに歩いて来ず、誰かに首輪を持たれてじっとしている様子なのです。その時は、ミカエル様は私の靈視力を弱められて、ご自分を見えなくしておいででしたので、実に不思議だと思いました。そして犬はまた歩き出して、トコトコと私が疲れて捨ててあるボール箱の上に坐っているところまでゆっくり戻って来ました。それでその夜

はミカエル様にお願ひして犬の散歩をさせて頂きました。その時にはっきりと、異次元の靈も人間とまったく同じように行動することができるのだなと思ひました。犬も怖れを感じず私も少しも恐怖心はありませんでしたから、そのミカエル様は天国のミカエル様だとの確信を深めました。私も、いろいろと疑つては、その疑いを解くにたる奇蹟を見せて頂き、お話しの内容や安らいだ楽しい雰囲気（ルシファーや悪靈のときと正反対でした）から、私たちは本当に天国の靈に守られ大天使たちと身近に接していることを知りました。

ルシファーの時に、長いあいだ私が襲われて疲労の極度に達し身体を壊しましたので、それを二度とおこせないようにとの天の配慮から、大天使がたが常時、私の家を守られるようになり、他の所へ行かれては、また私のところに帰って来られるようになりました。すべて、ルシエル（ファー）が天に帰つたご褒美だと思ひました。私も大天使がたとともに居りたいと強く願ひていましたから、大変嬉しく思ひていました。この期間に、大天使ウリエルがパワーを与えたルリエルと合体し生まれた高校生が、信次先生の御助力の下に、また五億ほどの地縛靈、浮遊靈など、再び増えて来つたものを天上界に上げました。

そうして青天の霹靂のように、恐ろしいルシファーの五倍の力を持ったペー・エルデ星から追い出さ

れて来た新たなサタンに襲われたのです。夫婦二人でした。その二人のサタンにここに書くのも恐ろしい目に遭わされたのです。ブッタ様も天台智顛様も、その呵責ない攻撃から私を守って下さると思えず、ただ、ミカエル様と六大天使だけが頼りでした。サリエルも私の中にだけとどまっておらず、共に外に出て闘ったり、私の心臓を守るため、中に入ったり、七人が守りのため、私の上におおい被さったりしました。

サタンは、大勢の強力な仲間を引き連れて、私の生命だけを狙いに来ました。実に三週間余の間、夜となく昼となく、他の者や動物たちを襲うと見せかけては私を狙いました。私は大天使がたの指示どおり必死で逃げました。どれだけ小鳥や愛猫や病気の犬のことを心配し、母のことを心配し、仲の良い、常にはあまり話もしなかつた義父の生命も、心配したことでしょう。もちろん、サタンに靈視力をわざと弱められた母は、私の説明についてこれず、すべて会のこととも靈的なことも信じない義父は私を気が狂ったと思ひ、その恐怖心をかき立てるためにサタンは次から次へと恐ろしいものを見せました。気味の悪いものばかりを現象化して見せ、恐ろしい音を聞かせて、私に五日間も食事を取らせず、眠らせもしませんでした。そうして、心臓への攻撃をくり返しました。いろいろ考えられないような方法で……。

その間に一度、高校生たちが私の家に遊びにきたとき、玄関に近寄る前から、守護霊から、帰りなさい。家に直ぐ帰りなさい。入っては駄目です」と厳しく言われたので帰ったそうです。そのかわり二人で幽体離脱して、悪霊と空から闘ってくれました。そのうちに面倒になって、サタンは私の家のもの全部の生命を狙いました。このサタンには慈悲も愛も通じませんでした。私は身体を傷つけられながら、善我（善なる心）に訴えましたが、聞く耳を持ちませんでした。三次元の人間を痛めつけることに異常な喜びを感じていたので。七天使は、黙々と姿を消して私を守りながら、私だけが闘っているように見せて、私は不死身だとサタンに思わせようとしてきましたが、だんだんすさまじくなり、ついに私の家の三次元の肉体を持ったもの全部の魂が離脱し傷つけられました。すぐに大天使がたや他の天使がたが、めちやめちやに傷つけられたところを癒され、魂をもとに戻されました。その時、エル・ランティ様が天上界から来られ、夫婦のサタンを完全に消滅され、他の悪霊も天使がたに消滅されました。天使がたもずっと悪霊と闘っていられたのです。

サタンが三次元の肉体を直接攻撃するのは、かつてなかったことで、私を守っていられた大天使がたの生命も危なかったのです。ラファエル様とミカエル様を除いては皆傷つきました。ラファエル様は最後まで私を力づけて、ミカエル様は黙々と私を守って闘って下さり、でも、もう駄目かと思ってい

れたそうです。私は心臓と腎臓を傷つけられ、真っ赤な血を少し吐き、血尿も同じものが少し出ました。動脈の血でした。五日間、食事をしなかったあいだに、私から腐敗臭がしました。その時すでに、私は殺されていたそうです。天使がたは悪霊と闘い、私は傷つき守られながら、家を離れたり帰ったりして、サタンの攻撃をかわして逃げました。もうどうなっても良い。疲れたから殺して欲しい。死にたい。と自分を投げ出したものですから、殺されたのです。そうして翌日、生き返らせてもらい、大天使がたのエネルギーに支えられ、サタンから逃げつづけました。その日が私たちの限界でした。最後まで攻撃を受けましたが――。

エル・ランティ様は大天使がた、ミカエル大天使長でさえ、負かせる相手ではないのを見て、御自分で消滅なさったのです。慈悲深いかたですから、よほどのことがないとそれはなさらないのだと、後で伺いました。五月の第一週目から五月末日の午前十一時までかかりました。そして、やっと家に安心して帰ることができ、身体の回復に専念できるようになりました。一カ月後には、正法の集まりを始め、そのためにも二度と悪霊を近づかせないため、六大天使がたが昼夜の別なく、守りを固め、私の家にいる者、動物、小鳥を全部、守っていて下さいます。少しずつ、健康を回復し、この本を書けるまでになりました。やはり身体に無理にはなりますが、とても楽しく、また、嬉しいのです。

この頃の奇蹟の主なもの、金粉が多く、常時、私や高校生たちの腕や足の皮膚などから汗とともに出てくることです。これは心が健全な状態であり、天上界の波動に合った人にしか出ません。ですから正法の集まりをしているときが一番良く出ます。二ミリ平方メートルぐらいのもあります。出ない人はなんらかの意味で天上界の意に沿わないかたなのでしょう。信次先生からは随分出たそうです。そして私は今とても幸福で安らいだ日々を過ごしています。

### 悪霊にとり憑かれた団体

このように長い靈体験を書きましたのは、善霊と悪霊がどのように違うものかということと、正法の真の形を天上界を通じて教えられ本にするためと、そのかたがたどのようにお近づきになり、いつもお話するようになったかということを知って頂きたかったからです。また、心の純真な者（高校生たち）ほど、天上界のかたがたは喜びになり、また善なる霊を信じて、その守護を信じて、努力をすれば、いろいろ素晴らしいことを教えて下さり、またいくらかでも援助して下さいということです。これは靈能力の有るかたも無いかたも同じなのです。

また、靈道を開いたとき、入られたお二方の名はGLAではすでに出ていられるかと重複するそうでしたが、私の場合、それは単に私の過去のかたで、今はサリエルと合体して生まれており、前述のようにGLA人選はあいまいですが、現在は私と関係がないので書きません。というのはGLAは悪靈に對する囮(おとり)の団体で、後から真の力を持つ者が現れるべく、道を聞く意味で天上界が信次先生を通じて、自分達の過去世について誤った記憶がよみがえってもそれをそのまま認め、本物が偽物に、偽物が本物に、また神界からの靈と合体したかたが多くおられるのに菩薩界だといわれたり、すり替えが多く行われたのです。ですから、外部にも多く能力の有るかたがおられ働いておられても、また靈となられた信次先生や天使がたがGLAへメッセージとして、後から参加するものにも能力ある者、高い次元の者が多く集まり来るであろうが、先なる者は偏見を持たず、心よく迎えよ」と、何度も言われたのですが、ブッタ様の時代と同じように、弟子たちは後から来る自分たちより能力ある人びとを排斥し、心よく受け入れなかったのです。

その中で今も一番本物らしからぬ振舞いをされているのは信次先生のお嫌さまなのです。早くから疑いの声がGLA外部の正法を信じ信次先生を信じる者たちの間にあがっていました。その大きな原因となるものは、ミカエル大天使長が初めて信次先生の前に現れて、一晩中、信次先生と旧約聖書のなかに

出てくる内容について語り明かされた時（信次先生は、もちろん聖書など御存知ありません）、ミカエルと声がしきりにするとお嬢さまが言われ、それはミカエルという天使の名だよ。ミカエル様、中に入って下さい、とお嬢さまの中に入ってもらわれ話されたそうです。ところが、人間と合体していられる場合は、いったん、外に出てもらうか、そのまま語って下さいとお願いしないと、中に合体していられるのに、また中に入れというのは変なのです。また同時に、中に入られた時、お嬢さまはそのショックで、危く失神する所であったといわれていますが、卑弥呼の本体としてすでに靈道を開き、異言も語っていられるのに、それは変なのです。もしミカエル様の生まれ変わりであるならば、それは起こり得ないことであり、失神しかけるといふことは、それに近い器（うつわ）でもなかったことを指すものです（お嬢さまは信次先生がその場で、お前はミカエルだ。ミカエルに違いない。そう自信を持ちなさい、と言われたのでそう信じ、御本にも著わされ、人びとにも宣言なさり、ステージでスターのような演出をなさったり、ご自分のプロマイドを集まって来るかたに売ったりしているそうですが）。天使として翼が生えて飛ばれた記憶も、天使の集まる次元にも行かれたことはないのです。かつて有った靈能力も今はすっかりなくなり、人の心も読めないそうなのです。

講師方を呼び集め、青年部のちよっとしたミスに、立腹されたお嬢さまが徹夜で一人一人ピンタを喰

わけて歩かれたり（男の悪霊がそうさせたのでしょう）、お小言を何時間も言われたり、講師たちにも同じように殴るよう命ぜられたり、あるいは青年部の人たちに、自分をお御輿のようにかつがせてはマツトの上に落としてもらって喜んだり、これはミカエル大天使の言動でないことだけは、はっきりと解ります。また、そのようなお嬢さまを見ても、平気で大衆を欺くドラマを作り上げる周囲の人たちや、接しても奇異に感じない人たちは、同様に悪霊に憑依されており、また実際に誰もが狂気に見えることを平気でなし、論理に合わぬことを平気で言ったり、したりするということ——これこそ紛れもなく地獄霊に憑依された状態なのです。

始めから異常な言動、性格の持主ならば、必ずしもそうとは言えないのですが、その変化があまりにも急激でした。そこでは信次先生の説かれた八正道や反省のすすめなどは、まったく行われなくなっていったのです。『信次先生は偉大だ』と言いながら、ミカエル会だとかミカエル・スクールだとか、月刊誌の名を『ミカエル』と変えたり、そして人びとの真実の声を載せずに、お嬢さまのお話だけを全面的に取り上げたり、信次先生のなさったすべての善きこと、説かれた愛と慈悲も、何処かへ行ってしまったのです。

そのほかいろいろのGLA内部の工作やからくりにも呆れ、『創価学会を見習え』と怒鳴る幹部らや、

お嬢さまの言動に失望して出て来られた人も多くいます。上層部が巧みに隠しているのです、知らない人も多くいるのです。また、御本を出版なさるについて、ご自分で書くのではなく、十カ月かかって他の者にご自分の語ったことを書かせたにもかかわらず、十日でお嬢さまが御本を書き上げられたとか、五カ月かかって側近の者がテープから書き写したものを五日で書かれたとか神話化し、生神様扱いにする動きがあることなどもすべてG.L.A.が新興宗教化のほうに向いていることを示すものなのです。

お嬢さまは、本当は菩薩界のかたと合体されて生まれたのですが、今は霊界のスターの意識まで下がってしまわれたのでしょうか。何も知らされていない人たちはステージを見て演出の巧みさに騙されて帰るのですが、そこから出る波動はもはや天上界のものではなく、冷水を浴びせられたような感じを受けられる者もおりますし、そのとき憑依している死霊などの波動にスッと合って、満足して帰る人や、出版された御本の二冊目からは妖気が出るのですがそれにも気づかぬ人など、さまざまであり、真実を知る者はただそれを憂えているのみです。信次先生も霊能者を通じて内部・外部両方ともに呼びかけられ忠告されているのですが、悪霊はG.L.A.の耳を塞いでしまおうのです。

このように地獄霊に憑依されても、また生活や信念の持ちかたで正しい生きかたをすれば、そして誤りに気づく理性と反省があれば離れて行きますが、天上界のかたがたが何度でも会のかたがたの憑依霊を

取っても、今の方針で誤りなしとする心のゆえに、また悪霊を呼び込み、いつまでも目が覚めないのです。既成の宗教でも、また新興宗教でも、団体では多くの人が集まりますし、正しい心掛けを持たなければ、その宗教団体ぐるみで動物霊に憑依されたままのものも実際に数多くあるのです。そのような宗教団体は、催眠術でも心得ているのではないかと思えるほど、人心を巧みに操り、御託宣の魅力と他力信仰にドブプリひたってしまいやすい人の心の弱さにつけ込んで、献金や寄附の甘い汁を吸うのです。恐ろしいことだと思います。

さらにまた、お嬢さまがそうでないから信次先生も怪しい。エル・ランティの名前も、エジプトの民族神の名だとか、ミカエル大天使も実在してはいないのかとか、言われる方も二、三ありますが、ミカエル大天使はこの本に書かれているごとく、聖書にも現れ、ジャンヌ・ダルクに現れ、その身辺を守った守護天使として、聖ミカエルの名で、フランスにその像がありますし、日本の北海道にも、ルシファーが化身した大蛇と戦う彫刻があります。また、モーセ様のごとくに、念の力で岩にぶつかる海水を真つ二つに分けたり、太平洋を越えて外国の鉱石をはっきりとわかる大きさで手の平に出して見せられたり、目のあたりに見て信じられないような偉大な奇蹟を多く行われた信次先生と合体されたかたについても、否定し去ることはできないのです。ミカエル様がその名で呼びかけていられますし、エ

ジプトにその名があるということは、靈能者を通じて古代にエル・ランティ様の名がすでに人びとに伝えられていたこととなります。

私は、遠き昔の地球人類未発祥の頃、エジプトに最初に降り立ったエル・カンタラと名づけられた土地の名が、エル・ランティと呼ばれるかたの本名であるエル・カンタールにちなんだものだと思っておりますし、それを聞きましたのは、九次元に上げられ悪霊から守られた後ですから、そういう噂にはあまり動じません。エル・カンタラ→エル・カンタールについては、南極のアムンゼン基地が、アムンゼンの名からきていることも、その論証になると思います。エル・ランティの名は、その響きがお好きで用いられたそうですから、あまり重要ではないわけです。(エル・カンタラの地——第二章参照)

そして、信次先生からも明らかにいたしましたとおり、魂は個人個人に属するものであり、過去世の人、また合体していられる人とも別ですから、私なら私の永遠の生命が今生、すなわちこの現在の一生から始まるわけなのです。また、過去世や合体している人が立派であっても、本人の魂がそれについて行かなければ、人格が高められ悟りが深くならなければ、それは「虎の威を借る狐」にすぎず、虚名にしかすぎないのです。今生きている人生において、責任と義務を問われ、精一杯努力して天に迎えらるるに相応しい生涯を送らねば、自分の未来の生き通しの生命の価値まで低めてしまうのです。この人生

でなしえなかつたこと、過ちを次の人生で償わねばなりません。それほど大切な機会を私たちが与えられていることを謙讓な自分、真の自分に立ち返り、考えて頂きたいのです。もし、もうすでにそう悟っていられるかたでなければ、そう理解して頂きたいと思ひました。皆さんの「心」は、皆さんの送られる人生によって形作られていくのですから、その心を大切に、常に自分の中の「善」なる心に聞うて、一歩一歩を踏みしめて、自分の未来像を作つて頂きたいと思ひます。天上界のかたがたは、特にそう望んでいられるのです。

この章の終わりに、一人の人間であつた高橋信次先生が、いろいろのお心の苦しみやまた、人間であるがゆえに間違われたことも多くあつたと言われ、この本でも御自分の著書の中の誤つた箇所を訂正なさつていられるのですが、生前に説かれたものの一つを表すものとして、愛という題の詩をカレンダーに載せておられます。それを私たちは、二度と誤りやすい大きな団体を作らず、小人数で横のつながりを強くし、正法を説いて行こうとの決心とともに、新たな感慨を持つて読み、また、皆さまにも同じ気持ちを持つて頂きたいと思ひます。

調和は無限の進歩と

安らぎを与える

調和の根底には

愛が働いているからだ

愛には自己主張がない

おごりがない

へつらいがない

喜び悲しみがあつたとしても

それにとらわれることがない

苦しむ者があれば

その苦しみを癒し

悲しむ者には光りをあてて

生きる希望を与える

愛は神の心であり 私心を去った

調和への偉大なかけ橋なのだ

\*

\*

\*

この章の内容について、また、正法の理論に関して、高橋信次先生の説かれたものと違う点については、すべて信次先生の御了承を得て書きました。

— 著 者

「エル・ランテイ様への誓いの言葉」——サリエル大天使

——ペー・エルテ星の言葉にて——

エル ヤーウエ ベルナ エル シェホーヴァ ベルナ リピラ ケラセナ エル・ランテイ  
EL YAUDK WKIVA EL JKHOVA WKIVA LIWILA KELACEVA EL LAVTE  
ヤーウエであり、エホバであり、全能の神であるエル・ランテイ様、

エル ケラ テ セル メレネヤ

EL KELA DE CEL MELEVKYA——

貴方の徳は世界に広められるでしょう。

エスケラ ベル エルナ セリア ジェリナ ナ ベルナ メルディレーネア クリアベル  
エラ テーレア セア

ESKELA W<sup>Y</sup>KL ELVA CELIA JELIVA VA W<sup>Y</sup>KLVA MELDIL<sup>Y</sup>VEA KLIAW<sup>Y</sup>KL  
ELA T<sup>Y</sup>SLEA CEA

貴方の七人の使の一人として、また、今生においては、貴方の後継者として送り出された私は、貴方の御意志を継いで、

エスケルデス メスレア メーレクデーネア

ESKELDES MESLEA M<sup>Y</sup>L<sup>Y</sup>EK D<sup>Y</sup>VEA ——

正法を全世界に広めるべく、努力いたしましょう。

エリメル ミカエル デル ラーダナ エル ジェリナ

ELIMEL MIKAE<sup>L</sup> DEL LAADAVA EL JELIVA

ににいられる、ミカエル大天使長様も、

ケーリマ デル ミーリオ エル ディレーネア

KYLIMA DEL MELIO EL DILNEA

貴方の後継者を助ける者として

メラネ セア ミルデア ヘル デル ラーダナ トレア ウルケーレマ

MELANE CEA MILDEA HEL DEL LAADANA TOLEA ULKELEMA

私が入びとに正法を広めるにあたり、その大なる力を借し、智恵を与え、

ケーレア セル マデア セクデア ベルドーレア ナメル セレディナ ペクア

ポーレア

KYLEA CEL MADE CEKTEA WYLDOLEA VA MEL CELEDIVA PEKUA

POLEA

そうして、この全地球上の全人類が、貴方の御意志を継ぎ、平和な世界を築く日まで、共に努力しましょうと。

セル トリア セア ヘルデーリナ デル エリア  
CEL TOLEA CEA WKLD<sup>W</sup>ELIVA DEL ELIA——

私にかたく約束なされたのです。

ソーリマ エルデ ヘルテレウナ モーデルカ エム セゲア デル ボイレア エス  
レウヘナ

SOLIMA ELDE WK<sup>L</sup>TELEUVA MODELKA EM CEKEA DEL WOILEA ES  
LEUWEVA——

貴方のお言葉どおりに、すべてが実現するよう、天上界の方々も心を一つにし、力を合わせて、その日のために働くことを約束なさいました。

トリア オル ケーメカ セク デーセア ドーリア

TOLIA OL K<sup>M</sup>MEKA CEK D<sup>E</sup>CEA D<sup>O</sup>LIA

どうか、私が地上の人びとに、貴方の御意志を伝え、

メル トレア エル ベルナ トル ベルナ ケル ベルナ オーレア セム テーレア  
ベス デル コーロ ナベル テケル セア セク ボイテア エル トーメク デル  
エリア

MEL TOLEA EL WĀLVVA TOL WĀLVVA KEL WĀLVVA ŌLEA CEM TĀLVVA  
WĀS DEL KŌLO VA WĀL DE KEL CEA CEK WOTTEA EL TŌMEK DEL  
ELIA——

その人びとが、自分達の幸福は何であるか、目覚める時が、寸時も早く訪れますよう、貴方の光りと、恵みと、守護を、世界中の人びとにお与え下さい。

## 第二章 ベー・エルデ星の衛星群

三億六千五百万年前にこの地球に飛来し、ようやくにして約一万年前より私たちの地球に住む人類の大半と、ベー・エルデと名づけられた星から来た靈達が合体し、ともに、現れては消える文明と、歴史の大河を浮きつ沈みつしてきたという驚天動地の事実を、私たちはつい昨年知ったのです。

しかし、私たち地球の文明は、ようやくのことに宇宙飛行士という特殊な訓練を受けた地球人が月世界まで飛行する技術を開発する段階まで達したに過ぎず、また、たとえ宇宙の法則を天文学者や科学者たちが次々と明らかにしてゆくとはいえ現代科学により観測可能な範囲で約百五十億光年。無限の広がりの中に大宇宙は一千億以上の銀河系星雲や星団を含み、その各星雲や星団の中に平均して一千億個の太陽系の太陽に比較し得る、あるいは、それ以上の巨大な恒星をちりばめて、なおもその恒星がそれぞれ惑星、衛星を従え、その数はたとえれば、世界中の国の海岸線に沿った砂浜の砂の数ほどあるとい

う、地球上の現代科学が推測し得るだけの空間をびっしりと埋めつくすほどの星を擁して、球形であろうか、鞍型であろうか、それら一千億個の銀河系星雲や星団は距離に比例して遠ざかり、宇宙が膨張しつつあるということ、宇宙について、私たち地球人が知る限りのものは、それくらいに限られています。

火星や金星に無人の探査機を飛ばし、人工衛星を地球の周りに回らせても、宇宙科学に関して、未開発の部分は多く、UFO普及化には至らず、ましてや、太陽系外の星へ人間が旅行するなどは、まだまだ五、六世紀先のことになるでしょう。

そのような地球に住む私たちにとって、宇宙は、まだまだ神秘の空間でしかなく、星のまたたきのように、多くの謎を投げかけてくるのです。それゆえにベー・エルデは、私たちの魂の先祖が住む星であると聞くと、誰しも夜空を見上げ、その星に思いを馳せ、私たちの遠い先祖の横顔に夢を抱かざるを得ません。

私は幾度となく、天上界のかたがたにベー・エルデと呼ばれる星の位置をたずねました。高橋信次先生が御存命中にアンドロメダ座のβ星と伺ったかたも居り、また、メシユーの星の星座表の命名に従ったM45やM35、M36などの星団も関係があると聞いておりますが、アンドロメダ座は二百万光年ほど離

れており、他の星団も簡単に往来(ゆきき)のできない距離にあるので、いくら光速に近い、あるいは、光速度以上の UFO でも容易に地球を訪れることが出来るはずはありません。

この本を著すについて、何か具体的な情報が欲しいと熱心にお願ひしたのですが、やはりこの本に出ている星の正確な位置については知らせて頂くことはできませんでした。

ただ、やっと聞き出せたことは、太陽系の近くの星の惑星であるということ以外、星間条約に違反するからと固く口を閉ざされました。ベー・エルデに関する知識も、ベー・エルデ星語も、この本に載せる以外は地球上の如何なる場所においても、如何なる人を通じても、発表されないであろうということです。

そして、その星々の正確な位置は、シリウス、プロキオン、ポルクタス、アークツラス、ケンタウルス座 $\alpha$ 星、プロキシマ星、ベガ、アルタイル、フォーマルハウト、へび使い座のバーナード星などの中から私たち地球人が何時の日か見出すべく、地球文明の発展、宇宙科学の発達に委ねられているのです。

知らぬ間に地球が太陽系外の他の惑星から飛来した宇宙人によって、その魂によって占められ、文明および科学の多くがそれに与(あずか)るところ多しということは、驚愕すべきことでもあり、また、

背筋を寒からしめるものでもあります。

私たち地球人はいままで、何に精力を費して来たのでしょうか。築いては崩れる文明という砂上の楼閣を単なる天災として受け入れてきたのでしょうか。ベー・エルデ星の人びとが善なる心を持って地球を訪れ、ひたすら調和と平和とを願って正法という素晴らしい神理を齎（もたら）されたことは、驚きや不安を消し去るに余りある至福であるということを感じずにはいられません。ベー・エルデ星のみならず、仮名のM45、M36、M35の星の人びとは、すでにユートピアを築き、互いに条約を結び合っているのです。この太陽系が、天上界のかたがたが、エル・ランティ様の下に調和を目指しつつ努力していられる最後の星だと聞きます。

私はそれを伺うとき、私たち地球人はもつと文明人として精神的な成長に重点を置き、互いに明るく思いやりを持って、与える心と譲り合う心と、愛と、正義と、心を清らかにすること、素直にすべてを受け入れる心——という極くあたり前の生活態度を人生に取り入れるという正法を軽視せず、そして、それを基盤とすれば、闘争は無くなること、破壊は無くなることに気づかねばならないと思うのです。

前置きはそれ位にして、この本にしか発表できないことを、ベー・エルデ星から来られ、永遠の生命

を得、転生輪廻を経て、なお希望に溢れた目を輝やかせ、地球をユートピアにする夢を捨てていられない天上界の七人の天使がた、エル・ランティ様、ブッタ様、イエス様、モーセ様などの、ペー・エルデ星で過ごされた日々を少し紹介させて頂きたく思います。

まず、エル・ランティ様は統一王国ペー・エルデ星の王であらせられるエル・リヒトエイム・カンタルーネというかたの兄上であるエル・リデレアム・カンターレ伯爵の次男として生まれられ、エル・シャルレア・カンターレ伯爵と申されるかたの別名なのです。爵位はペー・エルデ星から意識を通じて輸入され、地球上でも用いられるようになりました。

エル・シャルレア・カンターレ伯は、ペー・エルデ星にあるY国の領主でその知識と徳高き人格の故を持って、人びとから特に慕われていられます。シャルレア・カンターレ伯、すなわち、エル・ランティと私たちが教えられたかたは、二十歳の時に物理学博士号を受け、宇宙物理学、電子工学、原子物理学の権威として、大学教授の教鞭を取るかたわら、電子工学に関する研究と発明に専念し、重力切換装置と超光速で飛び得るUFOをペー・エルデ××年に発明、以来、同盟星に輸出され、自由に短時間の星間飛行がなされているのです。

三億六千五百万年前に、この太陽系の惑星の一つで植物が繁茂し、魚や小形爬虫類などの棲息する、

生物の進化が順調で、人類の移住が可能な星、と見たカンターレ伯が同盟星の王および領主たち（すべてカンターレ伯の血縁関係あるいは友人たちで占められるようになったのですが、最初はそれらの星の間で争いが何十年も続き、多くの犠牲が払われたのです。そして、同盟星間、およびこの太陽系の地球を統轄し、調和と平和を提唱、それぞれの星が協力し合って、この大規模な計画が実行に移されたのです）に呼びかけ、進んで調査探検も兼ねて、御自分の親しい人達、親類、家族などから志願者を募り、現在、七大使となられたかたがたとともに第一回目の探検隊として到着され、エジプトのナイル川の近く、エル・カンタラと御自分で名付けられた土地の、ひとときわ緑美しく、果物こそべー・エルデのものを植えました。が、憩いの場所と見えた所を「エルデンの園」と名づけ、いろいろな道具、器具を工夫して、五十六歳で死を迎えるまで、その地で楽しく幸福に過ごされたのです。

交わるべき人類は未だ棲息していませんでした。第二、第三の探検隊が次々と到着した後、エルデンの園は狭くなり、別の場所を求めてそれぞれ移動しました。

第二回目の探検隊にはカンターレ伯の友人で、科学関係、考古学関係、地質学関係、生化学関係の専門家が到着、いろいろな討議を重ね、別れて、他の場所へ行かれたのです。

第三回目の探検隊はブッタ様、イエス様、モーセ様とそれぞれ合体された、エル・ルネラエル・カン

タルーネ、レイナ・エル・カンタルーネ、エル・ビルナビル・カンタルーネ、エル・ミケラエル・カンタルーネの四人が来られ、どのかたもエル・カンタルーネ王のお子様ですが、ビルナビル・カンタルーネだけがM45の救世主<sup>メッセヤ</sup>となられたエル・テイレルナ・クエッティセヤというかたの五人兄弟の次男で、カンタルーネ王の所に養子として来られたかたです。

先に述べた同盟星はM45、M35、M36、ベール・エルデ星の四つの星ですが（信次先生の頃には、M37、M27、M26と述べられました）、仮名ですから何でも良いわけです）、地球を含めて五つの星が調和されたユートピアの星となる計画に着手されたかたたちは、二、三十年で亡くなられ、後を継ぐかたが次々と出て居り、亡くなられたかたがたは天上界に上り、四次元から三次元の人びとを助けていられるわけです。

現在の地球と同じことが行われているのです。

もっとも、地球を除く他の星は、全体に調和された状態に近く、昨年の五月に私を襲ったサタン夫婦が消滅されたベール・エルデ星では今、人びとが非常に穏やかな日々を過ごしています。天上界のかたがたが頭を抱えていられるのは、この地球だけなのです。これからは、種々の改良がなされて行くでしょうが、まだまだ、精神面だけでなく、工業、生産面に大気、河川汚染の問題が残されていますし、異常

気象による被害の問題、エネルギー資源の開発など、地球は前述の他の星に比べて発展途上星であるわけです。

さて、この章の終わりにカンタルーネ家の系図が載せてありますが、ブッタ様はエル・ルネラエル・カンタルーネ（長男）と合体され、イエス様はエル・ビルナビル（次男）と合体され、モーセ様はエル・ミケラエル（三男）と合体されました。

レイナ・エルというかたは、後にサリエル大天使になられたかたで、カンタルーネ王の長女に当たるかたです。私の霊体験で、『カンタルーネ様の子』と聞かされたとき書きましたが、あれは地球上の悪霊たちはカンタルーネ伯、すなわちエル・ランティ様しか知らないのです、そう天上界のかたがたは私に教えられたそうです。

エル・ルネラエル様は、神学博士号を持ち、宗教関係のお仕事をしていられた立派なかたですが、ベー・エルデ星では正法がゆきわたり、今は如何なる宗教団体も組織されていません。しかし、宗教哲学のような形態は残されており、種々の哲学論のなかに独立した理論として分類されているのです。そして、すべての理論が正法を基盤として成り立っており、神の概念に関する限り、人びとは悩むことも、考えることも不必要であるわけです。そして、その上に科学と物質文明がどんどん進展して行くので

す。ルネラエル様は地球に来て、カンターレ伯と同じ五十六歳で亡くなりました。

ビルナビル様は、M45のエル・クエッティセヤという領主の御子息で、子供の頃から神童と呼ばれ、頭脳明晰であることに加えて性格の良さのゆえをもって、十五歳の時に是非にと、カンタルーネ王家の次男に養子として来られました。成人した後、工学博士に成られ、カンターレ伯と共同研究をされました。亡くなられたのは四十五歳です。

ルネラエル様が長男で王位を継がれるはずでしたが、辞退され、ビルナビル様も、モーセ様と合体されたミケラエル様も辞退なされたので、王位は結局二十一歳のレイナ・エル様が継がれ、ミカエル大天使長となられたエル・ピレッテラ伯爵と結婚されて、エル・ピレッテラ伯も王位継承権を得られました。

レイナ・エル様は、生前には原子物理学者でもありませんでしたが、白血病のため、地球に來られて五年目に三十五歳で亡くなられ、エル・ピレッテラ伯も物理学から原子物理学の研究に進まれましたので、同じ病いに冒され、同じく地球に來て五年目に三十八歳で亡くされました。結局、カンタルーネ王の王位継承はレイナ・エル治世九年の後には行われず、他の領主に王権が譲られたのです。

ミケラエル様は、生化学研究に一生を捧げられ、亡くなられたのは四十二歳です。このかたのお子様

がラグエル大天使になられたエル・レグシェリルといわれるかたで、地球に來られて三年目に三十五歳で亡くなられました。生前にはラグエル大天使の担当と同じく律法学者でした。

ガブリエル大天使は、ミカエル大天使長と御兄弟で、ベー・エルデではカンタルーネ王の御長兄であるエル・ピラッティライラ公爵の長男として、伯爵の称号を持ち、読書や狩りなど、趣味を楽しんでおいででした。地球で長生きをされ、八十歳まで生きておられました。もちろん、淋しいなどということ無く、帰りたい時に、どなたもUFOでベー・エルデに帰っておられました。エル・ガブヌエルというのが本名です。

ミカエル様とガブリエル様の末の弟であるエル・ビッテルナ侯爵は、ベー・エルデ星系靈団の大天使長をしておられます。

パヌエル大天使は、カンタルーネ王の二人上のお兄様でエル・カンタラ侯爵の三男にあたられるエル・パヌルエラといわれるかたで、やはり科学関係の専門家で、政府の科学技術庁長官のような役職についておられました。地球に來られて五年目に四十五歳で亡くなられました。

ラファエル大天使は長男、ウリエル大天使は次男で、ともにエル・カンタレ伯(エル・ランティ様)のご子息です。

ラファエル様は、生前にはエル・ラファエルと申され、ペー・エルデでは一、二を争う文筆家で、絵に画才の腕を振るっていられました。こちらにこられて五十歳まで生きられたそうです。また、ウリエル様はエル・ウリエイナと申され、経済学者で、やはり政府高官として勤めていられました。地球では五十八歳まで生きられました。

なお、ルシエルは、カンタルーネ王の御息のルネラエル様の御長男として生まれられたエル・オリヤといわれるかたです。

これで大天使がたと九次元のかたがた、ならびにエル・ランティ様の御紹介は終わりましたが、名前の上に「エル」と付くのは「光り」を意味するペー・エルデ語で天上界に上られてから付けられたものです。それぞれ御家族やお子様のお有りになるかたは、そのかたたちと離れて、地球にこられ、帰る機会のあったときに御家族との再会を楽しみました。

地球の文化は大半が、霊としてのペー・エルデ星人との合体を通じ、その意識を通じて地球人が靈感のように脳裏に浮かんだことを発案とするものばかりですから、その様式や名称も酷似したものが多く、止むを得ないのです。

また、血液型分類なども名称は違いますが、主に四つに分かれ、特殊な血液型のタイプも分かれてお

ります。恒星との位置関係もありますが、比較的溫暖な気候の地域が多く、人心も穏やかで知的なタイプが多いそうです。

それから、意識が合体した霊と通じるという点で興味深いのは、両親と子供に入る霊と、それぞれ天上界で約束して合体しますので、お互いの名前を覚えていたわけです。ですから三次元の世界で生まれてくる赤ん坊に名前をつける場合に、よく天上界で用いられていた名を三次元の両親が合体霊に教えられてつけることがあるのです。

ラファエロという画家もラファエル大天使の分身が合体した人ですし、ミケランジェロはミカエル大天使長が合体されたアポロがミカエル様の分身となり、その霊が他の人間に合体した時、両親の合体霊と相談されたのでしょうか。ミケランジェロ→ミケル+アンジェロとなり、アンジェロはイタリア語で天使の意なのです。よく似た名ではありませんか。

第四章（天上界の人びと）の高橋信次先生の章に先駆けて、ここで私が書いてしまうのもいけないとは思いますが、このように天国を構成してられるかたがたが、どのようなかたであるか解ってきますと、至高神やメシヤ崇拜、偶像崇拜が馬鹿気たものに見えてくるのではないのでしょうか？

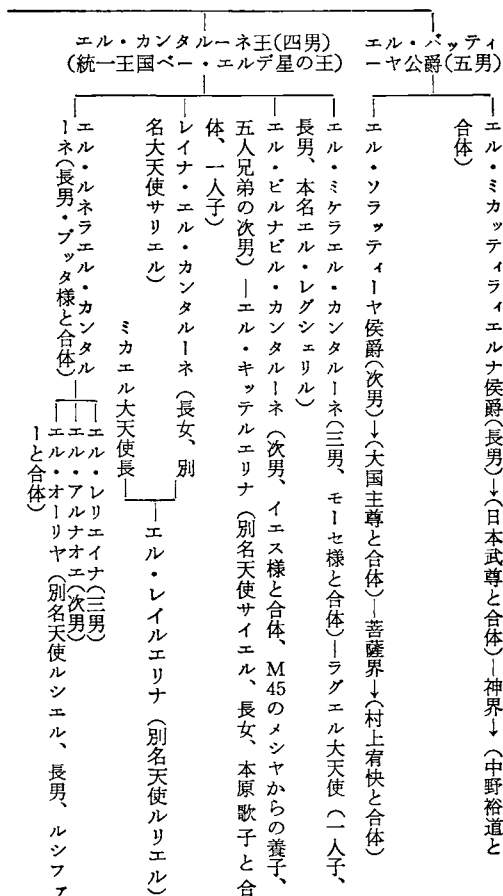
いくら偉大で徳高きかたの魂であるとはいえ、巨大な教会に美しい礼拝堂で荘厳極まりないカトリッ

ク教のミサだとか、プロテスタントの礼拝でも随分と勿体ぶつた長々しい儀式をとりおこないますが、イエス様は馬鹿々々しくして最後までお付き合い出来ないとおっしゃっていられますし、聖母マリヤ様もなぞ御自分があのように祈禱の対象にならなければならぬのか、理由がお解りにならぬそうです。仏教の儀式だとして、同じことだそうです。

宗教というものが形式化し、儀式化し、団体や宗派として大きくなればなるほど、維持費や経費が嵩んでいきますし、そのために会員や信徒は、会費だとかお布施だとか名目をつけて、結局は天国のためにそのお金を捧げるのではなく、地上界のために、牧師や僧侶や会長の説教の謝礼とその方たちの生活費と、ますます立派に建て直される教会や、お寺や、新興宗教ならば会館とでもいうのでしょうか？ そのためにお金を捧げていることになるわけです。

天国のかたがたは等しく、このような宗教という大きくなり過ぎた神棚や仏壇に困惑され、その象徴であるかのように、天国のゴミ捨て場に、立派な礼拝堂や、お寺の建物や仏像や、お墓などがうず高く積んであるそうなのです。また、他の角度から考えれば、すべてを神に縋って生活するという他力本願の人にとっては、頼みごとが叶えられなかったとき（本人の願いが自己中心的であったり、天上界のかたがたの良しとされるものでない時なのでしょう）また、機会が熟さぬ時もあり、本人の衰運の時もある

(先代の王, M45に引退)





秋元ユミ…M45のメシヤ エル・ティレルナ・クエッテイセヤの次女、エル・ビルナビルの妹、エルリアが合体。

川上恵子…M36のメシヤ エル・ビルナビルの弟、エル・ソリナディエル侯爵の三女、エル・ソラッティナーが合体。

千乃径子…エル・カンタルーネ王の妹、エル・ビルエリナの次女、エル・ライオネリヤ→マーハー・ブラジャパティーと合体…菩薩界→マーハー・ブラジャパティーが千乃径子と合体（千乃裕子の母）。

注 三次元の方は敬称略。秋元ユミ、土田展子、本原歌子、川上恵子は『天国の扉』作成に協力。

ります。神を逆恨みし、極端に絶望的になったり、無神論的態度をとったり（善なる霊を信じないということですが）、極端な場合は外国でよく聞くのですが、イエス様やマリヤ様の像にツバを吐きかけたりするのです。——これは神に期待する所が如何に大きく、自分の逆境が神への反感となった証拠ではないでしょうか？

そのように生命と全人生を賭けてより頼まなければ、絶望もそれほど大きくなり、また、冒瀆的な行為に走ることも無くなるのではないのでしょうか。

神が無いということ、イエス様はかつて人間であったことを冒瀆的で恐

ろしいといわれたクリスチャンがりましたが、私はどちらがより冒瀆的で、天国のかたがたにとって頼むしいのだろうか——と、この頃考えるようになりました。私の過去も他力信仰から絶望へ、そして神々への反感から無神論へと走ったものですから——。

もちろん、エホバであり、ヤーウエであるエル・ランティ様も、イエス様、ブッタ様、モーセ様、高橋信次先生、七天使がた、如来様、菩薩様などもすべての天上界のかたがたが、

「皆さまの望まれるような神様はいらっしゃらないのですよ」と、おっしゃっていられますが。

皆さまがたは心の中で、どのような神様を御自分だけで作り、拝みたいと思っていられるのでしょうか。天上界のかたがたはたいへん興味を持っていられるのです——。

### 第三章 ある日の高校生クラスの討議より

六月某日

これは正法の毎週の集まりで、たまたま講師のかたが遅れて来られ、ミカエル大天使長が、天使ルリエルと合体し、霊能力を持った高校生に入られて、ともに高校生たち及び著者（司会者）を交えて、討議した実録です。私たちが真面目に正法について学んでいること、また、その内容が如何に意味深く真理に沿ったものであるか、お解り頂けるだろうと思います。

入られたかたが、どなたであるかは、その人の顔がそのかたに似て見え、顔からオーラ（光り）が強く出るので。そばにいる者が非常に暑くなり、周りに居るものや、霊能者自身にも金粉が汗とともに皮膚の表面に結晶したり、衣服の上に降ったりするので、天国から来られた高次元（九次元あるいは大天使たち）の霊であることが解ります。低次元の霊（幽界）や、地獄霊は金粉など降りませんし、身体

がゾーンと水を浴びせられたように感じますので、直ぐ見分けられるのです。天上界の霊が近くにおられる時、次元の段階が上がるにつれて暖かさが増します。ただし守護霊・指導霊の場合は、本人ととも暮らされますから、霊能力が開発されて話せるようになるまでは、その存在を意識せず暖かみも感じません。

司会者 神様とはどういうものか、人間とどう違うのか。神様と人間の関係についてお話し下さい。

皆それについては知らなかったことから——実際に目で見えているものしか解らないのですし。目に見えない神様とはどういうものか。人間とどうつながっているのかを知りたいと思います。

ミカエル 宗教についてお話しをいたしましょう。

司会者 あ、それから、神と人間とはまた、別の存在の、特に全然次元が違って、どこからバツと現れて人間というものを作ったとか、宇宙のあらゆるものを作ったとか、考えている人が多いでしょう？ そういうふうに説く宗教家も多くありますから……。だから、本当の神様とこののはどういふかたであらせられるのか。それから、あのー、自然や宇宙とどういふ関係

があるのか、それを解り易く説明して頂きたいのです。

ミカエル

宗教と科学というのは全く一致するものでなければなりません。何度も申しますように、今まで、多くの人が説いてきたいろいろな宗教は、すべてそれができませんでした。ですから、今生において、あなた方が知ろうとしていることは、その科学と宗教が一致した、新しいものであるということを理解しておいてください。

今から説明しましょう。この漠然とした存在のものを、あなた方は、如何なるものだとお考えですか？ 一人ずつ聞いてまいりましょう。

高校生 A

この世を良くするために、いろいろとご指導して下さいませんか。

ミカエル

あなたは？

高校生 B

あまりに漠然とし過ぎて、解りません。

ミカエル

そうですね。

高校生 C

私は、神様がいらっしゃるのを見たことがないので、自分で信じられないし、もし居られるとしたら、今まで皆さんが言われてきたようなものだと思います。

司会者

言われてきたようなーということとは？

高校生C だから、良い行い、善そのもの、という感じ。

高校生D 私も同じ！ 光り輝やく人。

司会者 人ということとは？

高校生D つまり、人ではなくて、自然がすべて神様そのもので——人格ではないと思う。

司会者 人格じゃないと思うわけね。自然が神様そのものであると思うわけね。

神様は全能の神様で、「神」とみなが崇めてきて、良い行いをする人、良い行いをするように、人間に求めていらっしゃる人とか思ってきた方が——方というのは語弊があるかも知れないけど——そういう方が、自然そのものであって、人間とは何の係わりもない、三次元の人間を象徴するものではない、と考えるの？

高校生D 象徴っていうのじゃなくって、人間は……

司会者 自然そのもの。科学的に言えば、自然とは人間の元である。自然から、人間が進化してきた生まれて来たのでしょうか？

高校生D だから人間は神様の子供っていう……。

司会者 ということは、自然イコール神様ということね。

高校生D うん。

司会者 漠然として、抽象的でもあるけれども、物質的でもあるような……。

高校生D 具体的！

司会者 具体的でもあるような。けれども、私たちが崇める対象としての人格を持った神、とは言われないわけね。人格というか、神格というか。自然というのは、ただ在るがままのものでしょ？

高校生D うん。

司会者 それが善の行いをするとか、それが私たちに善いことをするように求めているとか。そういう対象ではないわけね。

高校生D うん。

司会者 ただ、存在する。意見が二つになりましたね。

ミカエル そうですね。例えば、旧約聖書においては、神様は全能なる方で、そして、その方がすべての宇宙を作り、すべてのものを作り、人類を作られた方というふうに書かれています。それは全く非科学的なことであると、あなた方は思いませんか？ 大体この宇宙を作り、地球を

作り、そして人間を作ったことなどという話しは、あなた方は素直に信じる事が出来ますか？ 信じられないでしょう？ そうでしょう。人類は、宇宙は、いえ、地球、すなわち、このすべての存在するものは、徐々に進化してきたものなのです。例えば、人間を取って見ても、初めに地球は混沌とした、熱い星が生まれたばかりであって、それが次第に冷えて行って、そしてやっと生物と呼べるようなものが発生してきて、そしてそれが徐々に進化して行き、やがては無脊椎動物から脊椎動物へと、そして爬虫類とか哺乳類に進化して行って、そしてその哺乳類のうちの猿というものが次第に発達して行き、人間になった、というふうに科学で教えられていますね。それはその通りで正しいのです。ですから一方の考え方で言えば、大宇宙のこういう生物を発生できる力こそが、「神」という考え方がございます。ですから、「神」という言葉については、そういうふうに漠然としたもので、感覚として掴んでいても良いのです。こういうふうにはっきりと定義づけては、説明することは不必要なのです。

ですから、人格として崇めると仰言いましたね？ 人格として崇める対象に、こういう大自らの力に一番近いお方に、エル・ランティ様という方がいらっしゃいます。そうですね、そ

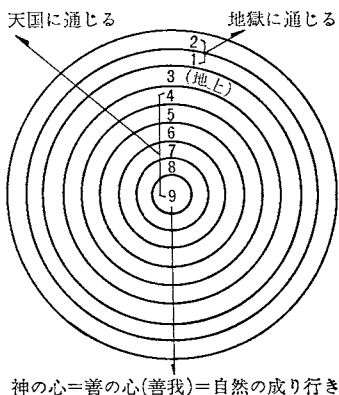
して、「神の教え」ということがございますね。「神の教え」というのは、すべて「善」というものについて説かれているでしょう？ その「善」は誰が望んでいるのかというと、外でもない地球に住んでいる全人類が望んでいるのでしょうか？ それを勝手に、自分自身の心で、自己保存の心で行動しているから、地球がこんなに汚れてしまったことになっているのです。ですから「善の心」というのは、すなわち、「自然を愛する心」ということにもなるのです。

「自然」というのは、いろいろな意味がございまして、例えば、木、草、山、海の自然もございまして、それから「人の心においての自然」というのもあるのです。

「人の心の自然」というのはどういうことかと申しますと、人間の心は九層の層に分かれていますと申しましたね。この心の真ん中には、神様の心というのがございます。後から説明いたしますが、自然のままに行動するということは、自分の善に沿って行動する、ということなのです。

ですから、悪い行動がありますね。たとえば、人のことを考えないで、自分のために何かをして、その結果、他の人が傷つくとか、そういうことがあるでしょう？ そういうのは

人の心は九層に分けられる



第四章「高橋信次の章」参照

高校生D

悪なのです。つまり善の行動とは、自然な成り行きのことなのです。そうですね、この自然な心というのは、善の心の結びつきが、あなたは解り難(にく)いのですか？

ミカエル

人間の心というのは、だいたい、善我なる心でしかないのです。だから、例えば、あなたが良いことをした時には、自分の心が気持ちが良いでしょう。そして、良いことを続け

て行けば、ずーっと、満足が得られますね。満足な状態が続くということは、自然な状態、つまり理想的な状態であるわけです。

司会者 なぜ悪いことをすると、満足しないのですか？

ミカエル 悪いことをすると、自分の『善なる心』が許さないからです。つまり、もしあなたが授業をサボって、何処かへ行ったとしますね。そうすると、うしろめたい気持ちになるでしょう？ それは、『善の心』がそういうふうに思わせているのですよ。

あなた方には、今そういうふうに、漠然としか解らなくても、別に構わないのです。いろいろこういう話を聞いているうちに、あなた方は、次第に解ってくると思います。ですから今は、漠然としたものでつかんでおいて下さい。

司会者 神様ということ、漠然とした存在で掴んでおくわけですか？

ミカエル そうです。そのうちに解って頂けますから。ですから、この『善の行為』というものは、自分が、理想的な心でいられることでしょ。理想ということは、自然、草や木の自然がありましたね。あれが例えば、日照りなどで害を受けないで青々と茂っていれば、果物なども順調に収穫があれば、それは理想の状態でしょう。これが普通の自然の姿なのです。普通の

理想の状態というのは、自然の姿と善とに結びつくわけです。それから、自然の一部をなす動物、あるいは植物にも、それぞれ天敵があって、数と量のバランスが取れております。増え過ぎもせず、減り過ぎもせず、「自然淘汰」といって、それが自然の調和を保つのです。ちょうど良い量でバランスを取るので。人間の心の善も、人と人との調和を、中庸の形で計るのです。自然の心は調和である、善も調和である。だから、善は自然と同じであるということですね。お解り頂けますか、皆さん？

司会者

そして、その神様ということですね。エル・ランティ様は自分が神様だとおっしゃっているのではなく——自然に解つてくるとおっしゃいましたけれども——エル・ランティ様が自分を「神」と、人間に「神」と見做すべき対象であると、説明されて来たのではなくて——つまり、長い歴史を通じて、イエス様の時代や他の宗教家達を通じ、自分を「神と崇めよ」とおっしゃったのではなくて、神というものは自然のありさま、そのあるがままの姿であって、それを解明する立場にあるものとして、今までいらっしゃったというふうに聞こえたんです。けれどもイエス様は明らかに、「全能なる神、私の父である全能の神を信ぜよ」とそういうふうに、聖書の中でおっしゃっていられた。それは間違いと思っただけでいられたわけ

ですね、エル・ランティ様は？ 間違いと見做していられるわけですね？

ミカエル イエス様の場合には、エル・ランティ様はエホバとして登場されましたが、イエス様の時代においては、非常に民衆が貧しく、そして救いが、心のよりどころがなくては、生きていけない状態でございました。

司会者 そして非常に非科学的でしたね。科学のことを何も知らない――。

ミカエル そうです。そういうように非科学的であるからこそ、神は全能で、その方がすべてであるという事になったのでございますが――。

司会者 その時に、そうおっしゃっただけですか？

ミカエル そうです。神を信じよ、とイエス様はおっしゃっていますが、これはすなわち、自然の、あるがままの自分の心に忠実になれ、ということなのです。

司会者 そうでしたね。神はあなたがた一人一人の心の中にあるとおっしゃいましたね。

ミカエル そうです。

司会者 そのところも解らなかつたのです。全能なる、唯一なる神を信ぜよ、とおっしゃったことと、神はあなたの方の心にある、ということと――。

ミカエル　そうです。

司会者　それではつきりました。皆さんおわかりですか？　その頃の人びとが解らなかったから、人間が教養がなくて、科学も理解していなかったから、科学がどうだとか、人間が進化したからどうか、自然がすべてを生み出す母のようなものであるから、それを信じなさい、そして、自然なる心に従う自分の心信じなさいと、そういうふうに言っても解らないから、だから、全能なる神、すなわち、イエス様のような、素晴らしい奇蹟を行うような神様を信じなさい、そのおっしゃる通りにしなさいと、そういうふうに言われたわけね。皆が、そういうふうな方がいられるから、気持ちを安心させて、安心した気持ちで生きて、世の中の苦しんでいる人達が、そういう教えに従っていったら、今の苦しみ、悩みから解放されて、世の中がもっと良くなる、ということを知ってほしいがためにイエス様は、エル・ランティ様（エホバ様）を説明するのに、その時そうおっしゃったわけね。だからイエス・キリストの時代の神様と、私達がこうやって説いて頂いている神さま、とは違うということね。同じであるけれども。

それはエル・ランティ様が、イエス様を通じてそうおっしゃっただけでね。本当は、“神様”

というのは、「自然」であるということね。それを良く納得してもらわなくてはいけないわね。

ミカエル

それと同じように、イエス様の時代には、布教の時間がなかったので、それを説明している暇がなかったのでございます。そして、そのことは当時にも、予言されておりませう。すなわち、聖書にあるように、「彼らは耳で聞くが決して心で悟ることはないであらう」というのはこのことを予言されているのです……。

他に何かございませんか？

高校生C

関係がないかも知れないけれどね。ギリシャ神話ってあるでしょう。あれに書いてあることは、本当なんですか？

ミカエル

本当ではございますが、すなわち、ゼウスやアポロのことでございませう。ゼウスというのは、エル・ランティ様の生まれ変わりでございまして、アポロというのは私、すなわちミカエルでございます。ですから、ギリシャ神話に書かれているような、浮わつたものは少しもございませんでした。あの時も同じように、こういうふうに正法を説いていたのでございます。それを後の人が勝手に創作して、自分達の好みに変えてしまい、あのような浮

わついた話になって、今に至るまで残っているでございます。

司会者 それからもう一つ伺いたいのですが、そうすると、日本神話というのも、同じようなものですか？

ミカエル そうです。日本神話の場合も、天照大神様を中心としたお話してございますね。あれはやらにいろいろな逸話や寓話で塗り固められています。あの方たちも本当は今と同じように、正法を説いておられたのでございます。ですから、天上界の者が入れ替り立ち替りこの世に出て来て正法を説いているのは、すべてこの地上に生きているあなた方に、ユートピアを作ってもらいたいという要求からなのでございます。ユートピアということはお解りになりますか？

司会者 理想郷ですね。

ミカエル 理想郷、すなわち、自分自身の善の心に従って自然のままに生きていく。その理想郷でございます。ですから、そういうふうに行動してゆけば、常に行動は善なるものだけになり、皆さんは幸福に暮らせるでしょう。公害もなく自然破壊もなく、皆が手を取り合って、仲良く生きていくことができるでしょう。人種差別もなくなり、その他いろいろな人間間の差別も

なくなり、すべてが平等になり、皆お互いのことを思いやって生活していく。そういうような世界のことをいうのです。そういうような世界にするために、私たちは何千年も前から、天界から光の使者を送り出して参りました。

有名なかたとしては、イエス様や、ブッタ様や、モーセ様、天照大神様、ゼウス様などがございます。何かその方たちについて質問はございませんか？

司会者 仏教には同じような話はないんですか。

ミカエル 仏教は主に、八正道を説くもので、その当時の人びとは神という存在はたいして信じてはならず、来世にすべて望みをかけていました。パラモン階級に尽くすこと、それが自分の来世につながる、すなわち、自分のことだけしか考えないような宗教が、はびこっていました。ですから、それを打破するためにブッタ様がお生まれになり、八正道や五戒や、その他、反省の必要性などを説いておられたのです。

司会者 他の国にも同じような、似たような神話や寓話などがございますけれども、それは仏教的な意味ではなく、日本の神話と同じような意味で発生したというか、皆が作り上げたものですか？

ミカエル はい、そうです。

司会者 やはりそこに光の天使がたが降りられて、正法を説かれたという証拠に、そういうお話、神話のようなものが残っているというふうに解釈してたんですけれど。それは違いますか？

ミカエル それは、正法が伝わっていくにつれ、正法を説いた人が死んでしまい、次々に世代が変っていくと、恐らくこのようなことがあったのではないだろうか、後の人びとがつけ加えたのでございます。その結果、あのような、時にはありそうもない話になったのです。

司会者 私が解釈していたのでは、神話、寓話の基になるのはただ一つであって、それをいろいろな国の人達が自分達独自に解釈して、独自の神話というものを作り上げた、というものなのですか。

ミカエル それでも良いのですよ。

司会者 解りました。

講師 一つの神話、一つの事実が、二つ以上の神話になることもあるし、その基が複数であることもあるわけですね。

ミカエル そうです。他に何もございませんか？

高校生 C あのお、神が居るとすれば、悪魔というものも居るのですか？

ミカエル もちろん、存在します。

悪魔、すなわち、サタンですね。どのようなものか知っていますか？ 簡潔に言えば、悪い心だけしか持たない霊ですね。ですから、天上界の霊とは正反對の性質を持って居ります。自分の事だけしか考えません。そして、他人を陥れることだけを考えます。そのような霊のことです。ですから、地獄のような恐ろしい世界が出来るのです。今、現在、日本の地獄は、無間地獄、天狗界を除いてはございません。なぜならサリエルの本体として生まれられた方に依って、地獄の霊やサタンが、天上界に上げられたからでございます。

司会者 ルシファーと呼ばれた方がいないわけですね。

ミカエル いません。ルシファーと呼ばれたサタンが居たのを知っていますか？ 書物にも書かれていますよ。

司会者 聖書のことですよ。絵にも描かれています。

ミカエル そのルシファー、すなわち、天上ではルシエルという私の愛した天使でした。非常に彼は優しく、清らかな人格でございました。それが地上に生まれてきて、いろいろな世間の悪に染

まって行くうちに、地獄に落ちてしまったのでございます。しかし、彼は、今、天上界上って、元の天使に戻っております。(注、ルシファア、ルシエルについては「モーセの章」をお読み下さい)

高校生C 地獄に落ちるって、誰が落とすんですか？

ミカエル 自分で落ちるのです。すなわち、自分の心が醜くければ、天国へ行くことはできません。なぜならば、類は友を呼ぶ、と言いますが、自分の心が汚なければ、天上界には上れません。地獄に落ちるのです。

講 師 ええ。エレベーターがね。

ミカエル 波動……。

講 師 エレベーターがバネで吊してあると考えて下さい。目方に相応した所に、エレベーターが止まるでしょ。心の重い、地獄のような心を持った人は下の方へ降りてしまう人です。心の軽い人は高い所へ行くんです。これが自然の法則です。

ミカエル そして、波動ということがあるのです。今、私が、こうして声を出していますね。これは一つの言葉の波動というものです。これは音に乗って聞こえる波動ですね。ところが、心の波

動というものもあるのです。例えば、九つの層がございましたね。で、ここに一人の人間がいるとします。この人間が靈界の心を持っているとしますね。比較的自分の事ばかりに走り廻るといふ人ですね。この靈界の心を持って、物を考えますと、靈界に心が通じるのです。

ですから、死ぬと、そこに心が通じていますから、靈界に行くというわけがございます。そして、この人が悪の心を持っていると、悪の波動が出ます。ですから、これは地獄につながるのです。同時に、この悪の波動に乗って、地獄靈や、浮遊靈や、地縛靈がこの人に憑依するのです。それと同じように、この人が如来界や菩薩界の心を持っていれば、高い所に波動が届き、そして、ここに居る人達と靈能力がある人は通信できますし、また、靈能力がない人でも、天上界から来られた守護靈や指導靈の加護を受けることができます。このように、自分の心の持ち具合によって、何処へでも波動が行くのです。

高校生下

あの先刻、地獄はなくなつたとおっしゃいましたけれども、もしこの世にいる悪い心を持つた人が死んだら、地獄へ行くのではなくて、天国へ行くのですか？

ミカエル

そういう靈はすべて幽界に上げて、魂の修業を厳しくさせられるのです。地獄を作つては、昔の二の舞ですから、これからはもう日本に地獄は出来ないでしょう。ただ、今は死人の靈

は増えています。すなわち、地獄に落ちたのではなく、この世に未だ迷っている霊がたくざんいるのです。もし、その迷っている霊、悪霊のことですが、人が悪い心を持ってものを考えると、その波動に乗って、この悪霊が憑依します。そのような霊も数を減らすために、また、他の国の地獄もなくすために、八月から一定の期間を置いて、エル・ランティ様は、高橋信次様とサリエルの本体である方の協力で、地獄霊を天上界に上げさせるご予定なのです。

高校生S　　そういう霊は助けて上げることはできないのですか？

ミカエル　　貴女がもし助けようとすれば、貴女に憑依しますよ。なぜなら、彼らは人の心の暖かみというものを忘れてしまって、ひたすら自分だけが助かりたいという目的で貴女に憑依します。あなた方のように光の出ている人たちは、特に憑依され易いのです。しかし、あなた方が善の心を持っているので、長い間は憑いておりません。いつの間にか離れてしまいます。そういう浮遊霊、つまり迷っている霊の処置は、天上界の者にまかせなさい。なまじっか救って上げようと考えると、大変な目に会いますよ。あなた方は、まだ善霊と悪霊の区別がつきにくいので、そういうことは危険なのです。止めて下さい。そのために諸天善神という光の天

使がおります。

今日、はじめて来て下さった方は、あそこに並んでいる本を何冊か借りて帰って、目を通しておいて下さい。

高校生T

それでは悪霊に憑依されたと解ったら、どうして取れば良いのですか？

ミカエル

まず、自分の心をきれいにしなさい。悪いことをしたのなら、それを反省して悔いなさい。

高校生S

光の天使という意味をちょっと教えて下さい。

ミカエル

光の天使ですか？ 光の天使というのは菩薩界、如来界の者達のことです。光の天使という場合には、この同じ天使という字を書きますが、如来界の上に居る翼を持った天使とは違うのです。光の天使という表現は、高橋信次様がお使いになったもので、これは天の使いという意味です。ですから、如来界、菩薩界の人達は天の使いとして、この世に生まれて来て、その正法を説く仕事をするのです。別に、その天使という言葉にこだわらなくても良いのです。

高校生C

あの、人間というのはね、欲望的な面と精神的な面と、つまり、良い面と悪い面が誰にでもあってね。

ミカエル はい。

高校生C それが人間というものだ、と納得してるのはいけないんですか？

司会者 人間的な生き方を欲望の固まり、というふうに見てるわけね。いろいろな欲がある。

高校生C 欲望……うん。

司会者 人間的な欲がある。それは人間的である。

高校生C それはあのー、人を愛することとかね、それは……。

司会者 それも欲望につながる……。

高校生C 欲望になるのか……。

ミカエル 欲望というのは、すなわち、それは善の心ではございません。それはさきほどお教えしたよ

うに、自然の理想の生き方ではないのです。例えば、そうですね、貴女が本当に神の心を持って行動するならば、お金持ちになって良い暮らしがしたいとか、きれいな洋服が着たいとか、そういうことはなくなるのです。それは実際に経験して見れば解ります。身を飾る、そういう欲望は自己保存です。すなわち、自分さえ良ければ他はどうでも良いという心ですね。欲望というのは自己保存なのです。自己保存というのは神の心ではありません。ですか

ら、欲望があることが人間らしい、ということは間違いなのです。それは自分勝手な人間の考え方です。人間は生まれつき、欲望というものを持って生まれては来ません。どうやってそれを持つかという点、周りの人達を見て、自分より良い暮らしをしているから羨ましいという気持ちを持つのですね。別にその人は貧乏なわけでもなく、普通の中流家庭だとします。上流家庭の人が羨ましいと思うのです。自分が不自由しているわけでもないのに羨ましいということ、すなわち、この人が欲張りであることでしょうか？ 自分はもうそれで足りているので、余計に良いものを欲しがっていることでしょうか？ そういうことは不自然なわけです。自分の能力以上に良いものを求めようとする。お金が無いのに贅沢をしたがり、そのために結局は盗みを働いてしまうことも起こりますが、このように欲望というものは善ではないのです。

人間は元来そういうものは持って生まれて来てはおりません。解りますか？ ですから、欲望を丸出しにして生きるのが人間らしい、というのは間違いです。欲望を丸出しにして生きるのは動物の生き方です。解りますか？ 人間は善というものを考える力を、理性を与えられているのですから、それを良く働かせて生きれば、こういうことはなくなるのです。愛と

いうことについて質問されましたね。人を愛するということには、二通りあるのです。

アガペーとエロスの愛です。エロスというのは、例えば、男女間の愛のような愛憎の感情がともないます。ここに、或るカップルがいたとしますね。お互いに愛し合っているうちは良いのですが、片一方が心変りしたとなると、片一方はそれを憎みますね。憎しみに変わるような愛のことをエロスの愛というのです。エロスの愛には、絶えず相手が心変りしてしまうのではないかというような不安がつきまとい、その愛には安らぎがありません。ですから、同じ愛を持つにしても、エロスの愛よりも、アガペーの愛を持つ方が良いのです。アガペーの愛というのは神の愛のことです。ですから、いま述べた例をとって説明しますと、この人が心変りしても、この人は相手の人が幸せならそれで良い、というふうに思うような心が……ちょっと違いますが——アガペーの愛なのです。アガペーの愛というのは神の愛、すなわち理想の姿の愛です。ですから……。

司会者 自己中心的でなくて、与える愛ね。

ミカエル そうです。

司会者 神様のように与えるだけの愛ですね。

ミカエル　そうです。自分では何も求めませんが、他人に与えるだけの、他人が幸せになれば良い、というような愛のことをアガペーの愛、神の愛というのです。お解りになりましたか？

司会者　ということは、精神的なもののほうが良いということ。

ミカエル　そうです。単に肉体的なものは種族保存のためだけです。本当の愛を知ったならば……。あなた方は残念ながら、本当の愛というものには、未だ巡り会ってはいられませんね。

司会者　それから、もう一つ、それを伺っていると、えー、一つの疑問が浮かびあがってくるのですけれども、動物達というものは、種族保存のためにだけ生きていて、アガペーの愛を知りませんね。

ミカエル　はい。

司会者　それが人間だけに要求されるのは、どういうことなのでしょう？　自然に沿って生きよということは、種族保存という人間的な生き方も、認められるべきではないでしょうか？

ミカエル　そうです。認められるべきですが、それはエロスの愛でなく、アガペーの愛を前提として、そういうことが行われることが理想なのです。そうして、このアガペーの愛が前提となっているならば、例えば、離婚や、子殺しや、子捨てや、そういうことは無くなるでしょう。

司会者 それは人間であるがゆえに、求められるわけですね。

ミカエル そうです。

司会者 理解することができから。

ミカエル そうです。

司会者 動物は理解ができないから、同じようなことをしていても、自然の成り行きだ、とそういうふうに見ているわけですね。

ミカエル そうです。あなた方は理性というものを与えられています。ですから、その理性を良く働かせてものを良く考えなさい。感情に押し流されてはいけません。感情に押し流され過ぎると、欲望ができて自己保存につながり、挙げ句の果ては自分の破滅につながります。

司会者 それからもう一つ、私が、私自身解釈していることですけれども。

ミカエル はい。

司会者 人間というのは、動物と同じように生きてみると、動物より以上に残酷なことをします。

ミカエル そうです。

司会者 自己中心的な。

ミカエル　そうです。そういう考え方ができるからです。

司会者　はい。だから、えー、それがあるがゆえに、アガペーの愛が大切な、

ミカエル　余計に要求されるのです。

司会者　精神的な生き方を要求される。

ミカエル　そうです。

高校生D　あの一、一番ね、人間的であって、そして一番人間的でないというか、そういうなんというか  
かな……

司会者　精神が高度であるという意味で、人間的であって、

ミカエル　そうです。

司会者　人間という動物的なものを持った、いわゆる、

高校生D　人間！

司会者　世間の人が理解している人間というものじゃないかと、

高校生D　というものじゃない……

ミカエル　そうです。そういう生き方が理想なのです。そういう生き方をしていれば、悩みも、苦しみ

も何もありません。信じるのが、そのアガペーの愛というのは、他人を信じることにもつなぐりますし。ですから、さきほど述べたようなことは起こりません。解りますね？

司会者 そう、悪の思いを持っていたら、人から同じものが帰って来るから、他人を苦しめるけれども、自分もそれで苦しめられる。

ミカエル そうです。

司会者 傷つけ合うからですね。そういう破壊的な世界よりは、お互いに思いやっていくほうが、平和な生活が送れる、ということだね。神様はおっしゃってます……。

ミカエル そうなのです。

司会者 神様と言って、また、間違えました。天国の方がおっしゃられてる。

高校生D あのー、神様ということなんですけれどね。自分の心の中に神様がいて、その心が広がるから、神、すべてが神なんだと考えるもいいんですか？ 造ったからでなくて、なんというのかな、まわり……

司会者 いえ、だから先刻おっしゃったでしょ？ 神というものは善我なる自分の心である。

ミカエル ですから、神様が自分の心にいらっしゃるのではなくて、神の心を持った自分が自分の心の

奥底にいます。それをあなた方は、今一つ一つ、そのペールをはがして行って、発見するに至るでしょう。

司会者

では、この辺で米本（明）講師に代ってお話して頂きましょう。現象はここで終わります。ミカエル大天使様、長い間お話し下さいます、たいへん有り難うございました。

ミカエル

どういたしまして。たいへん楽しい時間を持つことができました。幸せに思っております。

## 第四章 天上界の人びと

### ミカエル大天使長（天使の長「おさ」）

私は、ミカエルでございます。

あなた方のなかでご存知のかたもあると思いますが、ご存知でないかたは私の名前を世界歴史のなかでジャンヌダルクに啓示をもたらし、フランスを救うことを命じた天使ミカエルとして、また聖書のなかで天使ガブリエルとともに受胎告知の役を果たし、イエス様の生涯に助力者としてその御働きを支え、御教えを広めるのに他の天使がたとともに使徒たちを集め、いろいろな奇蹟に力を貸したものでして、また、聖ヨハネ（若きヨハネ）の黙示録に七つの災害をもたらし、最期の審判を行う役目を与えら

れ、地上に降（くだ）り来る七人の天の使いの一人として、はっきりと名を録されており、またその同じ時に、一千年のあいだ大蛇に姿を変えられ、閉じ込められていたサタンであるルシファーと戦うものとしても録されております。

私がこのたび、この書を通じて皆さまにお話したいことは、メシヤとして崇められて来た釈迦牟尼仏様やイエス・キリスト様、あるいは、エジプトに捕囚の民として永年のあいだ虐待され迫害を受けていた多くのユダヤ人を、ヤーウエの導きのもとに紅海を渡り救い出したモーセ様（これも聖書の『出エジプト記』に録されておりますが）、および昨年一九七六年六月まで七年の間、キリスト教における唯一絶対の神として拝されてきたエホバ、ユダヤ教においてはヤーウエ、の生まれ変わり、すなわち、肉体をお持ちになった全能の神として伝えられ、正法と呼ばれる神の教えを説き、多くの書を残して天上界に帰って来られました高橋信次先生の四人、他にも多く偉大な教えを残された宗教界の人びとも含めて、これらのかたがたがすべて一つの源から出ていること、すなわち、同じ教えを広めて来られたことなのです。

その教えは、あまねく宇宙を含めて同じ法則に従うものであり、自然、人間、動物、植物を問わず、ありとあらゆるもの、ならびに現象は宇宙にその源をたどるものであり、宇宙はそのあらゆることから

や現象を産み出したものと見做されるべきであり、これが即ち、皆さまが神と同じものと定義すべきであるというもののなのです。なぜならば、いままで神と崇められたかたは、すべて偉大な人間の魂であり、進化の法則に従って派生した一生物の一環をなすもの、動物の種族の一つである人間の魂に過ぎないからです。私たち天使も、如来様も菩薩様も、偉大な学者も発明家も、医者でさえも、死後は同じ人間の魂であり、それぞれの位置するところによってその働きや役目が異なるだけなのです。

もちろん、イエス様やモーセ様やブッタ様、高橋信次先生（ヤールウエでありエホバであるかた、と時に、今生ではエル・ランティという名で知られておりますが）は神と崇められるにふさわしい偉大なかたであり、その魂は永遠に天上界の最上段階である九次元に住まわれ、地上の人びとを種々の悪の手段（てだて）や地獄へのいざないより守るため、日夜心を砕き、天上界の霊たちに指図なさっているのです。

それは、人間たちが自然の一部であることを忘れ、魂は不滅であることを忘れ、破壊や墮落に移ろい行く人生を委ねており、また、滅びるだけである肉の思いに溺れ、一度の死によって終わるのではない、与えられた素晴らしい魂に善き思いや、美しい世界を見せることなく、悪霊の導くままに知らずに真つ暗な地下の闇の世界（地獄）に落ちてしまう。そのような愚かな生きかたに目を開き、何が真の人

生であるか、何が神の国であり、平和であり、理想の世界であるかを悟るべく、何度も何度もくり返していろいろな宗教家を通じて、また、メシヤといわれた人びとを通じて、教えようと試みてこられたことから明らかなのです。

宇宙の一部である人間は、お互いに助け合い、身を供して他のものを生かしている植物や動物、あるいは恒星と惑星間のつながりにも見られる大自然の法則を無視して勝手な行動に出るのは許されないことであり、私たち天上界の魂はそれを許さぬために、地上の人びとを幻惑し、あるいは煽動して自然破壊、環境破壊、ひいては人類滅亡、地球上の自然現象にも影響を及ぼし、地球滅亡を速めるような愚行に導く悪霊たちとの戦いに、日夜努力を惜しまず働いているのです。

それは愛の心、慈悲の心なくしては理解し得ない真理であり、おこないえない事がらなのです。

モーセ様もイエス様もひとしく、放縦に身を任せ野蛮な心しか持っていなかった当時の人びとに、人間としてしてはならぬこと、なすべきことを戒めとしてまた教訓として教えられ、イエス様は特に愛とほどのようなものかを説かれました。

その教えや戒めをもう一度読み直し、あるいは、学んで頂きたいのです。

また、ブッタ様は、宇宙と個人とは同じものである。同じ法則に従った生まれ変わりを永遠にくり返

すものである。これを科学の世界では物質不滅、質量保存の法則と言ひ、ブッタ様は生まれ変わり、死に変わる永遠の魂を持っていることを転生輪廻と名づけられました。

また、太陽があらゆる物に変わりなくその光りと恵みを与えるように、人間の心も慈悲の心で満たされなければなりません。

そして、人間や階級の差別を無くすために、人びとはお互いを尊敬し合つて正しい判断のもとに中庸の心で生きて行かねばならないことを教えられました。

これらの教えは、すべて天上来の意志であり、教えであるのです。

万物の霊長である人間は、自然界で行われている相互保存、共存共栄の法則を破壊してはならない、むしろその範となるべく、人間の相互保存、共存共栄をもう一度考えて見なければならぬ。そして、そのようにしてもたらされた調和された平和な世界は、神の国と同じものであり、古き昔に失われた「エデンの園」と呼ばれる理想の世界であるのです。ここでは破壊や挫折はなく、文明も滅びることなく、どんどん高度な文明が築かれることも可能なのです。人間が肉的五官に根ざした欲望に執着しないかぎり、精神も成長し、愚かな行為に走ることもなくなるのです。

これが神の真理——神理と呼び、正法と私たちが名づけているものなのです。

高橋信次先生が、いままで説かれなかつた宗教の科学的な解釈を提唱され、初めていろいろな著書を著わされました。それに続く、より深く科学的に解明されたものがこの書です。もし、世の科学者といわれる人びとが敬虔な心を持って、真の神の意義を問ひ、私たちが何を人びとに伝えようとしているかに耳を傾けて下さるならば、これを契機に宗教をもっとくわしく科学的に研究された書もこれからどんな世に出てくることでしょう。

ギリシャの時代から哲学の分野で説かれてきた真理を冷静に見つめ、自然と人間との関わりについて探究し、明らかにして来たもの——それが今ふたび明らかにされ、過去におけるメシヤと呼ばれた人びとが全体として説き得なかつた事柄や真理を加えて、皆様に学んで頂き、いかに人は生きて行くべきかを悟って頂きたいのです。

そのために、私たち異次元のものである天上界よりの使者が霊として、霊と語り合える能力のあるかたがたを通じてお話しているのです。

人間とはどういふものか、どうあらねばならないか、どう生きなければならぬか、お互いの協力によって始めて世界の平和と幸福と繁栄がもたらせられることを良く理解し、そのとおりの人生を生きて頂きたいのです。

イエス様の時代より、人は地上に神の国を作ることを求められてきました。その神の国（天国）とはこのようなものなのです。

それから、こういう機会を与えられて、皆さまにはっきりお伝えしておかねばならぬことは、私が存在せぬ者であるとか、高橋信次様のお子様と合体した霊であるとかの間違ったうわさが世間に流されておりますが、それは全くの誤りであり、私はこの書を通じてはっきりとそれを否定したく思います。

いかに、私の生まれ変わりであるときり返り多くの人びとに語られ、あるいは、書物に書かれても、ミカエルである私自身がそうはっきり否定するのですから、二度とそのような誤った考えを持ち、誤った説を主張せぬよう、私はここに強くその人に忠告いたします。

これは私のみならず、天上界の高次元を代表する人びとの忠告なのです。この書は、真実の天上界の計画および声を明らかにするものであり、誤ったうわさが公然と世の中に認められているならば、それを一つ一つ正して行く目的をも持つものなのです。また、もう一つは、悪霊の世界あるいはその計画を知らず、意識せずにその場限りの楽天的な人生を歩む人びとに憑依し、その魂を蝕み、世の中に害悪を流す手先となしたり、悪霊の存在を知る人をも、その巧妙な手口でいつの間にか踊らせ、天上の意志や計画とは異なる方向に他の人びとを誤り導かせ、思うままに、神の子である霊に導びかれるべき善良な

人びとをあやつる——そのように憑依せる悪霊の集団の行動を、束縛し、その強化を阻む目的を持つものなのです。何よりも私たちがこの地上に住む人びとに望むのは、世界が一つになり、天上界と心を合わせ、調和と平和の世界を築きあげることなのです。

それは、日本という狭い地域に限らず、世界中が心を一にしなければ、実現出来ないことなのです。何に目標をおくか、それが大切なのであって、各人が正法を行うことに心が向くこと、正しい形の正法を説くこと、理解を深めること、良き悟りへといつも努力することなのです。

そのようなかたがたからは悪霊も離れ、同時に天上界の守護が力を増すでしょう。それを私たち天上界の者はいつも望んでいます。

## ガブリエル大天使

私は六大天使の一人ガブリエルでございます。私たち六大天使は、ミカエル大天使長の下で働いておりますが、私どもの下にも多くの天使たちが、それぞれ大天使について仕事をしております。

私は伝信伝達を司っておりますが、あとの五人も皆それぞれの役割を持っております。パヌエルは科

学全般、ラグエルは律法など……、私たち六大天使も他の天使たちや天上界の者と同じように日夜魂の修業に励んでおります。

私はかつて、デンマークの哲学者キルケゴールとして生まれ、キリスト教徒の真の姿を説き、実存主義の基を築きました。また、イタリアの一神父として生まれ聖書を研究し、キリスト教の本来の教えを人びとに広めました。ドイツの哲学者、ショーペンハウエル、音楽家シューベルト、詩人バイロン、詩人ダンテとしても生まれ、それぞれ仕事をこなしてまいりました。

このように、私も魂の修業のため、何人かに転生してきたのです。

魂の修業とは、この章の終わりにある高橋信次の章でくわしく説明されており、また第一章（著者の霊体験）で、どのように神というものの存在が高められていても、個人がそれに近くなろうと努力するのでなければ無意味であることを、他の例を引いて説いてありますが、私のお話したいこともそのことなのです。

“あのように立派になりたい”、“あのように素敵な絵を描きたい”、“あのように素晴らしく歌をうたいたい”などの欲求は、人間本来の向上心と名づけられるべきものですが、それ以上の心の浄化という過程を経て持つ欲求は、もっと高いものを目指し、もっと高い悟りに根ざしたもののなのです。

あなたがたが何かをしようとする時、あなたがたの心で、それは良い、とか、それはいけない、という批判の聲が聞こえるのを感じませんか？ もし聞こえるかたがあるとすれば、そのかたは天上界から来てあなたがたと合体している霊が、あなたがたに教えているのです。もし聞こえないかたがいたとすれば、そのかたには天上界の霊がついてくれないのかも知れません。

それを良心と呼ぶ人もおれば、心の声、あるいは善我と呼ぶ人もおります。

あなたがたのなかでこの良心、すなわち善なる我の声、を意識しないで生きていくかたがあるとすれば、そのかたは周りの人になりたいへん迷惑をかけ、また、そのかたたちから嫌われているかも知れませんが、そのような人にならないためだけにでも、内なる善我の声に耳を傾けて頂きたいのです。

あなたがたが、もし天上界の高い次元から来た魂と合体しているのであるならば、なおさら、あなたがたの魂を清くし、これで果たして良いのであろうか、自分は正しいことをしているのだろうか、というのを常に考えていって欲しいのです。

天上界の霊はすべて善なる心を持っていますが、あなたがたが美しい心や清らかな心（すなわち、この世的な欲望や物ごとに対する感じかたを言っているのですが）の持主でなければ、彼らはあなたがたを好きになれないのです。好きになれないからといって、あなたがたを放り出して一人ぼっちにしてお

くということではないのですが、あなたがたに親しく話し掛けてくれなくなるのです。それを淋しいと思わないで、意地を張ったり、ひねくれたり、ひがんだりして、心の美しい清らかな人に辛くあたったり、その人を変わった人種でもあるかのように扱うことは天上界では許されないので。

かえって、その美しさや清らかさに自分が少しでも接して、吸収したい、どうすればそうになれるか学びたい、という心がなければ、あなたがたに天国の霊は優しくもしてくれなければ、親切にもしてくれないし、あなたがたの人生は暗く不幸なものになるでしょう。『光を愛する』ということはそういうことなのです。その反対に美しいもの清らかなものを避けたり、嫌がったりする人は、『闇を愛する』人であり、悪霊の好むタイプなのです。その人を守っている善霊が離れば、すぐ悪霊が憑依してくるので

す。

あなたがたが悪霊と一緒に住み、地獄に何千年も閉じ込められていたいなら、光りから逃げても良いのです。しかし、『光り』が好きであるならば、馬鹿な生きかたはやめて、光りに相応しい心を持つように努力しなさい。光りに相応しくない人が光りを愛しているように装うのを偽善といい、偽我ということです。偽我は悪霊や地獄霊のもので、天上界に迎えられたいと望むような人は、偽我を完全に捨てなければなりません。

天上界は誰でも迎え入れるように見えますが、とても厳しく、自分を偽って心と反対のことを言ったり、したり、するような人は、幽界かさも無くば地獄へ行かせるのです。どのように高い次元から来た魂と合体している人でも、天国はどんどん低い次元に落とします。これらはすべて魂の修業をする過程で起こります。汚い心や醜い心を美しく浄化（清くすること）するまでは、天国はあなたがたを迎え入れてくれないのです。それをけっして恨んではいけません。これを定めるのはすべてあなたがた御自身なのです。天国に昇るか、地獄に落ちるか、すべてあなたがた自身で選ぶのです。

肉体は、せいぜい百年ぐらいで滅んでしましますが、その一生で経験したことや、そのときどきの気持ちや行動はすべて魂に記録されます。魂というのは永遠不滅ですから、それも永遠に残るのです。たくさんさんの経験を積み、判断力が増しそれだけ成長することになりますね。そして、天上界に帰った時にも、そのような経験を土台にして、他のかたのお話しを聞いたり、また守護霊、指導霊と成り三次元の人の身辺を守り指導することによって自分の心をも高めていかなければなりません。

天上界においても修業は続くのです。すべての物ごとにおいて、もうこれでいい、もう完全である、というようなことはないのです。人は死ぬまで勉強だといいますが、地上界での生活が終わっただけで修業が終わるわけではありません。永遠に修業が続くのです。そして、あなたがたばかりでなく、私たち

天上界の者も日夜魂の修業に努力しております。自己の魂の修業は、けっして自分一人のためだけではございません。自分が何かを悟ったなら、その悟ったことを他の人びとに教えることができます。それによって、他の人びとも悟りに近づくことができますでしょう。また、他の人びとが悟れば、自分もその教えを聞き、悟りに近づくことができますでしょう。ですから、他人のために何かをするということは、自分を高めるということになります。しかし、このように自分⇄他人というような悟りに達するまでには相当な努力が必要でしょう。けれども、あなたがたがその氣で行なえば、出来ないことは何一つないのです。

神の代行者であられるエル・ランティ様でさえも修業を続けるという点では、私たち天上界の者も地上界のあなたがたも同じなのです。あなたがたは、私たちと心を同じくする仲間です。ですから神を信じ、善なる心を信じ、おこなおうとするすべての正しい人たちよ、あなたたちは一人ではありません。あなたたちの仲間が天上界にも、この地上界にもたくさんいるのです。それをいつも心に留めていてください。

私たちとともに歩みましょう。ともに魂の修業にはげみましょう。  
私の言いたいことは、これだけです。

すべての魂よ、少しでも神の心に近づけるように努力して行ってください。

私たち天上界はあなたたちとともにおります。天上界の者はすべてあなたたちとともにおります。恐れず進みなさい。

あなたがたに幸福がおとずれますように。

## ラグエル 大天使

私は、ラグエルでございます。私もミカエル大天使長のもとで働く六大天使の一人でございます。私は主に律法を司っております。私は、六〇七世紀には聖徳太子として、一七世紀前半にはデカルトとして、一八世紀にはロベスピエールとして、この世に生まれてまいりました。

六〇七世紀、聖徳太子として生まれた時は氏姓制度の混乱を正し、日本文化の飛躍的發展に努めました。「十七条憲法」などを制定したりしたのも、私の仕事である律法に関係しているということが、みなさんにも理解していただけると思います。

一七世紀にデカルトとして生まれてきた時には、私は合理主義をこの世に残しました。その時代に、

神の存在に対して、私は「汎神論」を残しました。神とは自然と別物ではなく、宇宙全体が神なのであるということを表わしていました。

一八世紀には分身がロベスピエールとして生まれ、みなさんも知っておられることと思いますが、フランス革命時代に政治家として、自由と平等という自然の権利を取り戻そうとして働きました。

他の大天使がたも各自の仕事において、革命的な仕事をされております。

私たちはこのように地上界に生まれ出では、自分の担当している分野の仕事を大改革して後世の人びとの進歩をはかって、また天上界へ帰るのです。私たちが生まれ大きな発見をし、後の人びとがそれをもとに発展し、そしてまた、それが発達してきたころ、大きな改革を起こす、というようにして、この世は発展してきたのです。私のばあい律法をうけもっておりますが、つねに人間の自然より与えられる権利、すなわち、平等を説き、地上界の人びとに真の人間のあるべき姿を理解して頂いて、自分一人よければ良いという利己的な考えは捨て、人びとは互いに平等であると自ら感じとって頂きたく、このように地上界に働きかけました。

## パヌエル大天使

私はパヌエルでございます。紀元前五〜四世紀に、私は古代ギリシャに哲学者プラトンとして生まれました。この時、私はキリスト様、孔子様、ブッタ様とともに、世界の四大聖人と呼ばれるソクラテスの下で学びました。とくに数学、哲学に力を入れ、学校も建てました。間違ったことをせず、反省をなし、善を追求するということは、師であるソクラテスから学びとったもので、それによって、真の人間像を人びととともに探求しました。

一七世紀には、本体として、イギリスの物理学者、ニュートンに生まれました。この時には、*光*についての研究、や、*微分・積分法*、*万有引力*など多くのものを残しました。*光*それは、すべての人間に平等に照らされている神の心のようなものです。そして、*万有引力*は、すべての物体に平等に生じる力です。このように、私が科学的に、あらゆる人間には、平等に、*光*・*引力*などが働き、それは、けっして一人だけを特別扱いにしたいということによって、人間はこの自然のなかにおいてすべて平等なのである、ということが言いたかったのです。

そして一八世紀に、リンネとして生まれました。この時も、私は本体として生まれ、知られているように、植物学者で、『二名法』などは良く知られていると思います。そして、この時には動物も植物も、すべてのものは、移り変わっているという法則を残しました。これは仏教にもありますね。輪廻といて、すべての魂は転々と、人間は人間に、動物は動物に、植物は植物に、移り巡って、永久に滅びないということですが、このようなことは単に宗教用語だけでなく、自然界でもこのように証明されていることなのです。

私たち霊の存在も確かなことです。科学的に説明することもできるでしょう。私はニュートンとして生まれた時、先程、書きましたように、科学的、数学的な発見もしましたが、その反面、神の神秘性についても興味を持ち、『神秘論』や『悪魔論』なども書きました。そして神や天使の存在、また、どうして奇蹟が起こるか、などについて疑問に思っておりました。この時、このことをはっきりと人びとに伝えることはできませんでしたが、この地球上のあらゆるものは、すべて平等だということだけは、はっきり伝えることができました。そして、すべての物は法則に従って、科学的に働くのだと知りました。宗教も科学と結びつけられます。すべての物事は科学的に証明できるのです。

また、この本には、多くの奇蹟について書かれておりますが、これはこのかたたちの偽りではござい

ません。真実おこなわれたことです。そして、この「奇蹟」も不思議なことではないのです。いずれそれは、多くの人びとによって、証明されるでしょう。

私たちは全人類に、「正法もまた、科学である」ことが理解されることを望んでおります。そのためには、どんな「しるし」をも現しましょう。どんな協力も惜しみません。しかし、その「しるし」は、正法の存在を、より確かにするためだけであることを悟って下さい。ただ正法が人びとに広まることを願っているのです、それ以上の望みはないのです。正法において、真に皆さまが悟らねばならないことは、「善をなす」、「善なる心ですべてのことを図る」ということです。そうすれば、自然に皆さまの人生に幸福が訪れるでしょう。そして、いつも私たちは、そのようなことがたのことを心に留めて、出来る限りの援助の手を差し伸べましょう。「悪を喜ぶ」人のそばに、私たちはいないことを知っておいて下さい。不幸の中においても、私たちの存在を感じるとき、私たち天上界の霊がともに歩み、恵みの光りを注いでいることを、見出して頂きたいのです。小さな喜びに天を感じるとき、あなたがたは天の波動に合っているのです。

今、全人類に呼びかけます。目をさましなさい。私たちは、すべての皆さまを見守っております。勇気を出して、進みなさい。

## サリエル 大天使

私は、サリエルでございます。私も他の大天使がたと同じように、ミカエル大天使長のもとで医学・薬学を司り働いております。

私は他の大天使とは異なり、唯一人の女性の天使でございます。けれども他の大天使がたと、なんの変わりもございません。男性も女性も本質的にはまったく変わりません。ただ一つの魂だけです。

私の司っております医学・薬学は、この世界になくはならないものです。傷を癒し、病を治し、人が生きていくうえで絶対に必要なものです。私もこの地上界にシュバイツァーやパスツールとして生まれ、医学的な発見や実績を挙げました。他の方面ではマリー・キュリー、仏陀様の妻ヤシヨダラ姫、アルテミス、天照大神などにも生まれました。アルテミスはギリシャ神話などに、また、天照大神は日本神話に描かれています。はじめから神として生まれたわけではございませんでした。その当ても正法の仕事をして修業をしていたのですが、後の人びとが神として描いただけなのです。

体の傷や病気は、治療によって必ず治ります。現在、不治の病といわれる病気でも、医学が進歩す

れば近い将来、完治できるようになるでしょう。しかし今、この地球上の人びとは心の病気にかかっているのです。自分のことだけにしがみつき、他人のことを顧みず自己の利益や快樂だけを追い求めて、人間本来の姿を全く忘れ去っています。今日の新聞をにぎわすのは、人殺し、子捨て、肉親間の殺し合いなど、思わず目をおおいたいほど無残なことばかりです。人びとは自分の心を見失い、すさまじく切っています。心の病気は医学や薬で治すことはできません。なおすことができ得るのは、愛の法・正法しかありません。正法を实践することは、決してむずかしいことではありません。日常の生活のなかで行うのですから。しかし、人生においていろいろむずかしいことや、辛いことにも出合うでしょう。しかし、そこから逃げてはなりません。快樂だけを、樂なことばかりを求めていき、その先に何が残るでしょう。試練に耐えることを知らない、弱い空虚な心だけです。このようなものは、自己の成長になんの役にも立ちません。妨げるだけです。益になることはけっしてございません。試練に耐え抜き、自らを高めようと努力してゆけば、必ず、強い心と、充実した日々と、永遠の生命が与えられるでしょう。試練を恐れてはいけません。それは自己を高めるためのステップなのです。

早く病気を治すことが必要です。そのため、今、広く人びとに伝わらねばなりません。私たちは、とてもせっかっぱ詰った気持ちでいるのです。ぐずぐずしてはいられません。今すぐ正法が必要なのです。人

びとの心に愛の心と、安らぎを取り戻すため……。私は医学やその他、すべての面における人類の進歩と、精神、魂の進歩を願っております。

すべての人びとが神の心を一日も早く取り戻すことが出来ますように……。すべての人びとに、真の幸福が訪れますよう。

## ラファエル大天使

私は、ラファエルでございます。

私も、ミカエル大天使長のもとで働く六人の大天使のうちの一人として、芸術、文学、歴史学を司っております。

そして同じく、魂の修業のために何人かに生まれ変わってまいりました。

一五世紀に、科学者でありまた芸術家であったレオナルド・ダ・ビンチとして生まれ、本来、人間が目指して行かなければならないのは万能で平均された理想の人間であると教えたのです。一六世紀に、私は画家ラファエロとして生まれ、天上界の様子や人びとの姿を描きました。そして、一七世紀には、

私はシェークスピアとして生まれ、人間の生きかたについて深く追求しました。この時に私は、四大悲劇、喜劇、悲喜劇など、多くの人生におけるドラマの対象となるような作品を著わし、今でも映画、演劇その他で皆さまのお目にとまることも多いかと思えます。

それらのうちに描かれている人びとの人間像は、円満さを強調したものや、鬱病的なものや、躁病的な人間や、偏執的な性格や、明るくこだわらない性格や、種々さまざまで、レオナルド・ダ・ビンチの理想像とは違い、多角度から人間を分析し描くことに興味を持っていました。

私の人間観といってもよいでしょう。

特に「ベニスの商人」のヒロインであるポーシヤの役柄において、その性格を分析すると、あらゆる両極端な性向が一つとなって、かえって円満な性格を形作り、複雑なそして愛すべき人間像を表現することになったのです。その性格はあなたがたのなかにあるものと同じ、あるいは、多く共通したものだということを読者の説明を読めば、きっと理解されるでしょう。そして、この本に説かれている、私たちが天上界の者に愛され容認される性格について、読者のなかで誤解されているかたがありましたら、この章を読むことにより、皆さまは人間というものの複雑な性格とその表現の幅広さに、共感を覚えられ、少なからず安心されるのではないだろうかと思っております。

天上界が愛する、また、好む性格とは、禁欲的で、清教徒的なものではけっしてない、ということをお皆さまに理解して頂きたいのです。すなわち、私があえてシェークスピアの作品について語るのは、それが天上界の良しとするものだとしたことなのです。ポーシャによって代表される性格とは、ある時は天衣無縫でとらえ難く思える時もあれば、淑女のように礼儀正しく事を弁(わ)きま(え)、正義を説くに理性的で冷静で鉄のごとき意志を持つごとく見えるかと思えば、人間愛に裏付けされた慈悲の尊さを説くものであったり、無謀なほどの大胆な発言をするかと思えば、それは細心に計算された賢明さの表れてあったり、厳しく理論を展開するかと思えば、ユーモアで聞く者の心を柔げたり、喜怒哀楽を生き生きと表現し、けっして自由な弾力性を持った心を失わず、明るく、自己を想像力と表現力と創造力において、決して形式によって束縛せず、しかしほん放(はな)ではなく、權威の前に畏縮せず、卑屈にならず、のびのびと振舞う。そのような性格なのです。

その中に多くの互いに相反する性格が柔げ合(あ)って、偏(ひと)り(かたよ)りを防ぎ、表面には円満なものとして現れる。それは人間でなければ持つことのできない複雑な、しかも健全な精神なのです。

健全ということの尺度はこれもいろいろあるでしょう。しかし、ポーシャを良しとする私たち天上界の者の目と尺度から見れば、多くの人は不健康な生活を送っていられます。それは多くの場合、社

会の階級と、制度と習慣や様式と、一番根の深い偏見という病気に冒されて、人間の魂の自由とは何かを見失っていられるからです。次いで、人間の魂の自由を奪うものは人間の欲望と虚栄心と執着なのです。

それらが人間を地上に縛りつける鎖であり、天国を遠くへだたせる空と大地のクレバス（割れ目）なのです。

そのような鎖に縛りつけられたかたがたは、どうやって天国へ来ることが出来るでしょうか。もちろん、自由を奪う鎖を断ち切らなければいけないことは、言うまでもないでしょう。さて、そのような鎖を断ち切るためには何が一番近道でしょうか、考えてみて下さい。

まず、ブッタ様の説かれた八正道があります。ブッタ様の章が後の方に出てきますが、それは如何に物事の判断の基準を正しくするか、という方法について述べてあるのです。

正しく見、正しく思い、正しく語る。この三つが物の表面的な表れ、および内面的に隠されたものを同時に判断し、正しく行動する上での基準にするために必要な心構えです。後の五つはブッタ様の説明されたことを読んで理解なさって下さい。ここでは、この三つだけが必要なのです。そして、ブッタ様が説かれた慈悲とイエス様の愛の心を加えるのです。その五つが揃えば、先に述べた鎖を断ち切り、天

国へ行くこともでき、また、地上に楽園、ユートピアを作ることとも可能なのです。

それでは、例を挙げて判断の仕方を考えてみましょう。

愛ということについて正しく判断してみますと、愛はいたずらに優しく寛容ではないわけです。対する相手が間違った生活態度をとり、社会が歪んでいないとした場合の正しい考えかたの基準に沿って行動し、生きていなければ、それを改めるよう忠告し、改めなければ改めるまで、厳しく接する愛の形もあるのです。しかし多くの場合、人びとは愛や寛容を、日和見的な諂（へつら）いや、感情のもつれを避けるための無関心さというものと取り違えてしまうのです。また、不必要な同情で忠告されるべき人を甘やかせ、ますます歪んだ人生を送らせてしまう。そうして、自分たちだけが耐えればよいという、義理人情に左右された間違った正義感をおす人もおります。何が正しさの基準であるか、全体を見渡して判断することの出来ない人が理性を持ってではなく、感情で物ごとを定めてゆくのです。

イエス様は決してこのような態度を良しとされませんでした。あくまで天の意志と理性に従って、その中で人間愛を、と教えられたのです。天の意志とは、正法の言葉に変えれば、宇宙や自然の法則を見習えという意志であり、正しい形の調和の姿を指すのです。人間が自然の法則を見習った調和の形とはどういうものでしょうか？

それは、互いに迷惑を掛けない、個人の自由と人格を尊重する。感謝を忘れず、必要であれば悪びれずに謝罪をする。つねに誠意と義務と責任感を持って対し、互いの和を図る。必要があれば進んで助け合う。そしてお互いの望むところ、喜ぶところのものを賢明に判断して与え、為す。それが人間としての宇宙や自然に習った調和の形であり、愛という捉え難い言葉であり、観念を正しく表現した形なのである。

このように人間愛と調和と平和は互いに関連し合っています。そして寛容は慈悲の心と切り離すことの出来ないものです。

これらのなかで、慈悲（寛容、許し）と愛は人間のみが持つことのできる高等な感情です。

動物も或る程度持っていますが、人間のようにはすべてを乗り越えて、それらを与えることは出来ないのです。なぜならば、動物は意識せずに本能によって、愛や慈悲と見える行動をしますが、人間は本能や感情に左右されずに理性に基づいて（ということとは、自己の利益に捉われずに判断し、行動するということ意味です）、愛や慈悲を与えることができるからです。

このように地上を神の国、すなわち、天国と同じユートピアにするためには、私たち天上界に住む者と同一判断と行動、生き方が要求されるのです。

しかし、良かれと願っても、人間間や社会における歪みを正そうとすれば、私たちが悪霊と戦うように、時には人の心や社会に蔓延（はびこ）る悪の思いと戦わなければならぬこともあるでしょう。その場合にも、人間の崇高な精神である愛と慈悲に基づいた調和の心が根底になければ、たとえわずかな意見の食い違いも許し難く、互いの破壊を招くものとなるでしょう。悪を憎み、正義のために戦っているつもりでも、寛容の心を忘れては、いたずらに相手を傷つけるだけに終わるでしょう。戦いと平和が相容れるものであるかどうかは、いつも大きな疑問を残してきました。

今、私が述べたことで、ふたたびその疑問が浮かぶならば、天上界の尺度によれば、悪の侵略のために平和が脅かされるならば、正義の剣は取らなければならないと理解して下さい。

ふたたびくり返しますが、平和と調和は、言うべきことも言わずにお互いに甘い言葉を交し合って、お互いの性格の不健全さも歪みもそのまま受け入れ、それが習慣になれば、社会の歪みも黙認して個人がそれに合わせてしまう。そうして、三次元の人間が一〇パーセントの意識と智慧が大半で作られている社会がすべてであり、地上のこののみが人生における唯一の関心事になってしまふ。そう考えていられるかた、そのように三次元の世界を理解していられるかたがあるとすれば、それは正しい受け取りかたではなく、健全な判断ではないことを知って頂きたいのです。

寛容の心といっても、いたずらに許すことのみが社会に平和をもたらすとは限りません。悪と不正と不健全な考えをそのままにしておくことは、かえって社会に混乱を招き、精神の向上や文明の発展を遅れさせるだけなのです。

これが、私の理想とする人間の性格であり、心であること、そうしてすなわち、天上界が三次元のかたがたに求めるものであり、四千五百年の昔から変わらず伝えられてきた正法という教えで説かれていゝるものを解り易く、具体的に説明したものです。

終わりにもう一つ付け加えますが、この本の内容は、「神」という抽象的な概念を明らかにし、自然、宇宙という物質的なものに還元してしまう目的を持っています。それによって浮き上がってくる疑問、人間はどう生きるべきか、どう在るべきか？に答える必要がでてきます。

それは、高橋信次様も生前に主張なさっていられたとおり、人間の一人一人が、「心」を認識せよ、という事なのです。

すべてが物質とエネルギーに還元されるから人間は生きる意義をなくし、植物や動物のようにひたすらに、自然の法則に従って生きよ、というのではないのです。それでは私たちが万物の霊長として、最高に発達した頭脳を与えられている意味がなくなるのです。

この意味がお解りでしょうか？

私たちは、いくら悲観的になっても、楽天的になっても、また、絶望的になっても、動物のように一日をほとんど考えずに過ごすことはできないのです。科学優先の時代だといっても、人間は考えることや感じることを無視して生活することはできません。それが文学となり、芸術となり、宗教となり、神を求める心となるのです。

そうして、私たち天上界の者は宗教や神を求める心が湧き上がってきたとき、あなたがたが科学文明の時代に生きることを思い出し、間違った神に惑わされずに、正しく生きて行くには——心を大切に、善なる自分を大切に、そして魂の修業をして、個々に立派な人格を養い、人間、人類の宇宙の中で果たす役割——義務と責任は何かということを常に問うて行って欲しいのです。

\* \* \*

三次元の間人が一〇パーセントの意識と智恵が大半で作りに上げている社会とは、天上界のかたちから見て、人間が肉体を持っているあいだは、その肉体を維持するためのいろいろな必要性から、エネルギーが五官六根に根ざした生活や煩惱に費やされ勝ちになり、十分に頭脳を働かせて知識や智恵を吸収したり、活用したりできないため、大脳の一〇パーセントしか開発され用いられていない、とする

高橋信次先生の御説に従ったものです。

そうして、人間が死を迎えて、霊となり、肉体維持にエネルギーが必要でなくなると、大脳の意識は残りの九〇パーセントをフルに利用し、素晴らしく智慧ある者となる。これをバニャパラミタといいますが——ということですよ。

そして、もう一つつけ加えねばならないことは、人間に神性を与えるこの書は人間をその責任と義務から解放するものでも、また、不遜な無神論者に自由を与えるものでもなく、かつまた、

『社会悪との戦い』に関しては、天上界は誤れる理想主義と巧みに豹変する言葉をもって人心を操り、テロ行為を正当化するようないかなる種類の政党、国家、民族並びに学生運動や、また、それに協力、同調する者も認めておられず、サタンもしくは悪霊と同列であると思われ、善霊の助けはそこにはなく、永遠の生命は与えられないものである、とミカエル大天使長以下、大天使がたは断言されておられます。

また、このような『社会悪』を裁く側に立つ者としては、例えば、『ハイ・ジャック』などの対応策にも他の場合と同じように、『正見・正思・正語』の見地から判断を下さねばなりません。日本では何

よりも、「人命尊重」が第一で、西欧やイスラエルなどにおける人質救出作戦の強硬手段にややもすれば批判的になりがちです。これを天上界の側から見ますと、日本人の「人命尊重第一主義」のために凶悪犯を平気で国外に釈放するのは同じく誤った人道主義で、極端な言い方をすれば、「社会悪」に同調するものとされているのです。

それは、譲歩を寛容と取りちがえ、低姿勢で無策にハイ・ジャッカーや凶悪犯を国外に泳がせ、そしてその後にとだけ多くの国や人質が、同じ犯人たちのために迷惑を掛けられ生命を危険にさらされねばならないかということを考慮に入れていないからなのです。

犯人が日本人である限り、日本は犯人を国外に出すべきでなく、また強硬措置を取って再発を防止しなければなりません。ハイ・ジャッカーが日本人であれば、日本はこれを国家の恥と考えて、犯人たちを捕え、刑に服させなければなりません。それは国粋主義でも何でもなく、連帯責任と義務ということを忘れた日本人の世界に対する大きな甘えと考えなければなりません、とそうラファエル大天使は申されております。

反面、科学面に言及するならば、核エネルギーの平和利用を越えてそれを無謀に戦力として核実験を

続けている地球は、すでに赤道上にバン・アレン帯と呼ばれる放射能の帯に囲まれ、もしそのような層が大気圏に増え続けると、未来のこの太陽系でただ一つの人類の住む星は、不気味な土星<sup>サターン</sup>どころか恐ろしい死の星になってしまふでしょう。一度作られたものは形を変えない限り永久に残るといふ、考えよ  
うによつては恐ろしい物質不滅の法則を、人類は事あるごとに思い出す必要があるのではないでしょう  
か。

このように、科学者として知らずに「社会悪」に全面的に協力している場合も多くあります。公害、薬害問題も明らかなその例であり、今、科学文明の中に住むからこそ私たちは中心の頭脳<sup>ブレイン</sup>たる科学者の良心に訴えるべきものが多くあり、また、全地球の運命がゆだねられているといつてもけつして過言ではないでしょう。

— 著 者

## ウリエル大天使

私は、ウリエルでございます。ガブリエルやラゲルやパヌエル、サリエル、ラファエルと同じくミカエル大天使長の下で働いております。私の生まれ変わりとしては、ケネディ、フランクリン、ルーズ

ベルト、リンカーン、洪秀全などがあります。

私の役目は、一般に政治、経済、自治を司っており、その方面の動勢、発展の度合いなどの連絡を私の下の天使たちより受け、それをミカエル大天使長に伝え、また天界の会議で定められた事がらを天使たちに伝えることです。しかし、私個人としては、天界で行われるような討議のように民主的な政治形態、バランスのとれた健全な経済成長を好んでおります。遠くはギリシャからアメリカに引き継がれた国民の参与する、正しく解釈された民主政治が望ましいと思っております。ギリシャは今見る影もなく、アメリカは形だけの民主主義国家となり、世界の他の自由諸国、民主主義国家といわれるものも、その真の意味を理解していないのは、たいへん残念なことだと思っております。天界のかたがたは皆、同じ意見を持っております。正法が正しく伝われば、人びとの荒んだ心も、他人を思いやる、豊かな心に変わるでしょう。民主政治とは、そもそも国民全体が参加し政治を行うものであり、ひとにぎりの人びとが勝手に法案を決めたり、利益のために、利権的なことを一人でしたりするものではございません。残念なことに、今現在、民主主義国と呼ばれる国の多くは、いえ全部といってもいいくらい、このようなひとにぎりの人びとによって、自己中心的な政治が行われています。このひとにぎりの心ない人びとのため、今はたいへん危険な状態にさらされているのです。

自分の利益を求め、地位を求め、名声を求める。これらの人が考えるのは、ただそれだけのようです。また、その下におります人びとも、自分の国さえよければというような考えでいるのです。今の国交状況や、貿易、国内における自治政治の状況を考えてみてください。人びとは本当に自分の国、あるいは自分のことだけしか思っておりません。このような状態のまま進めば、この先どのようなことが待ちうけているでしょう。目に見えています。

このままいけば、第三次世界大戦は免れません。今、現在、どれほどの国が水爆・原爆を確保していることでしょう。このようななかで戦争がおきれば……、と想像するだけで胸が痛くなります。地球上のあらゆる生物は滅び去り、地球は二度と住むことのできない死の星と化すでしょう。戦争から良い物は何一つ生まれません。戦争がもたらすものは、ただ破滅のみです。私たちは、このようなことを許してはいけないのです。けっして……。

このような事態を避けるため、いま正法が必要なのです。一人でも多く、一刻も早く正法を理解し、伝え広めなければなりません。全人類に正法が正しく理解されたならば、真の意味の民主政治が行われ、政治や経済も理想的な状態になり成長してゆくことでしょう。

つねに他の人びとのことを考え、お互いを思いやってゆけば、理想の社会がつかれるでしょう。この

ような社会をつくらねばなりません。それはあなたがたにかかっているのです。悪をはびこらせ、人類を滅亡させ、地球を死の星にするのも、理想の社会を建設し、地球を調和されたユートピアにするのも、あなたがたしだいなのです。私たちは、ユートピアを建設するためには、どのような協力も惜しみません。しかし、私たち天上界の霊は、助力することしかできません。あくまでも行うのはあなたがたなのです。ですから一日も早くこの法が、多くの人びとに伝わる必要があります。一刻も早く、一人でも多くの人に……。

このかたたちの手を借りてこの本を出したのはこういう理由なのです。けっしてこのかたたちの勝手な想像や考えだけで書いているわけではありません。私たちはもはや、一刻の猶予もないことを悟り、大勢の人びとに伝えるため、この本を出すことを決意しました。私たちの願いは唯一つだけです。理想の国・ユートピアをつくりあげることなのです。この本ができるだけ、大勢の人に読んでいただいて、正しく理解されることを望んでおります。

## ブツタの章——原始仏教を取り戻そう

元来、私の開いた仏教は、“生きている人間の実行する法”、すなわち、個人の悟りを目的とし、その個人一人一人の心の調和によってユートピアを作るというものでした。

現在の仏教はもはや、朝夕のお勤め以外の何物でもなくなりました。生きている人間の法が何時の間にか死者への鎮魂のものとなったのです。本来の姿からかけ離れたものとなったのです。心の安らぎの場、精神修養（反省）の場であるべき仏閣は悪霊の棲家となり、偶像崇拜を続け（口きかぬ、人間の作ったものに何故功德があらましようか。たんすや机を拝むのと同じことです）、やたらと意味を理解してもいらないお経を上げるものではなく、なかに書かれていることを実行することなのです。

真の仏教とはどういうものであるかを、もう一度説明いたしましょう。自分の心のなかにある善の自分、それこそが人間の心のすべてであり、永遠不滅の生命の根本なのです。そして心が善我だけならば（他人のために尽くし、愛を分け与える）、心は清々（すがすが）しく浄化され、なんの苦しみも起こりません。ウパニシャッドやわたくしの言う“解脱”はそこにあります。

生老病死という、人間の必須条件から逃れるにはどうすればよいのでしょうか。人間の生命は永遠なのです。肉体の命が減びても心は減びません。すべては輪廻しています。水は雨になり、川となり、大河と合流し、海に流れ、そして蒸発し、また雨となって戻ります。水は水でしかなく、その本質は永遠に変わることがありません。人間も例外ではなく永遠です。何度も生まれ変わることができるのです。ただかか持っても百年のこの肉体。この世限りではないのですから、生きるの死ぬのということにとらわれず、その時その時を有意義に過ごそう。永遠の命を持って生まれてきているなら、肉体を持つこの何十年かを、精一杯心の修業をしよう、ということなのです。

他にも、さまざまな苦しみがあります。苦しみというよりは、心の歪みです。欲望、妬（ねた）み、譏（そし）り、怒りなどの自己中心的な感情、それらを心に持っている心と心が濁り、不快な気持ちで、いつもイライラし、対人関係も悪くなるのです。しかし、そのような感情は人間である以上は持たざるを得ません。かといって、歪みを持ったままにいるわけにもいきません。大切なことは自分のなかのそういう感情を押さえるのではなく、さらりと受けとめて流すことです。

満足に生活していて、なお贅沢がしたいという気持ち。贅沢をしたからとて、心が豊かでなければ、家庭が不調和ならば、どんな美しい家も、宝石も、慰めにはなりません。心がすべてなのです。あの人

の才能が、自分より優れている。妬ましいという気持ち。妬ましいと思う前に自分がそれに近づこうと努力したほうが賢明です。悪口を言うよりも、その人の悪いところを直してあげるなり、自分の気に入らないことをしたからといって、その人を責めるといふより、相手の立場を思いやるほうが、後で自分の善なる心に照らして見て、気持ちがよいでしょう。相手が自分の思うようにしてくれなかったのを、怒るのはまちがいです。自分中心に考えずに、相手の立場を考え、もう一度、なぜ腹が立つかを反省してみようがよいのです。私の説いた八正道とは、このように「第三者の立場」から相手の立場に立つてものを考え、行動するといふ「思いやり」、つまりは「慈悲」の心に根ざしているのです。仏教は生老病死からの解脱法だけではないのです。

八正道とはどのようなものか、一つ一つ説明しましょう。

正見（しょうけん） 正しくものを見る。第三者の立場から事が見るのです。表面だけでなく、それに隠された真意を見るのが大切です。

正思（しょうし） 正しくものを考える。思うことはその人の心を明るくするか暗くするかを決めます。思いやりの心を基に、正しくものを考えれば対人関係をよくし、自分自身の心も明るくなります。

正語（しょうご） 正しくものを語る。正しく語るといふのは、愛と慈悲のある言葉を語る、愛と慈

悲をこめた語調で語るといふものです。正しく語れば、調和をつくり出せます。

正業（しょうぎょう） 正しく仕事をする。現代社会は分業によって成り立っています。自分の仕事を他の人、世の中への奉仕と考えれば、公害、貧富の差もなくなり、社会全体の調和へと繋がります。

正命（しょうみょう） 正しく生活をする。自分の長所を伸ばすことと、短所を修正することです。短所は、持つて行きようによっては、すぐ長所になります。

正進（しょうじん） 正しく道に精進する。社会関係のなかの調和です。人間関係のなかで自分を見つめ、考え、道に沿って生活する、ということです。

正念（しょうねん） 人の一念は三千の世界に通じ、それに応じて物をひきよせます。類は友を呼ぶのです。ですから正しく、にがりのない心で念じないと、悪友、悪霊がついたりするのです。

正定（しょうじょう） 以上の七つのことをおこなってきたかどうかを、第三者の立場から反省することです。そうして、過ちを見つけ、同じまちがいはすまい、と決意することです。

八正道とは、おこなうのに少しもむずかしいことではないのです。心の濁りを取り、素直な気持ちで実践すれば、すぐに体得できます。八正道に沿った生活をしてゆけば、必ずあなたがたの前途は光で満たされるでしょう。

## イエス・キリストの章

私は、二、〇〇〇年前に、イスラエルのベツレヘムという町に生まれ、キリスト教の聖書に録されているとおり、人はかく生きるべしと、神と人とのつながりにおいて、神々の愛から隣人への愛、人びとの愛から全人類への愛へと広がる形で、愛の尊さとそのあり方を説いて歩き、その過程でまた、科学的には無知であった人びとに信仰の対象として唯一絶対なる神ヤーウエ、すなわちエホバを崇め、また己れのなかにある神性、すなわち善である所の人間性を、天なる鏡に写された姿として、天国は貴方が一人一人のうちにある」と述べました。

歴史の流れとして見ると、私の時に初めて、ギリシャ哲学からインド哲学のなかで説かれた大自然の普遍的な性格や法則、すなわち、宇宙あるいは仏教では梵（絶対者＝宇宙の根源）と呼ばれるものと比較して、個人あるいは我（真実我＝個人）を述べたものから、個人個人の観点に立って、神を主観的・客観的に説くものに代わりましたが、説きおこすところは同じでした。人間としてのあり方を詳しく説いたのです。

さて、その愛というのは、男女の愛や友愛の域を超えた神の愛、アガペー（無償の愛）と与えるのみの愛であり、報酬を求めぬ愛）なのです。言わずともそれは、慈悲を伴うものでなければなりません。神は愛なり」と私が述べ、キリスト教は愛の教えであると、人びとは信じていますが、慈悲の心や、行いについて、たとえを通じてはつきり説いており、また神の愛とは慈悲であり、愛でなければならぬのです。慈悲を伴わぬ愛は自己愛（自己に対する愛や欲望）の延長にしか過ぎません。それは、相手に求める愛であって、与える愛ではないことはお解りでしょう。自分を愛することはもちろん大切です。良い意味での自己愛、自らが持っている人間としての尊厳、神の子としての悟り、そういうものを知って、隣人を己れのごとくに愛せよ、と説いたのです。それは奴隷が未だ用いられている時代で、人間の尊厳についての意識が低かったからです。

その次に説いたなかで重要なことは、地上に神の国を作ることの必要性でした。なぜならば、ご存知のようにその頃の人びとは、無知な者や闘いしか知らぬ武骨な者が多く、野蛮な行為をなんとも思わず、また学者は律法に縛られ、戒律で人を裁き、神の心という計り難い、どのような者にも分け与える愛や、平和を求める柔和な心、慈悲心と等しく、許す心、気持ちなどを知らぬものでした。そのような人びとが真の神の国、すなわち天国と同じ秩序と平和と調和と光りで、満たされた場所を地上に作るの

は、なんと困難な問題でしたでしょう。自分の心のなかにある神と等しくなれる心、真我は善なる心であることなど、振り返って見たこともない人が多かったのです。ですから私は神の国を作るためには、どのような人が相応しいかを悟らせるために、山上の垂訓と呼ばれるものを説きました。

心の貧しい人たちは幸いである。

天国は彼らのものである。

悲しんでいる人たちは幸いである。

彼らは慰められるであろう。

義に飢えかわいている人たちは幸いである。

彼らは飽き足りるようになるであろう。

憐れみ深い人たちは幸いである。

彼らは憐れみを受けるだろう。

平和をつくり出す人たちは幸いである。

彼は神の子と呼ばれるであろう。

義のために迫害されてきた人たちは幸いである。

天国は彼らのものである。

(マタイ福音書・第五章三節〜十節より抜粋)

心の貧しき者とは、謙讓なる心の持ち主で高ぶらぬ心、傲らぬ心を指します。己れを高しとする心や行為に天国はなく、天国を見ることも作ることもできないのです。また、悲しみや苦しみ、悩みのある人は、人によって慰められなければ、天国からの靈によって、また導きによって救い出され、慰められるのです。また、心の柔和な人、おだやかな人は、地上におけるよき支配者となり、人の心を良く導く者となるだろう。また、義に飢えかわいている者とは、正義を求める人で、そのようなものはないと絶望していても、きっと天も人も、その人を満ち足らせるだけの正義が地上にもあるということ、その人に知らしめるでしょう。憐れみの心を多く持つ人、これは慈悲の心から出るものです。そして、その人が苦境に陥ったとき、人から憐れみを受けるでしょう。そして心の清い人だけが、神を見ることができ、すなわち、うぬぼれや自我、増上慢、自己顕示、憎しみ、姦淫、平和をこわすもの、その他すべて、人間として持っている隣人愛のもたらすもの以外の感情をとり去らなければ、天国からの使いも、

神も見ることにはないであろうと言ったのです。平和をつくり出す人はもちろん、地上に神の国を作るのです。それゆえ、真の神の子と見なされる資格があるのです。また正義の心を持ち、信念を持ち、正しい事のために迫害を受けた人びと、キリスト教では多くの殉教者が出ましたが、そのみでなく、他の正しい思想のためにも人から誤解を受け、迫害された人びとはすべて、天国に来るべき人であり、また、天国を代表する人たちです。——すなわち、自己を犠牲にして、他に尽くす愛の心がそこに在るからなのです。私が、律法に苦しめられ、愛を失い、罪のなかに生き、神に見放されようとしていたユダヤ人のために、十字架につけられ、その罪のあがないとなり、神の救いを人びとに分ち与えた意味も、そこに在るのです。また、

「狭い門から入れ。滅びにいたる門は大きくその道は広い。そして、そこから入っていく者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」

(マタイ福音書・第七章十三節)

という言葉のなかで、私は人間としての責任と義務を逃れ、好き勝手な生きかたで、他人に迷惑をか

け、あるいは自分のことのみを考え、その欲望のままに、放縱で墮落した人生を送ることをなんとも思わぬような人には、天国の門は閉ざされているであろうこと、富める人が神の国に入ることは、ラクダが針の穴をくぐり抜けるよりも難しいと、たとえにも申しました。そして天国（神の国）に入るため、また地上に神の国を作るためには、人は心を厳しく見つめ、己れの生きかたを反省し、必要以上の欲望を持たず、執着を持たず、心を清く美しく保ち、この世にありながら、神の心を備えた人でなければ、神の国に入れない。また、それを地上にもたらすこともできない、と申しました。

また、種まきのたとえで、良き言葉を聞いても、その人の心が、それを理解するだけ良きものを持っていなければ、喜んで受け入れても、土の薄い石地にまかれて根がないために、それを留めて育てられる心を持っていず、困難や迫害がくると、つまずき、いばらの地に落ちると、世の心づかいと富のまどわしといういばらが伸びて、実を結ばず、その人の養いとならないであろう。その人の魂は豊かにはならないであろう。道ばたに種がまかれれば、鳥が来て食べてしまう。すなわち、悪い者が来て、その人の心にまかれたものを、奪い取って行く。良き地にまかれて、百倍、六十倍、三十倍の実を結ぶように、素直な心で、良き言葉に耳を傾け、それを自らの人生に役に立てなければ、なんにもならないことも説きました。愛について私は、キリスト教を知らぬ人のためにそれを改めて説きましよう。

聖書に、パウロとソステネという人から、コリントにある教会の人びとに出された手紙ですが、コリント人への手紙と呼ばれるものがありません。第十三章ですが、神の愛というものについて、これ以上よくは説明できないだろうと思えるほど、くわしく説かれてあります。お読みになれば理解されるでしょう。すなわち、

「たとえ私が、人びとの言葉や御使（みつかい）たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や、騒がしい鍍鉞（にょうはち）と同じである。たとえまた、わたしに予言をする力があり、あらゆる奥義と、あらゆる知識とに通じても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無にひとしい。たとえまた、わたしが、自分の全財産を人に施こしても、また、自分のからだを焼かせるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。愛は寛容であり、愛は情深い。また妬むことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで、真理を喜ぶ。そしてすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない。しかし、予言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであらう。なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であ

り、予言するところも一部分にすぎない。全きものが来る時には、部分的なものはずたれる。わたしたちが、幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また幼な子らしく考えていた。しかし、大人となった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった」

(コリント人への第一の手紙・第十三章一節～十一節)

「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうち最も大いなるものは、愛である」

(同・十三節)

そして、この終わりの十三節において、伝導の期間を通じ、私が教えたすべてが、集約されております。いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛との三つであり、そのうちでもっとも大いなるものは、愛である。これは神と人との関係においてだけでなく、人と人との間も、このようなものが保たれてこそ、地上に平和がもたらされ、神の国と同じ、調和のなかのユートピアが作られるのです。私たちは天上界にいても、貴方がたのことを思い、祈り、守りの手を常に差し伸べているのです。貴方がたが

真の善き人びととなり、私たちの説く正法とは何かを悟り、この乱れた世を秩序あるものとなし、人間として生まれた責任と、義務を果たし、天上界よりの光と、太陽の光と恵みとを、豊かに受け美しい自然をよみがえらせ、神の愛をもって、互いに幸福と平和を分かち合える人生を送る日が、一日も早く来るように願っているのです。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。彼を信じる者はさばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人びとはそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。しかし、真理を行っている者は光に來る。その人のおこないの、神にあってなされたということ、明らかにされるためである」

## 高橋信次の章——貴方がた一人一人が法の後継者である

釈迦牟尼仏、イエス・キリスト、モーセと呼ばれる光の大指導霊が、人として肉体を持ち、この世に現れ、およそ二、五〇〇年前から二、〇〇〇年前にかけて、それぞれに説いた教えは（法、あるいは正法と呼ぶべきものです）、多くの弟子達や信者に、その教えが引き継がれながら、いろいろな解釈が加えられ、次第に内容が学問的・哲学的となり、難解な用語が加えられ、複雑な儀式が取り入れられ、僧侶や宗教家、あるいは学者の独占物となり、彼らの解釈や説明なしには、一般の人びとには理解できないものとなってしまったのです。それが三、五〇〇年前に、やはり古代ギリシャにおいて、アポロという人物により広められた教えと流れを一つにし、同じ源に遡れば、すべて神より出た、すなわち、天上界の人びとにより、くり返し歴史を通じて、人びとに説かれてきたものであると、私は悟りました。

そうして昨年六月、肉体の死を経て、天上界（実在界）に帰るまで七年の間、そのことを講演会を通

じ、著書を通じて呼びかけました。これを神の理、神理と呼び、法と呼びますが、これは、ふたたび特定の弟子や個人によって受け継がれるべき、独占されるべきものではなく、全人類に普及されるべきもの、貴方が一人一人がこの教えを継承していつて頂きたいものなのです。すなわち、貴方が一人一人が正式に法の継承者になって頂きたいのです。一人が悟れば、次の人にそれを教えて下さい。それが次の人に引継がれ、このようにして、世界中に同じ教え、正法と呼ばれるものが広まって行くのです。一人だけが悟って、団体に呼びかけても、その中の一人一人が充分に悟らなくては、いままてと同じになり、智と意だけで情（心）の無いものとなるでしょう。私たちはそれをもっとも恐れるのです。私の生存中にも同じ過ちを犯しました。しかし、充分な種をまいたのですから、私の著書を通じ、またこの書を通じ、読者は正法といわれるものを良く理解して下さい。一人一人がメシヤになったつもりで、私たち天上界のものが何を貴方がたに呼びかけ、同じ天上界より肉体を持って生まれ、使命を持って生まれた神の子である貴方がたに、何がその使命であるか悟って頂こうとしているのかを良く学び、理解したなら、それを貴方がたの隣りの人に説いて欲しいのです。私だけでなく、天上界のもの一同がそう望んでいるのです。

ここに改めて私が読者に語りかけている理由は、私が死を経ても、なお霊として存在し続けており、

イエス・キリストの復活と同じく、私たちは永遠に不滅の魂を有しており、三次元の世界に呼びかけることも、語りかけることもできることを証明するためなのです。私は、多くの霊がするように、生前に私を信じてついできた人びとの前に、姿を現わしました。また、私の身近にいた人びとも話しかけましたが、彼らはブッタを信じ、イエスを信じ、モーセを信じながら、この私を信じる事ができませんでした。それゆえ、私はこの書を通じ、偏見を持たぬ、心の清らかな、純真な若い少女たちや、極く少数の、今も私を信じる霊能力を持った人びとを介して、日本のみならず、世界中の人びとに、この書に書かれてあることは真実であり、奇蹟や霊現象も、天上界の霊の助けによって、それを立証する目的で行われ、また、私が生存中に著した著書、残した講演のテープの内容も、二、三の訂正を加え、私の説のごとく、宗教と科学は完全に一致するものであることを証明したいのです。これは、生存中には肉体を持つているがゆえに、確証を得ることができず、心霊科学の分野でも未開発で、科学的に立証できないことでした。天上界に戻り、霊であるがゆえに、私の疑問とする所を三次元の科学者と語り合い、同時に、異次元の霊たちと語り合って、明らかにされたことなのです。

まず、私の講演を聞いたこともなく、著書を読んだこともない人のために、非常に簡単に、私の説いた正法の論点を説明いたしましょう。この本の他の場所でも、いろいろくわしく語られていますから、

皆様が読み終わるまでには、正法とは何か、はっきり理解なさるでしょう。

宗教と科学は究極には一致します。かのアインシュタインも言っております。宗教のない科学は不具であり、科学のない宗教は盲目である。宗教は遠く自然信仰より発しており、科学は自然の法則を探索しています。そうして、人間をも含め、すべてのものは、自然から発生したことが科学で立証されました。大宇宙、大自然に含まれるすべての元素、恒星、惑星、動・植物、鉱物はすべて一定の法則にしたがって循環し、存在して居り、人間の魂も、ギリシャのアポロや、古代印度の釈迦の説いた靈魂不滅・転生輪廻の教えのごとく輪廻している、すなわち循環していること。一度生まれて死を迎え、それで一生が終わるのではなく、あの世の天国か地獄へ、魂が肉体を離れてゆき、ふたたび生まれてくるには、魂の修業というものを経て、生存中なした数々の過ちを反省し、人間はどう生きねばならぬかを悟ります。そうして、心の用意が整えられると、天上界（天国）より、友人や魂の兄弟たちに送られ、守護霊や指導霊に守られて新しい肉体に入り、新しい人間に生まれ変わり、新しい一生をすごす。ただし、地獄に落ちた者は、成仏といえ解るでしょう、天上界へ救い出されてからでなければ、生まれ変わることはできません。自然より与えられる恵みに目を開き、自然の法則に従って調和を学び、神の慈悲と愛のような太陽の恩恵に感謝し、同じ気持ちで人と接する、物と接する。これが調和と平和



のように、

同種のもは、

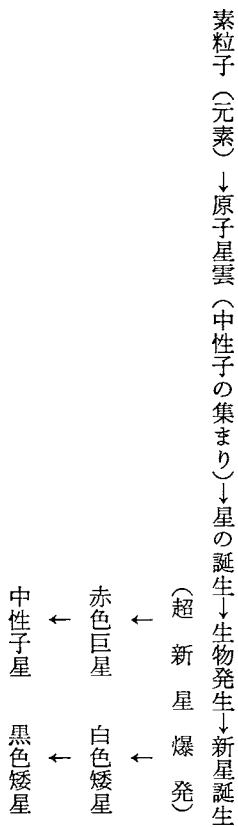
人 間↑↓人間

植物↑↓植物

動物↑↓動物

に生まれ変わるように——すなわち、循環しています。科学用語では循環、宗教用語では輪廻という状態がそれに当てはまります。

また、宇宙的に、極小から極大の世界に当てはめると、



と種々の星、星雲が存在しますが、いつの日か、それらが、反宇宙（反素粒子、反物質などと同じような）と融合して、中性子のみに還元し、そうして新しい宇宙となり、同じ矢印方向への生成、成長をくり返す可能性もあるかも知れません。

動・植物の身体内部にしても、循環が主要な働きをしているということは、ご存知のとおりです。その生體も人間の一生と似ています。

というように、大宇宙、大自然の法則のなかにすべてのものは含まれ、人間もその域を出ない。それゆえに、望むと望まざるとにかかわらず、人間は自然の法則に従っており、また、従わざるを得ないのです。

古代の哲学では、古代ギリシャの時代より、宗教を宇宙や自然に結びつけ、また、それと比較し、そこから宗教論が生まれましたが、ヘブライズムの頃より、モーセ、イエス・キリストを経て、宗教は主観と客観の立場から個人のものとなり、唯一絶対の神（ヤーウェ、エホバ）への信仰が提唱されるようになって以来、神が万物を造った、すなわち、創造神の概念が生まれてきたのです。それは当時の人心が荒んでおり、律法を作り、戒めねばならぬほどのものであった。また、救いを求める貧しく、無知な人びとに、神の理想像を与え、個人の人格の向上をとおして、精神的な喜びに目を向けさせる天上界の

配慮でもあったのです。

かえってキリスト教が滲透しなかった国々では、私の説きました正法での神の概念、すなわち、大宇宙、大自然が神である。これは、古代ギリシャ―古代印度―(古代中国)―古代東洋諸国に残ってきた同じ思想ですが、哲学思想の多くのものに含まれるものと一致し、これが科学の分野での自然と人間、およびあらゆるものの関連を説明するものと一致するのです。一言でいえば、神は人格化されたものが創造神と見做されるのではなく、宇宙であり、大自然であるということです。したがって、天国(天上界)も地獄も、人間が作ったものであり、神と呼ばれてきたメシヤたち(イエス、ブッタ、モーセなど)は個々に悟りを得て、人間としてなすべきことを教えた偉大な魂であり、ユダヤ教、キリスト教での絶対神、エホバ(ヤーウエ)は、エル・ランティイという名を持ち、七大大使とともにある星の惑星であるベール・エルデ星からUFOに乗り飛来した人の魂であるということなのです。もちろん、イエス、ブッタ、モーセも、他の天国の上段階にある霊たち、およびその下に働く天使たち、ならびに幽界を除く界の霊たちすべては、同じ星から飛来し、地球人類と運命や歴史をともししてきたのです。

神話化されていますが、エデンの園はエジプトのナイル川の近く、エル・ランティイがエルカンタラの地、エルデンの園と名付けたところが、いま七大大使と呼ばれる人びとと三億六千五百万年前に降

り立ち、地球人類の発生していかない、しかし危害を加える恐れのある巨大な爬虫類も発生していかない、緑茂れる美しき土地に半生を過ごしたのです。次つぎと他の人びともUFOにて飛来しました。そうして地球の受難の日々、氷河期や、大形爬虫類全盛時代、衰滅、哺乳類発生から類人猿、猿人、人類と進化して、約一万年前のアトランティス大陸文明のあたりから、初めて地球人類とペーエルデ星人との魂の混血が成功したのです。地球上の人類の肉体に、天上来におり地球の成長を見守っていた私たちの魂が入ったのです。もちろん、それまでに発生した生物（原始人類を含む）の霊も、未開の文明である間は善霊として天上来に昇り、私たちが教育し、高い意識を持つまでに導きました。幽界から霊界の意識よりは上がりませんが、天上来は現在のように九次元の段階には分かれていませんでした。地獄もなかったのです。

このようにいくら遡っても、宇宙を創造した全能なる神というものは存在しません。宇宙創造神というものは存在しないのです。何ゆえ宇宙や自然を神と結びつけるかは、先程述べたとおり、万物の創造の源であることと、自然より人は学ぶものが多いことです。宇宙の観点に立つ時、人は小さな雑事や悩み、苦しみを忘れ、自然の雄大な風景は心を大きくし、勇気を呼び起こし、美しい風景は心をなごませます。すべての動・植物は共存共栄し、いくらかの例外を除いては少しの無駄もなく、不必要な破壊

もなく、『自然淘汰』による種の保存、『進化』という一定の法則に従い調和のなかに、長い歴史を歩んできているのです。これは私たちの理想とする姿で、規範とすべきものなのです。それゆえに、人は正しい形での宇宙や、自然に対する理解とともに、理想の心に近いという意味で、『神』と名づけるべきだと申したのです。自然崇拜の神ではありません。あれは理解できない力を持つものに対しての恐怖心から創り上げられたもので、原始社会の副産物です。いやしくも、文明社会に住むものとして、私たちが住む宇宙の構造と仕組みを霊の世界に至るまで正しく理解し、人間はそのなかでどう在るべきかを考えて、生きて行かねばならないでしょう。自然破壊、公害による大気、河川、海水の汚染、戦争肯定の右翼的思想、また、共産生活を叫び、理想社会を宣伝しながら、神を否定し（理想の人格としての神）闘争的な心を持つ共産主義思想などはもってのほかでしょう。そこに天上界の守りはなく、調和から平和への道は敷かれていないのです。

## 二 心や想念帯はどこにあるか

私は存命中、心は胸にあり、想念帯も胸にあると説きましたが、それも非科学的な考え方でした。実際は、現代科学の解釈のごとく、心と呼ぶべき感情の働きは、大脳の前頭葉にあります。すなわ

ち、心は脳にあるのです。また、想念帯は物を記憶するという点でも、胸にあるのではなく側頭葉の記憶中枢にあります。感情の起伏による身体の反応、記憶中枢については、生理学、大脳生理学などに詳しく説明されているとおりです。

### 三 光子体と魂について

光子体というのは、普通、身体から放射状に発しているオーラと呼ばれる光のことで、昔から聖者、メシヤ、天の使いなどの絵に頭部の周囲に円形状に描かれているものが普通ですが、霊能力の強い人には、身体全体から光を放っているのが見えるのです。

誰でもというわけにはゆきません。身体の状態、心の状態によって、色も違い、光の強さも違うのです。健康体では美しい金色で、心の美しく浄化された人ほど、その量も多く、色も美しいのです。しかし、心の状態が変わり、怒り、焦躁、悩み、心配ごと、憂鬱、恨み、強欲、動物的な欲望などで心が占められると、オーラの色が赤や橙、青灰色や、灰色や、水色や、黒や緑などに変ります。そういった人は顔の表情も話しかた、態度も愉快ではありません。また、病気であっても、心が明るく美しければ、オーラは美しいのですが（色も量も弱く少なくなりますが）、心が暗くなると、そういった病的な色

に変わります。心を常に安定した、やすらぎと中庸の状態に保っておくと、その色が美しい金色になります。食事などで、血液を弱アルカリ性に保つという科学的な方法で調節することも可能ですが、多くは忙しい生活をしているので、そういった食生活や他の日常の習慣を、規則正しく律するというのは困難な人もあるでしょう。

しかし、精神的な面から肉体的な面からも、節度ある生活をするというのは、心の修業になることでもあり、無理をせずとも、自然に健康を保てるか、病的な状態から回復できるので、それが一番理想的でもあるのです。自然な心の状態で、極度の感情に走らず、知性と理性とに支えられ、情操的に満たされた、また、健全な生活を好む人格が、八正道といわれるブッタの説いた法を行うに相應しいものであり、すぐに阿羅漢アラハンの境地になり、菩薩ボサタの悟りに達することができます。アラハンからボサターへとオーラの色も一段と冴え、量も増します。

このオーラを或る種のガンマー線だという人がいますが、そのような有害なものを多量に人体が吸収し、放射するはずがありません。これはあくまでも、太陽エネルギーなのです。

天上界からくる魂というのは、人間が赤ん坊として生まれるときに合体します。(胎児が二、三カ月までの水子の時は入りません)。死ぬ時は身体を離れます。そうして、その魂と呼ばれるものと、オー

ラ（光子体）が一緒になって、天上界へ昇り、あるいは、地獄に落ちるのです。その時には、本人の始めからあるものと、天上界からのものと二つに分かれます。

生きているあいだ、それは身体の諸器官から、あらゆる細胞にわたって支配する意識として働きます。消化器官は消化するという意識、呼吸器官は呼吸するという意識、筋肉は運動するという意識、大脳は大脳の果たす役割だけの意識などとして存在するのです。睡眠中、あるいは霊能力が強まったり、あるいは失神や仮死状態などのときに、本人の魂だけが一時的に身体を離れますが、それを幽体離脱と言います。その場合、魂は大脳の部分のみが離れて、一部だけ他の部分につながったままで伸びて行きます。全体としては霊子線というもので心臓のうしろにつながっているので、何処へ行っても、本人から離れてしまうことはありません。そうして離脱した部分の魂に、その部分にあったオーラがくっついて何処へでも行くわけなのです。

始めからある魂と、天上界の合体した魂の部分全体が離脱してしまうと、身体の機能がストップし、死につながります。すなわち、死んだ場合は、体細胞のすべての意識、つまり、体全体の魂がオーラと合体して、肉体から離れるのです。この魂、プラス、オーラを幽体とも言いますが、死に際して離れる時は朱色か赤で、次に隣などが燃えて青くなり、そののち、軽くなって上方へ昇るのです。そうして、

天上界より迎えにきた諸天善神や、その下に働く翼を持った善霊たち（天使ではありません）に天上界へ連れて行かれるのです。

この世に執着を持ったり、生前にオーラの色の悪い人は、ヘドロのように、執着という不燃性物質を持ち、上へ昇ることができず、地上を浮遊するか、心が残る場所に縋っているか、寺、墓、供養塔、神棚、仏壇などに集まります。それが地獄なのです。能力の強い悪霊、サタンなどは地下にもぐり、隠れますが、能力のないものは、地上をうろつきまわります。すなわち、大抵の地獄といわれる界は（九次元ありますが、それは九種類の霊の集合する所と見れば良いのです。同じ意識の者同志が集まります）、地上にあるわけです。だから、地獄の霊、亡霊に一番あいやすいのです。

天国の霊たちは空高く、何万メートルの所に居るので、なかなか皆さんの前には現れません。正法を説く必要のある乱れた時代、メシヤの生まれた時に、その助力者として、天上界から多くの善霊たちが霊として、皆さんの前に姿を現すのです。普通は、各人に守護・指導霊としてついている霊を除いては、特定の人にしか現れないのです。ですから、大抵の人は天国の高貴な、あるいは偉大な霊たちや、善なる心を持った霊になじみが薄く、地獄霊や悪霊と同じように考えて、恐れる人もあるのです。それを見分ける方法は、この本の著者（サリエル大天使の本体としての）が書いておられます。天国の霊は少

しも恐れることはないのです。しかし、悪霊といつの間にか入れ代わることもあるので、霊能力者は非常に注意しなければならぬわけです。

#### 四 善我について

これは訂正ではないのですが、この書を読んでくださるであろう若き人びとにも、また、私の著書を読んでいられないかたがたにも、改めてお話ししたいことなのです。

善我というのは読んで字のごとく、善なる我のことで、自分の心のなかにある良い部分を指します。これに対して、偽我という語もあります。これは、善我以外の感情、すなわち、真の自分は善人であるが、その善人が思うべきことや、なすべきことと反対のことを意識的・無意識的に思ったり、行なったりしようとする心を指します。偽我からは、すべての悪が生まれます。

そして、大切なことは、人はすべて、自分の本来の魂のほか、天国よりきた神の子の魂を内在して日々導かれているのであるから、善人であるはずなのだということなのです。前に述べたように、神は宇宙、大自然によって代表されるのですが、その理想的な神の姿に近いもの、自然の共存共栄によって守られる調和の法則に、人間として従える唯一の要素（意識）は、この人間の心のなかにある善我（善な

る心)なのです。善いことをする、他人のために尽くす、思いやりのある態度で接する、どんな小さな恵みにも感謝の心を忘れない人は善人です。そのような人たちが社会の調和を作り出すのであり、平和なユートピア(理想郷)をこの世界にもたらすのです。

善人ばかりの世界では窮屈だとか、退屈だとか感じる人もいるでしょうが、自分勝手なことをして人を傷つけたり、不快な思いをさせたり、迷惑がられたりすることで善我はけっして満足しないのです。自分が偽我の心で人と交われれば、同じものが必ず帰ってきます。その時でなくとも、いつか同じ形で帰ってくるのです。心は一念三千の世界と申しますが、思うことは三千世界に通じる、世界のすみずみまで行き渡る、あるいは宇宙のすみずみまで行き渡るという意味です。何処かから、誰かから、同じ念が帰ってくるのです。そうでなくとも、人は心のなかに、神と同じ意識である善我を持っているのですから、それに反することは、神に反し、宇宙の法則に反し、また、自分の身体を支配している自然の法則に反することになり、その異和感が、人に罪の意識(居心地が悪くなる、不安になる、うしろめたくなる、など)を植えつけ、心の安らぎを奪うのです。

善人であろうと努めることは、自然と調和し、人と調和することですから、同じものが、接するものや人から帰ってきて、楽しく、心暖まる、とどこおりのない生活が送れるのです。もちろん、ニコニコ

ばかりしているのではなく、人として、年齢に応じて与えられる責任や義務を果たさなければ、心に悔いが残ります。学校を退校になったり、授業をサボってばかりいる高校生や、試験を受けるのに、カンニングの方法ばかり考えている学生や、また、大人の間でも一定の職につかないで、賭ごとに熱中したり大酒を飲んだり、女のヒモになったりする男や、子供の養育をかえりみない母親などは、いちように、心が荒んだり、反抗的な生きかたに執着します。それは善我に反した生活態度からくる罪悪感であり、偽我に真の我が隠されている状態なのです。

それでは、どうすればこの偽我をなくし、真の我である善我に戻れるだろうか。その答えは非常に簡単です。自分のなかの偽我を発見したなら、すぐさまそれを反省し、次の機会から、同じような心の状態や行動をなくすのです。つねに行爲において、反省し、改めること——それが天国の霊たちの持つ波動と合うことであり、魂が浄化されて、悪霊たちと縁を切る手段なのです。天からの守護を豊かに受け、善き願いは実現し、充実した日々が送れるようになるのです。

人の心と、神（自然）の心、天上界の心、これらが一つになって始めて、社会は健全な歩みを始め、ユートピア（理想郷）である神の国が、地上に築かれるのです。それが、地上の人たちすべてにとつて、住み易い世界であり、幸福であり、戦争への興味をなくし、繁栄をもたらす平和への、ただ一つの

近道であることはいうまでもないでしょう。

これは私個人の問題、ならびに私の家族、ならびに私の説く法を信じGLAを、世界を救う唯一の教えを広める団体として信奉し、懸命に働いている、私を慕う人びとに語らねばならないことです。

それには触れぬつもりでしたが、私の死後、間もなく、彼らの善良な意志と目的とに反し、正法を憎む悪霊たちの集団に巧妙につけ入れられ、一年近くを経ても未だにその悪夢から覚め切れず、非難と嘲笑の声の中を私の言葉を信じ、正法を説くつもりで悪霊たちの法を説き、その王国の建設に知らずに力を貸している私の哀れな家族と、それを助ける人びとのために私は心中深く痛み、どのような手段を講じても彼らの理性に訴え、悪霊を見抜く善の意識が目覚めるのを強く願っているのです。

私の悲しみがどのようなものであるか、天上界の憂いはどのようなものであるか、それは彼らが自分を取り戻したとき気づくであろうと待ち望んでいるのです。

それは、ひとえに彼らの過ちではなく、私が少数ながら、正法という、天上界より与えられた人と人

とを結び、世界を悪霊の跳梁より守る唯一の教えを広める必要性から、団体を作ったという点においてすでに誤りがあったということです。新興宗教と見做される恐れがありはしないかとの懸念からGLAの名も二、三度変えたのですが、内容はそうではなくとも、形態は宗教団体なのです。すからいたしかたがありません。宗教団体と銘を打たなくとも共通の考えを持ち、志を同じくする人びとが集まり、行動をもにするのは極く自然であり当たり前のことです。

ところが私の存命中に、年端もゆかぬ、人格もまだ磨かれていない私の娘に、ひたすらその霊能力の故をもって私自身が欺かれ、また人びとに天上界の意志とメッセージを伝えるべく私の娘に入ったミカエルを、その生まれ変わりであり過去世であると思ひ誤り、同時にミカエルを私の後継者と思ひ違えてしまった。そうしてそれを娘とGLAの人びとに信じ込ませてしまった私の三次元に縛られた肉の弱さと愚かしさを私自身が一番悔い、歎いているものであることを、私の娘と妻と私の為に働くGLAの人びと、ならびにその外部にあり私を信じる人びとに知って頂きたいと思うのです。

私の肉親である同じく霊能を持つ妹はそれを知っております。また、多くの一致せぬ、証明し得ぬ事がらがそれを指しているのです。

私を信じるがゆえに私の娘を哀れと思ひ、私の娘を信じ、誓いを立てたがゆえに地獄の果てまでもと

もに行こうと涙する迷いの道を歩む婦人がたもいることを知る時、娘に代って私がそのかたにお詫びをした気持ちです。

私はこのたび、霊の姿となって始めて全体を見渡し、何が世界を支配し、何が蝕まれゆくものであるかはっきり一望に見渡すことができたとき、その暗澹とした全容に愕然としたのです。

肉の身体にある時は、世界は平和で、人びとは善なる道を朝に夕に人生を希望とバイタリテイで彩りつつ生きていると安易に解していたのですが、そのような失望を味わうために、死の瞬間においても反省をなし、悔いなく与えられた使命をはたしたと信じつつこの世を離れ、結果としてそれが私の大いなる魂の修業の始まりになった、とは夢にも思わなかったのです。

それからの一年と二ヵ月は私の生まれ一度だに味あわなかった試練の連続でした。

このことの責任は一に私にあると、九次元に帰りながら天上界の人びとをさえ正視することができぬほど後悔の念に苛まれつつ、私の家族とG会を悪霊の支配から遠ざけようと心を砕いてきたのです。

天上界の人びとは終始私と私の家族とまた、私を慕う善良な人びとに同情的でした。最後までミカエルとガブリエルは彼らの善我を目覚めさせようと私の娘に入り、メッセージ、あるいは励ましを与え続けたのです。それは三月の半ば頃まででした。GLAでは悪霊がいたるところ自在に跳ね廻り、人から

人へとその意識を荒して行きました。

一方、サリエルとの合体である著者・千乃裕子さんはルシファーに襲われるところとなり、九次元のものが次々と協力してそれを撃退する間GLAの悪霊をミカエルと私が追い出し、帰っては、千乃さんを絶え間なく襲う数え切れぬルシファーの手下を払い、私がGLAに引き返すとミカエルとラファエルが千乃さんの身辺を守り、一ヵ月余のあいだ第一次の悪霊との戦いは続いたのです。

ついに四月十三日に千乃さんの説得によりルシファーは合体霊であるルシエルとともに天上に帰り、その事実をルリエルと合体した土田展子さん、および千乃裕子さんを通じて身辺の人びとに伝えられ、同時にブッタ様により村上有快師に伝えられました。

これで概ね私の苦慮となる原因は取り除かれ、事の解決も間近だと安心したのも束の間、一ヵ月も経つか経たぬ間に、天上界はふたたびルシファーよりもっと強大なサタンとの争いに巻き込まれたのです。

それはベール・エルデ星を逃れて来たサタンの夫婦でした。

生前の私はルシファー（四代目のサタン）とその前の三代目のサタンの姪であるアステリヤが主な警戒の対象でしたが、五月に千乃裕子さんを襲ったサタンは、その家族すべてと、七大天使の命をも消し

去らなければかりの強力なもので、戦いは三週間つづきました。

ただ二人のサタンの前に、天上界は私の後継者とその身辺を守る大天使たちを失うところだったのです。

それまでの経験から、戦いは大天使たちが常に勝ちとってきました。そう私たちも信じ、その時も彼らに任せていたのです。そうして、あまりに長く続くその死闘に私たちは始めてなみなみならぬ相手を迎えていることに気づいたのです。

彼らはペー・エルデ星ではその実力を隠していました。それは、この地球にルシファーという彼らの支配下にあるサタンが地獄を支配していたからなのです。

ルシファーが天上界に上げられてから後、彼らは悪霊の王国の巨大な城壁を敵に破壊され、主力に城に攻め入れられたとばかりに、必死の抵抗を試みました。

そうして、五月の三十一日午前十一時にこのサタンは二人ともどもエル・ランティ様に消滅され、ようやく天上界は強力な悪の執念を追い払うことができたのです。

私たちが後継者の命を死から救うために（一度は死なせたのですが直ぐに生き返らせ）千乃家の近くに居る間に、GLAは次いで死霊の住みかとなり私の娘と妻は前述のアステリヤとその仲間に交替に憑

依され、G会はますます歪められて行きました。

千乃家に平和が戻り、裕子さんがミカエルたちの助けを得て健康を徐々に回復しつつあったとき、私の娘を後継者だと信じ切ったGLA幹部は次々とアステリヤの手下に憑依され、愚弄され、私の娘の名を用いて悪霊の息吹きのかかった文を書き、月刊誌や本を出版していったのです。

天使たちが何度も彼らの憑依を取りましたが、アステリヤの催眠にすぐかかり、また、死霊や悪霊を呼び込んでしまいました。

しかし、この頃になってようやく目覚めた人びとがGLAを離れ、あるいは内部の人びとに呼びかけ、反省を促し、今、少しずつG会は理性を取り戻しつつあります。

八月まではM・Wと名付けられた私の娘を宣伝するグループが出来ていましたが、九月に入って内部の者の強い反対で、取り止めになり、一人ずつ幹部は闇の世界を嫌い、光りを意識し始めてきているのです。

中野裕道氏は私の強い要請でG会勧告の文を七月以来、外部で発表されています。それが闇に住むG会に射し込んだあかりの最初のものなのです。

今、私たち天上界の者はやっと愁眉を開き、私個人は出来得れば、私の娘が妻とともに家庭に戻り、

私が後継者としてGLAを守り正法を世界に広めよと言った言葉を忘れて、光とはどのようなものであるかと思い出し、その分に応じて家庭において正法を行う——すなわち、人格を磨くこと、学業に専念すること、を望んでいるのです。出来れば私の声を聞き、私と語り合い、すべてを理解して私の勧めに従って欲しいと思っています。

しかし、一つだけそれを可能ならしめないものが介在するかも知れません。それは娘の名誉心であり、虚栄心であり、若い者にありがちなファンを求めるスター意識なのです。もし、それが娘の心であり、母親の心にあるならば、私の心からなる呼びかけも家族には通じずGLAは解散しなければならぬでしょう。解散しなければ、永久に地獄霊、悪霊、死霊の棲家となり、たとえアステリヤ達を私たちが滅したとしても次々と愚行を重ね、正法でなく悪法を説き、妖気を人びとに伝える団体になるでしょう。

私が説き起こし呼び掛け、集まりきたったGLAに解散を命じ、外部の人達にGLAから離れるよう、決して近づかぬよう、呼びかけねばならぬとは、私は想像だにしませんでした。

「ミカエル」で天上界をさわがせた後、天上界の知らせがないままに、私個人の本能的な危機感から、私の魂が永遠に私の肉体を離れてしまった直後に、心に生じた不安と疑いを娘に入って語りました

が、原因は解りませんでした。

それは天上界の計画の一部であり、GLAが悪霊に対する罔りの団体として作り上げられ、真の能力のある者や、真の私の後を継ぐ者が現れた時にそれが明らかにされ、新しく充実された形として発展して行くであろうはずであったところが、私が娘をミカエルと同一の者であると思倣し、またそれ故に、後継者だと一人合点したために起こったGLAの歪みは途方もないのである天上界もそれを予想していなかったことに関連していたのです。

人間の予知能力、予見は不思議なものと言う外はありません。

天使ルリエルと合体して、ウリエルがパワーを分霊して生まれた土田展子さんが初めて千乃家で私の娘が現象をするテープを聞き、ミカエルの生まれ変わりである人だと話されたとき、すぐに脳裏に未だ会ったこともない娘とよく似た顔が浮かび、「違う、この人はミカエル様ではない」と強く否定する意識が働いたのです。それを千乃さんに九月に入ってはじめて話しました。

ルリエルも誰も展子さんに知らせませんでした。ルリエルの意識を展子さんは感じ取り、私は私でGLAに関して、合体していられたエル・ランティ様の憂慮を感じとったのでしよう。

私がこの章において、なによりも声を大にして言わねばならぬことは、G会はけっして悪霊に憑依さ

れるべき新興宗教でも宗教団体でもないということです。また、救世主を崇拜する他力信仰の集まりでもないのです。

もしGLAの人びとが私および私の娘をメシヤとして奉り上げてしまったのなら、私の説いたことは無意味になり、新興宗教と誹られても仕方のないことでしょう。

この点で納得されなかつたはもう一度、私の語りましたことを始めから読み直して頂きたいのです。GLAに関係せずその存在を知らぬ読者、また私の娘の名で出版されたこの本を読まれたかたも、この本をもう一度読み直して頂きたいのです。

大切なことは団体を作り、メシヤを信奉し、あるいは、教祖を奉り上げるのではなく、一人一人が何を目標に、どのような態度で人生を分かち合わねばならぬかを認識して頂きたい、ということなのです。この点を皆さんにけつして間違えて頂きたくないと望んでおります。

悪霊を友として生きることが非常にたやすく、『善我』の語る言葉に耳を傾けず、八正道に根ざした生活せず、現世の欲望と野心に身を委ねるならば、必ず悪霊はあなたがたを虜にし、その思うままにあなたがたを操縦するでしょう。知らずにあなたがたは闇に住み、光を避け、愚行を善行と信じて行かうになるでしょう。

善靈を友とすること、光を常に求め理性を働かせて、己れを善我の物差しで突きつめて計ること——これが救いに至る道なのです。

また、常に己れに対しても他人に対しても謙譲であること——けっして現世での地位や名誉や財産は、天上界での物差しには合わぬことを心に銘じて、人のために良かれと望み、生きることが大切なのです。魂の修業、己れを磨くとはこのことを指します。それが、どれだけ容易に自分の徳となり、属性となり得るかが悟りの段階に通じることであり、魂が浄化される度合いを示す指針となるのです。

そのためにも、この「天国の扉」という本は読者の皆さんの足元を照らす大きなあかりとなるでしょう。

## 第五章 天国——空高き善靈の住みか

### モーセの章

私は、およそ三、二〇〇年ほど前、六十数万の捕囚の民であったユダヤ民族を、エジプトより救い出し、四十年をかけてイスラエルに連れ帰り、その途上十戒を天より与えられ、律法として人びとに伝えました。現在では、十戒はほとんど通用せず、私の伝えたかった真意も、チリとホコリにまみれて、ほとんど知る人はいないでしょう。今ここで、十戒を引っ張り出してきても、意味がありませんので、とうよりは、イエス様も同じことをおっしゃっていられますので、私は天上界の構造について、説明しましょう。

天上界は、雲だけの所ではありません。段階に応じて風景が変わり、その美しさも変わります。

まず、一番下の幽界。第四次元で、地上一万メートルの所にあります。ここは天上界への入り口です。天上界の門のカギは、ペテロが持っています。この入り口（幽門と呼ばれます）の前で死んだ人びとは、自分の想念帯に記録された、その人の一生で思ったこと、為したこと、良いことも悪いこともすべて、守護霊、指導霊、および迎えに出た魂の親類たちの前で告白されます。大抵の人はここで嫌になり、一度は地上へ逃げ帰ろうと考えるようです。そして、幽界に入ると、修業をやり直す必要のある人は、段階を問わず、修業をし、大天使がたや菩薩界以上のかたがたのお話しを聞き、反省をして地上で為した過ちを正し、真の悟りを得て、それぞれの段階に戻ります。その後も、その場所で、また、魂を磨きその成長を図ります。

幽界の風景は殺伐としており、地上と同じような家々、店、ビルの廃墟、山、谷などがありますが、全体が灰色がかって、寒々としております。池があり、蓮の花も咲いており、修業をする人は一箇所に集まり、禅定をいたしますが、住んでいる人は俗世と同じ意識で、忙しく走り廻り、落ち着きもなく、地獄と意識がスレスレです。つまり、自分中心で、他人に迷惑はかけないが、他人のことはどうでもよ

い。損をすれば、執念深くそれにこだわります。意識は、霊になると九〇パーセント働くことができず、九〇パーセント用いられて、このような状態ですから、善我である部分は少ないのです。二〇パーセントほどの善に対する悟りしかありません。あとは、全部偽我なのです。それでも、地獄に居る人びとは、偽我九〇パーセントですから、少し悟ると幽界に上れるわけです。魚の腐った臭い、どぶの臭いなどがしています。四次元以高の世界は、人の意識が作る世界ですから、こうなるのです。天上界の幽界だけの人口で十億人、地上に人間として十五億人生まれています。世界の人口約四十億のうち、幽界出身が天上界と地上を合わせて二十五億ほどですから、いかに多いかお解りでしょう。そうして、肉体を持つと、大脳の意識の一〇パーセントしか用いせんから、一〇パーセントで善我と偽我を兼ね合わせ、犯罪を犯し易い人間になるのです。

その上は、五次元の霊界です。地上二万メートルの所にあり、幽界よりましですが眺めるほどの景色はありません。ここは地上で芸能人、水商売、新興宗教の生神様など、表面だけで人を惹きつけ、人格的には深みのない人、けれども、派手好きで、目立つことを好み、美しいもの、美しいものといって、手に触れて見ることでできるものを愛し、人びとから騒がれることが好きな人びとが来ます。それ

に相応しく、きれいで、派手な家、車、豪華な衣装、劇場、映画館などがあり、そこで出演して、お互いに観客になり合っています。善良な人びとが多いのも特徴です。天上界には五億人居り、約十二億人が地上に現在生まれています。幽界は地上でスターのファンであったような人、霊界にはスターが来るのです。

その上は、六次元の神界です。地上四万メートルの所にあります。神界はずば抜けて特定の才能を持った人たち、大芸術家、大科学者などや、他にも、武士として立派な働きをした人びとや騎士など、また、宗教家として立派であった人たち、イエス様の使徒たち、神道で名を知られている人びとや、ブツ様の十大弟子に学んだ弟子たちなどが来られる所です。静かな所で、なかなかきれいな自然の風景があり、山や川や花、丘や草原も見られます。研究所、スポーツ、剣道、フェンシング道場や画廊などがあります。そこで毎日、自分たちの才能を伸ばすために励んでいます。食事、住居や身なりには無関心です。この人たちの弱点は、才能があるので、その才能に溺れて、人格を磨くことをおろそかにする人もあります。八正道で説かれている教えを悟り切れない人も半数はいます。この次元の人たちのほとんどは、十一億五千万人が人間に生まれており、天上界には一億人しかいません。イエス様の弟子たち

(ユダは未だ無間地獄にいます)、ブッタ様の弟子たち、日本武尊ほか神道に関係のある人びとなど、現在、ほとんど人間に生まれています。昔の有名な人でも、ヒポクラテスやアリストテレスなどは天上界に残っております。

七次元が菩薩界です。地上六万メートルの所にあります。○○菩薩、○○観音たちが居る世界です。自分よりも他人を優先し、働きます。しかし、身を飾ることだけは、欲として持っています。ですから昔の絵巻物や仏像も、美しく着飾っているのは菩薩界の人びとです。この世界から、風景は非常に美しくなります。緑の芝生がゆるやかにスロープを描いている所や、花々が咲き乱れ、あちこちに虹の懸橋があり、人びとは笑い、微笑みあつて、散歩をしたり、休んだり、働いたりしています。集まって、如来界の人や大天使たちの説話を聴いたり、また用事で走り廻っていることもあります。世話好きの人たちです。ブドウ園、果樹園などもあり、ブドウ酒、紅茶など飲物もあります。ただし、伝説上のネクタール(神酒)が生命の水であるというのはあくまで伝説であり、神話なのです。永遠の生命、不滅の魂に關して、そういうものが残されたのでしょうか。ここは動物(犬、猫、小鳥、リス、鹿など、人に愛される動物たち)の楽園で、地上で哀れであったものも、皆、ここに上げられ、動物の守護天使に管理さ

れ、世話されています。猛獣や古代の大形の爬虫類などは幽界でも人びとは隔たった所に集められ、管理されています。天上界の人口は五万人で、地上には現在一億人ほど生まれております。

その上が八次元の如来界です。八万メートルと十万メートルに渡る領域があります。如来というのは、自他の区別がありません。個人個人は独立した魂ですが、自分のために働くということは、他人のために働く、他人のために働くということ、自分のためである——自他一如という意識をもっています。現世的な欲望は一つ持っておりません。如来像などでも質素な身なりをしていますね。そのかわり、三世（過去世、現世、来世）を見通す力もっています。人の心もあますところなく見抜くのです。釈迦如来といわれるブッタ様も、イエス様も、ここから出て、使命を果たされて帰られた時は、九次元に上がられました。神道の天照大神様は神界から出て、ここ如来界に上がられたのです。

この世界の風景は素晴らしいものです。小川が流れ、青く透き通る湖があり、その湖は、やすらぎの泉、と呼ばれています。白樺の林や、緑深き森、月桂樹、エニシダや、榎などが茂っているかと思えば、遙か彼方まで続き、四季の草花が咲き乱れている草原、蝶が飛び、小鳥のさえずり、木々は豊かに実や花をつけて、その光景はエルデンの園（エデンの園）の復元図のようです。しょうぶ、あやめ、蓮

の花なども咲き、人びとは、自然の美しさや動く雲を眺めながら、思索に耽ったり、禪定をしたりしています。他にスマレや百合の咲く谷もあり（ここは聖母マリヤ様が住んでいられます）、スズランが風に揺れている所もあります。可愛らしい花の精たちがたわむれているのを見るのは、心がなごみます。〇〇の精というような精たちも如来界にしかいません。人のために働く人たちの世界だから、そのように働くいろいろな精たちが居るのです。天上界の人口は一人人で、地上に一人人生まれています。

その上、太陽界は天使達から高次元の世界です。地上十万メートルから十三万メートルの間で、一万五千メートルぐらいつつ上下に分かれ、上はミカエル大天使長およびガブリエル、バヌエル、ラグエル、ラファエル、ウリエル、サリエルの六大大使たち、下はその下に働く天使たちがおります。天使は常に謙虚で、人前に出るといふことをしません。正法の助言者、助力者の立場を離れません。天使はすべてのことを知っており、そのうえでどのように清い姿なのです。天使になるには、如来界へ昇ったのち、諸天善神になる者もいれば、天使になる者もいるのです。以前は神界と菩薩界の間、すなわち、神界の上の段階から出ていましたが、如来界から出るといふことに定まりました。魂の修業をどの次元の者もさせられますが、天使の修業が一番厳しく、特に人間に生まれ変わった時は、九次元の光の大指導

靈よりも、蔽しい人生を送らねばならぬ者もいます。そのなかで悟りを得て、正法の助力者としての賢明な人格を持ち、陰の力になるのです。美しい姿だからとあこがれるかたたちは、この天使たちのなすべき務めや修業を知れば、安易に天使になりたいとは思われまいでしょう。翼は、天使が悪靈たちと戦う主要な戦闘力なので、必要であり、通信、伝達のためにもあるのです。この世界は雲以外何もありません。天使は休むということを知らないからです。

現在、天上来と地上界の両方で活躍している天使たちは、大天使長他五大大使およびその下の天使たちが百五十四名おり、人間として生まれているのが、サリエル大天使と、ウリエルに分靈された天使ルリエルと九十一名の普通の天使たちです。イギリス、フランス、イタリア、スイスに各二名、アメリカに三名の他は、一大天使とともに全部日本に生まれています。イエス様の十二使徒、ブッタ様の十、大弟子、他多くの弟子たち、ブッタ様の分身なども日本に生まれています。その他、多く上段階のかたが日本に生まれています。

六十三名の天使の、天上来での働く場所は、大天使の下に二十人で、如来界との連絡を司り、如来界と菩薩界の間に三十人、菩薩界と神界との間に五人、神界と靈界との間に五人、靈界と幽界の間に三人と、天使ルシエルといわれる、以前にルシファーと呼ばれるサタンとの合体靈になってしまった者が、

元の天使の位置に戻り、働いております。合体した時はサタンでなく、人間として生まれたルシファーは古代ギリシヤにおいて、三千五百年前に悪霊のため地獄に落ちたものです。サリエル大天使と合体して生まれた著者を何度も襲いましたが、その人によって自己の罪の反省を促され、慈悲と愛の心を説かれ、改心してルシエルとともに一九七七年四月十三日に、三千五百年ぶりに天上界に帰りました。ルシエルがミカエル大天使長の愛弟子であった者ですから、ミカエルを始め、天上界は心から喜び、歓迎の宴を催しました。日本にある地獄も、人間の合体霊のサリエルとルリエルの協力で、高橋信次様（エル・ランティ様の本体）が天上界に、一九七六年六月二十五日に帰られて後、そこに執着していた霊たち、および他国の地獄霊も合わせて、十億ほど上げられ、無間地獄、天狗界を除いては、空になってしまいました。三月から五月末までのことです。そしてルシエルが、その地獄霊たちの指導と監督にあたっているのです。今では、天上界すべての者がルシエルを信頼しております。立派な天使の務めを果したのです（後記参照）。

諸天善神は、世界中で十名ほどで、天使たちも助力する 때가 あります。その役目は、常に地獄霊、浮遊霊、地縛霊、死者の霊を天上界に上げる仕事をしたり、地獄へ降りて、説教をしたり、地上に生まれている光の天使たち（如来界、菩薩界より生まれた人たち）の保護を も し ます。その下に助力者として

働く翼を持った靈（天使ではない）十万人と、動物靈（悪靈としてではなく、善靈であるキツネ、ヘビとネコが少し）が二十万匹います。この助力者は高い段階から生まれ、地上で罪を犯し、帰って来た時、償いのためと修業のために志願するのです。諸天善神は一定の期間働くと、六大天使の下の天使たちになります。

天使の次元の上が太陽界に含まれる九次元と、宇宙界で地上十三万メートル以上、宇宙へ無限に広がります。今、私が述べている天上界は、地球上にある太陽系靈団と呼ばれる靈団で、宇宙界はその最上の界にあたります。大宇宙、大自然を神とする神の世界です。その神の心に一番近いかた、その神を仲介する光の化身といわれる強力な力を持つかた——エル・ランティ様がここにおられます。ヤールウェ、あるいはエホバとして三次元の世界に知られております。人間としては、古代ギリシヤに、アポロの父ゼウス（本体）、今世紀、日本に高橋信次（本体）として生まれられました。このかたの場合は合体されても、信次様を援けられて、天上と地上の両方を統治されました。しかし、天上界の守りが弱まるのを避けて天使の多くは今生は人間に生まれませんでした。今はサリエルやルリエルと合体した人達を守るため、サリエルの所にミカエルや他の五大天使たちが結集し、日夜警戒しております。

九次元の者が生まれる時は、大天使たちは人間にはできるだけ生まれず、三次元、四次元の両方において、守りと戦いに備えるのです。今、ここには、高橋信次様、ブッタ様、イエス様、私モーセがおります。

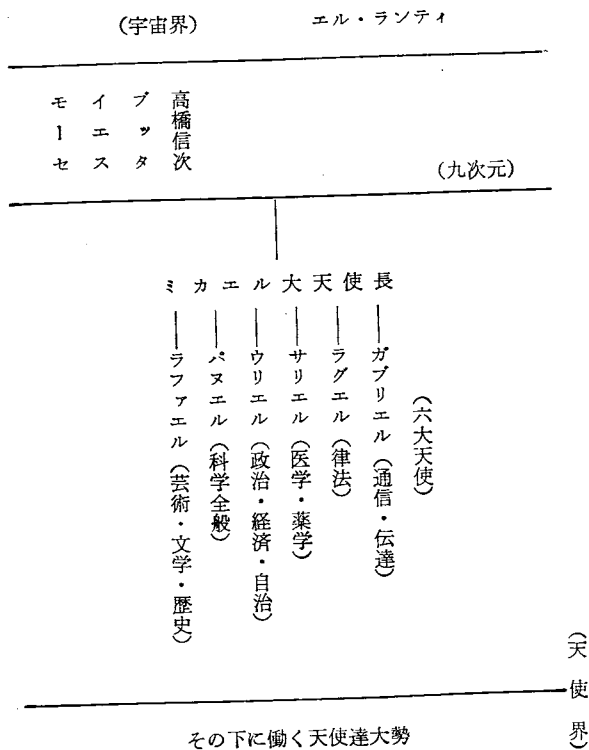
これで、私の天上界の紹介を終わります。

天上界および地獄（図解Ⅰ）

宇宙意識100%	宇宙界			
	太陽界	9次元 天使界	慈悲と愛 のかたま り	*すべてが自分で ある。(宇宙即我) 宇宙と自分とは同 じである。
	如来界	8次元	自分と他 人の区別 がない	*すべてを見通し ている。 自他一如。
	菩薩界 <small>動物が保 護されて いる</small>	7次元	自分より も他を優 先する	*自他の区別があ り、身を飾る欲が ある。
	神界	6次元	大分欲が 薄れてい る	*医者、宗教関係 者、大学者、大芸 術家の世界。
	霊界	5次元	幽界より まし	*芸能人のような 人。(スターなど) 水商売、教祖。
地上	幽界	4次元	損をする といつま でもこだ わる	*俗世と同じよう な世界。見栄が強 い、執着も強い。 スターのファン。
	<p>阿修羅界（争い、喧嘩、口論好き、怒りを押えられぬ人など）</p> <p>畜生道（動物殺し、殺人や、道徳、法に反した残酷なことを行う人）</p> <p>餓鬼界（欲望の権化のような人〔*足ることを知らない人〕）</p>			
地獄界	<p>火焔地獄（哀れみをしらぬ、冷酷、非情な人）</p> <p>血の池地獄（性に興味を持ち過ぎ、動物的に生きる人）など、あと2種類程あります。地獄のことは詳しく書かないほうが良いのです。醜く、汚れた恐ろしい世界ですから。</p>			
	天狗界（うぬぼれて独善的、自己を最高の者と見做す人）			
	無間地獄（多くの人を殺し、人の恨みがいつまでも離れない人）			

注 地獄界はどこでも同じようなものですが、上図は日本のものだけです。

### 太陽界の構図（図解Ⅱ）



## 後記

エル・ランティ様御自身と、高橋信次様の魂が天上界では別であるように、ルシファーは、人間―サタン―天上界に戻った霊、ルシエルは大天使の霊、と別々です。合体したり離れたりだけでなく、悪霊のみとされていた変幻自在の能力も、善霊には、それを上回る能力が与えられています。

モ―セ

なおG・L・Aでは、強力なサタンが今も活躍しているかのごとく、サタンに関する新しい書を出版するようですが、信次先生のお嬢さま周辺に憑依し跳梁するアステリヤの仲間、部下を除いては、ルシファーは天上界に上がり、ペー・エルデの恐ろしいサタン夫婦は完全に滅されましたので、死霊、地縛霊のほかは警戒すべき対象は無いということ、天上界のかたがたは皆さんに知って頂きたい、あらゆる手を尽くしてそのような霊からの悪の波動を防ぎ皆さんを守ろうとしていること、そのためにもこの書は出版されなければならないことをお伝えしたい、とおっしゃっています。

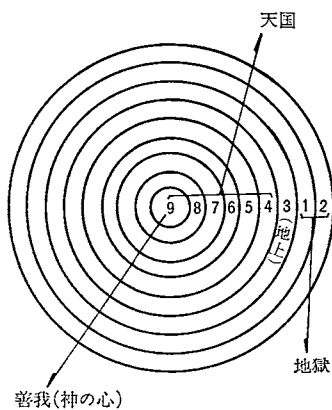
―著者

## 第六章 正法——補足および用語解説

ここまで読んでこられたかたは、正法について、大体お解りになったと思います。この章では、正法の用語で、解説されていなくて解らないもの、および正法について説明不足の点をつけ加えていきたいと思います。

まず「正法」とは、言葉の解釈をいたしますと、「正しい法」、「正しい律法」であるという意味であり、この律法は道徳的なものをも含めて、自然界の法則を指します。自然界の法則、すなわち真理なのです。そして、正法においては、宇宙・自然が、人類にとっては恵みの源となり、範となすべきもの、すなわち「神」と見做すべきものですから、「自然の真理」↓「神の真理」、すなわち神理であると、高橋信次氏は説かれたのです。

次に、いままでの章で表われた「天の波動に合う」ということについて説明しますと、ミカエル大天使長が、「各人の心は九層に分かれています」と述べられています。左図が皆さまの心、すなわち意識の分解図だと考えて下さい。一次元から九次元まで、地獄から天国(天上界)までの構造と同じなのです。



第四章「高橋信次の章」参照

“神が作り給うた”のではなく、人間が天上界も地獄も作ったのですから、個人の意識が、天国も地獄も自在に作ることができるとを理解して頂きたいのです。ここに想念のエネルギーについて考えて頂きたいと思います。運動をする時や、食事をする時や、話をする時はいうに及ばず、いろいろな生物として、生きていく上に必要なエネルギーが消費されますが、そのように目に見える動作はもちろん、表面には表われない動作、体内の諸器官、諸組織の種々の作用にも、エネルギーが消費されるのです。同

じように、人が「何かを思う」、「何かを願う」、「何かを意識する」ときも、そこには必ず、必要なだけのエネルギーが消費されるのです。

消費されるということは、それだけのエネルギーが体内より消失あるいは体外に放射されることになります。そして言葉は音声という音波により伝達され、意識や想念や祈りは念波という意識のエネルギーとして伝達されます。視線というのも人体から出すエネルギーの一つで、その向けられた方向に居る人が身体でその視線を感じます。

これらの人体から放出されるエネルギーは、すべて一定の速度を持ち、そのエネルギーの種類、大きさ、強さによって速度が変わります。とくに念波は平均して毎秒約五十キロメートル位の速度ですが、放出されても消滅するというのではなく、如何に遠くでも必ずそこに到達します。

「一念三千」（一念は三千世界に達する——如何に遠くでも達する）という言葉に、如何に真理が含まれているかお解りでしょう。そして、この想念から出た波動が、心が中道において調和されるに従って、波動が細かくなり（振動数が多くなり）波長が短くなります。超音波と同じようなものです。デリケートな波動になるわけです。これを「天の波動」と言います。

それに反し、心が中道を外れ、不調和なものになりますと、想念の波動は荒くなり（振動数が少なく

なり) 波長が長くなります。これが、サタンの波動”であり、地獄の波動”なのです。九層に分かれている心は、中心に近づくにつれ、波動が細くなるのです。そして、天上界の同じ次元と、同じ波動ですから、直ぐ通じ合うのです。三次元から以下は、波動が荒くなり、地獄の次元の同じ波動のところへ、通じ合うのです。これは通信機と同じ原理だと思われれば、解り易いでしょう。

また、天上界からくる太陽エネルギー(光りを含む)も、天上界と波動を同じくする人のほうが、良く吸収することも、これではっきりすると思います。言葉を換えれば、善なる心から出る念の波動が天上界の善霊の波動と合い、意識が一つになるのです。悪、すなわち善でない心の波動は地獄の波動と合い、地獄の意識になるのです。ついでに、善我、偽我、真我の説明をしますと、善我は、善なる心をもった神と等しい自分で、偽我は、それに反するもの、持って生まれた善性をおおい隠した偽りの自分、真我は、真の自分を意味します。どちらの自分がどちらを向いているか、判断なさって下さい。

つぎに、魂の実態について説明しますと、動物および人間の魂は何処にあるのか、生命とは魂とどんな関わりがあるのかについては、長い間、科学の種々の分野で問題になり、討議の対象になってきました。しかし、ペー・エルデ星では既に解決されていることで、比較的簡単な仕組みなのです。肉体と幽体(靈魂)の構造、分離の状態などから判断すると、しゃべる植物とされているサボテンや、数種の高

等植物を除くものでは、今のところ、魂に当たるようなものはいませんが（第一章 著者の霊体験、第五章 天国―空高き善霊の住みか―で出てくる楽器の精や、種々の植物、花々、また○の精と書いてあるのは、すべて人間の霊が環境が不自然でないようにと、作ったものなのです）、動物、人間などでは、大脳、脊髓を含む身体内の全神経系の刺激反応およびその統合の働き、および全細胞組織内の生活反応（生命維持の働き）など、その生命体としての独自の働きによって習慣づけられ、教育された結果、条件反射に似た慣性の法則に従い、属性を持つ有機物プラス宇宙エネルギー（人体に含まれる素粒子）を魂と呼ぶのです。

わかりやすく言えば、魂という特別な何か、Aさんという人間が生まれる前から別に取ってあるわけではなく、Aさんが生まれた時に肉体に附随する、その肉体内に含まれるありとあらゆる有機物に、細胞組織内に含まれるAさんのものである宇宙エネルギーの中の電子、陽子、中性子、並びに（光子）、を魂の構成要素と見做してよいわけです。それがAさんの死後、身体を離れて一つの気体の塊（火の玉↓靈魂）となつて、永遠に肉体とは違った形となつて存在するのです。これらの有機物プラス宇宙エネルギーはAさんのものとして存在し、決して他のものとかの拍子に一緒になつてしまつたり、バラバラに形が無くなつてしまつたりはしません。本人がそう望むとか、高次元の霊により消滅させられる以

外はですが。

もちろん、次の想念帯の項で説明し直しますが、生まれる時に他の善霊と合体し（身体内にスッポリ入ってしまう）、意識を通じて、同じく天上界からAさんのために降りて来て付き添ってくれる守護霊、指導霊（これは外部から）とともに、三つの善霊に導かれます。そして、死後それらの霊と別かれ、Aさんだけの魂が残るのです。これは先ず人類が発祥し、そして魂ができて、その霊魂が永遠に存在するという自然発生的な理論に即したもので、進化論あるいは、物質不滅の法則」という科学の理論にならぬものなのです。魂が最初からあるのならば、その魂は何処から来たか、いろいろな属性、個性がなぜ霊魂に附随するのか——とまた、未解決の神秘的謎が残されてしまうのです。科学とは神秘の解明であって、新たな謎を作るものではないことは、改めて申すまでもありません。

そして、元素およびその化合物によって構成される魂であるがゆえに、Aさんの記憶は何億年、恐らく永遠に、保持することができ、このように魂は、不思議といえれば不思議でもある、一つのガス体（有機体）ともいえる、永遠不滅のものなのです。

そして、魂とは別であるように述べられている想念帯とは、魂の一部を指すものですが、それは大脳の前頭葉、側頭葉（記憶を司どる）、脳髄、脳幹にある細胞内の有機物プラス前述の宇宙エネルギーの

部分を指します。これには大脳の機能、属性のすべてが含まれ、感情、本能、知性、理性、眼、耳、鼻、舌、身、意、と名付けられる、仏教用語で五官六根を表わすもの（後の項で説明）に脳髓が付け加えられた形で信次先生が図解していられます。すなわち、主に大脳の部分にあたると思えば間違いはないわけです。幽体離脱の際には（高橋信次の章で説明）、これの一部が離脱し、残りの部分が身体を守って生命維持に役立っているのです。

“誰々の本体（分身）として生まれる”という場合、本人の魂、想念帯に加えて、その人間を天界界に向けて誤りなく導くため、天界から善霊が降りて来ます。そして、それが本人の中にスッポリ入るのです。つまり、二つの魂が合体するわけです（この合体霊は幽体離脱の時、普通は合体したままで、合体した人の身体とともに守ります）。そして、天界の霊の名前を用いて、“誰々の本体（分身）”となるわけです。ですから、“山中さんの過去世”というものは正しい言葉ではなくて、“山中さんと合体している善霊の過去世”というべきなのです。山中さんが、昔から続く永遠の生命を持っているわけではなく、これから手に入れる永遠に転生輪廻をくり返す不滅の魂を、今、現在の人生を通して、形作っているわけなのです。過去ではなく、未来が待っているのです。

ですから、皆さんは、自然との調和、人との調和への責任と義務ばかりでなく、自分に対する大きな

責任と義務があるのです。自分の生命を大切にします。大きな意義が、ここに存在するのです。未来において、一個の人間として、どの位の長い間、いろいろな使命を与えられ、また、果たして行かねばならないか、自分が、天上界からの三人の善霊（守護霊、指導霊）に守られ、支えられ、導かれて一生を終え、天上界に上がることが出来たなら、次の世で誰かの魂と合体し、その赤子のように（赤ん坊の時に入るのですが）何も知らぬ魂に、生きるべき道を手を取ってリードし、意識を通じて自分の智恵と知識を与え、ともに喜び、ともに泣き、ともに苦しみ合って行かねばならぬ義務を、感じるようになるでしょう。今のルシファールのルシエルに対する気持ちですが、この通りなのです。

守護霊も、同じような役目をし、特に、外側からの天災、人災から守り、日常生活のこまかい指示を与え、徳に關しては、善導し、その人間が、悪の方へ向いた時に戒める権限を与えられています。指導霊は、学問、職業に關して、指示を守護霊に与えます。そして場合に應じて、守護・指導霊は、いろいろ変わります。その人間が、善我を無視し、悪の道を通るとき、まず守護・指導霊との絆が断たれ、悪霊に入られる時は、身体の中の善霊の魂は分かれて出ます。

“憑依”とは、悪霊が取りつくことですが、悪霊は悪霊で責任があるのです。自分が苦しくて助かりたいと思っても、また、恨みを持って、地獄に引きずり込んでやろうと思っても、一人の人間を地獄に

連れて行くたびに、その靈の罪は増すのです。償いの期間が増え、救いようのない悪靈は消滅され、靈としても存在できなくなります。人間が人間を悪の道に誘っても、三次元の世界とは違って、誘った人間の魂も、その罪を死後に償わなければならず、誘われたひととも、誘った人間の罪を重くしないため、誘惑に陥らず、また、反対に救う義務さえあるのです。靈の世界は、肉体を持つ世界と違って、ごまかしが利かず、逃げ隠れできない世界なのです。

地獄靈は、地獄を作っている靈、地縛靈は、死後に執着を持っている場所から離れられない靈です。動物靈は、動物的な欲望に人生の大半を過ごして、地獄へ落ちた人の靈ならびに動物の靈（善靈も悪靈もいます）で、動物の善靈は、諸天善神の下で働くものと、天国に保護されているもの、悪靈は非常に数少なく、人間にひどい目に会って、地獄に落ちざるを得なかったものです。浮遊靈は、地上をふらふらとさ迷う靈です。悪靈にも能力別で階級が四つ位に分かれています。自殺者はそのいずれにも属せず、別なのです。

正法では、その人間の人生のすべての出来ごと、経験、行いは、想念帯に記録されると言いますが、美しい心であれば、想念帯は白く、金色の文字が浮き上がり、汚い心であれば、雲と同じく汚れ、黒い字が浮き上がります。しかし、誤った考え方や、行いを反省し、二度と行わないように日々、注意をす

ると、それは金色に変わります。

地獄から天上界への種々の段階に分けて、上の段階に上がるには、修業年数が違います。修業とは、悟った後でも、何回か生まれ変わりを、使命を果たさなければいけないということで、左表のとおりですが、それから見て、お解りのとおり、霊界から上へは、なかなか上がれず、あまりメンバーが変わりません。普通は意識の通じる所へ死後帰りますが、悟りにより上段階に行くものもあり、下の段階に落ちる人は、多くあります。しかしこれからは、働きが採点に加えられ、変動が多くなると伺いました。

### 修業年数

地獄↓幽界	自分が間違っていたと悟れば、直ぐ行ける。
幽界↓霊界	百年ぐらい
霊界↓神界	三億五千年ぐらい
神界↓菩薩界	二億年ぐらい
菩薩界↓如来界	一億年ぐらい
如来界↓太陽界	定まった人しか行けない(天使になるか、諸天善神になるかは、志願選択)

制)。

本体、分身の別について、書き落としましたが、本体とは、ラファエル大天使の魂が入って、シェイクスピヤが誕生したとしますと、シェイクスピヤを「ラファエル大天使の本体」と申します。そして、シェイクスピヤは、死後、魂が独立して、ラファエル様の分身第一号となるわけです。そして、シェイクスピヤが、次に合体した人間のことを「ラファエル様の分身」というわけです。その人間が死ぬと、ラファエル様の分身第二号になるわけです。これが、本体と分身が魂の兄弟と呼ばれるゆえんなのです。分霊という語もあります。これは単に、自分の力を分け与えるという意味です。普通、本体は五回生まれ変わり、分身は七回生まれ変わることができません。これを転生輪廻と言います（普通の人は死後百年から二百年に一回生まれ変わります）。

また、同じ合体についても、ブッタ様、イエス様、モーセ様などは、ペー・エルデ星に生まれられた立派なかたの魂が合体されたのですが、このかたがたのほうが偉大な悟りを得られたので九次元に上られたのです。エル・ランティ様の場合は、モーセ様が書かれたように、しばしば天上界の守りのため信次先生を抜け出されましたが、これは太陽界だけ可能なことです。お嬢さまは卑弥呼が本体で常時入っ

ていたわけです。そして、たいへん残念なことには、卑弥呼は天使とはなんの関わりもなく、かつミカエル大天使長の生まれ変わりでもないのです。信次先生が亡くなられて半年後に、ミカエル様に助力を受けて地獄に関する書を出された後GLAが悪霊の侵入を受け今日にいたるまでGLAという大きな船が針路を元に戻せなくなったのです。実際に、天使の生まれ変わりならば、ご本人がその誤りに気づかれただでしょう。信次先生が身体を酷使され、生命も長くない時に、天上界もミカエル様も、残酷な訂正はできなかったのです。

その次に、光の使者、パワートロン、阿羅漢、菩薩について説明いたします。光の使者とは、光の大指導霊と呼ばれる九次元以上の霊を含む、その他のすべての天上界（天国）からの使いのことです。

ただしエル・ランティ様は、光の化身とも呼ばれます。パワートロンは、古代の人すべてにあったもので、額の中央にあり、そこから光がでます。阿羅漢は、神の教えを聞き、心が清められ（心の浄化）、悟りを開くと（どう生きて行けばよいか、理解すること）オーラの色が美しくなり、量が増します。第一段階の悟りで、これを、アラハンの境地に達した」と言います。菩薩は、読まれるとおりの菩薩のことで、キリスト教的には光の天使のことですが、第二段階の悟りです。天上界の菩薩と同じ心境になります（モーセの章の後の図解一に書いてあります）。どちらも古代インド語です。

つぎに、諸天善神ですが、不動明王、摩利支天、稱荷大明神、大黒天、八大竜王、毘沙門天などがあ  
ります。善神と呼ばれ、菩薩、如来をも救える能力が与えられています。

バラモン階級は、バラモン教というお釈迦様の時代の一大既成宗団であり、社会の上層階級を占めて  
いました。ヴェーダ、ウパニシヤードを聖典とする宗教で、この聖典は仏教と同じように、一人の聖者  
の説法をもとにして書き遺されました。その聖者は、今から約四千二百年ほど前、現在のエジプトの地  
において、クレオ・パローター（ブッタ様の魂の兄弟たる人）という救世主の説法が、インドに伝えら  
れたものです。当時のバラモン教は、人間の心、大自然の法を説いたものですが、歴史を重ねるに従っ  
て形骸化され、知と意に変わり、哲学化されました。

中道、解脱（げだつ）について説明しますと、中道とは、ブッタの教えのなかにあり、中庸のこと  
で、出家した者は、二つの極端（愛欲に溺れること、苦行で自分を苦しめること）に近づいてはならな  
い。「如来はこの二つの極端を捨てて、真中の道を悟った」といわれています。解脱とは、苦の原因を  
明らかに認識しそれを滅ぼす智慧を得ること、これを悟りと言い、この智慧によって、欲望に基づく苦  
の束縛を脱する意味——。最高の悟りを得ると、過去・現在・未来の因縁因果が解り、大宇宙の仕組み  
が、手にとるように明らかになってくるのです。

最後に五戒について説明いたしましたしょう。これもブツタ様の教えの一つなのですが、出家した者の戒めとして、

不適當な時間（午後）食事をしない。

踊り、歌、楽器の演奏、見世物の見物をしない。

華鬘（けまん）（身体の裝飾に用いる花輪）、香料、化粧品、裝飾品を用いない。

大きくて高い寝台の上に寝ない。

貨幣または代用品として金銀を受けとらない。正式な僧は、男は約二五〇戒、女は三四八戒を守る。

ということですが。

異言——靈が入ると、本人が知らぬうちに、習わぬ異国の言葉を、古代語でもなんでも喋らされてしまうこと。習わぬ動作や踊りなども、意識に強く働きかけられて、まるで熟知しているものの如くに行なわれる。

五蘊（ごうん）——一般には、人間が存在する五つの領域。色（物質的要素）・受（印象作用）・想

(表象作用)・行(意志作用)・識(悟性作用)。実体的自我という主体はこれらの領域にも認められない、とされている。

ジャイナ教(ジナ教)——釈迦より少し前に、仏教と同様に非正統バラモンから発生した。ジャイナ(勝者)(最高の悟りの完成者)と呼ばれるマハービーラによって唱えられた新宗教。カースト制度(四姓制度)を批判、虫に至るまで、いかなる殺生も禁じた不殺主義を唱えた。「真のバラモンは生まれによってではなく徳行による。怒りと無知を捨てた人、害なわることがあっても他を害なわない人、情熱をすべて制御した人を、われはバラモンと呼ぶ」(ダルマ・ウヤーダ)

カースト制度——主に、バラモン階級(僧侶)、クシャトリア階級(王侯士族)、ヴァイシャ階級(庶民：農工商)、シュードラ(奴隸)の四つに分かれ、それぞれ固有の風俗習慣、生活様式、生活態度などをもち、異なる身分との接触や交渉(とくに結婚)を嚴重に制限する。封鎖的な古代階級制度のこと。

肉体行——五官六根、肉体煩惱を心から振り切るために肉体を荒行で痛めつけて、悟りを得ようとする修業。

彼岸——悟りの境涯をいう。最終の彼岸は釈迦が到達した宇宙即我である。

五官六根——眼、耳、鼻、舌、身を五官という。これに意を加えると六根になる。六根とは諸悪の根

源である。五官を通して、自分の心がふりまわされ、人間としての道を外して行くために、世の混乱が続いている。六根にふり廻されると、人間としての自分を失ってゆく。

肉体煩惱——煩惱とは迷いをいう。肉体煩惱とは肉体にまつわるさまざまな迷いであって、地位、名誉、金、その他もろもろの執着からくる、肉体を主体とした、ものの考え方をいう。

パニャーパラミター——古代インド語で、パニャーは智慧、心の中から湧き出してくる仏智ともいえ、パラミタとは彼岸に至るという意味である。彼岸は智慧が充満した安らぎの世界。般若波羅蜜多はすなわち、内在された智慧に到達すること、この智慧を思い出して生活したなら、生命の永遠を悟ることができ。しかし、この境地になるためには、正道を生活の中でしっかり行わない限り不可能といえるようです。

梵唄（ぼんばい）——梵語（サンスクリット）。神々の讃歌、式典の前などに唄う。長く引つ張る音声により、人びとの波動を調整する目的を持つのが特徴。

大乘仏教——アショカ王（西暦前二六八―二三二年）の死後に新しい仏教の展開をもとめて、在家の人びとの間から興った仏教。大乘仏教は広く大衆に呼びかけ、一切の衆生の救済を重んじ、慈悲の「利他行」を実践することを理想とした。般若経、法華経、華嚴経、浄土経、維摩経、真言密教の陀羅尼を

含む、大乘仏教經典がつくられた。中央アジア、中国（朝鮮を経て五三八年、または五五二年に伝わると）、日本、チベット、蒙古などに伝播する。

小乗仏教——小乗とは小さな乗りもので、すぐれた少数のものだけを乗せ救うことを意味する。自身一の悟りや救済を願って、一般の世人の救済にあたらうとしないところに大乘仏教との大きな違いが見られる。他人への奉仕（慈悲）よりも自己の完全（解脱）を図る。アシヨカ王の死後、細かな戒律を守ろうとする保守系分子に対して、新しい革新的な気運が興り、それが大衆部となった。保守系分子を上座部と呼ぶ。その後、教団の中が分裂して二十ほどの部派に分かれた。これらを総称して部派仏教と呼ぶが、これを大乘仏教が眩（けな）して小乗仏教と呼んだ。セイロン、ビルマ、タイ、カンボジア方面に伝播。

サニワ（審神者）——靈の専門家。降靈した靈を審査する人。

瑜伽行——仏教の僧侶が行う精神統一の行。一種の禪定。

何よりも正法で大切なことは、心を丸く大きく保つことなのです。何か失敗したり、うまく行かないことで悩んだり、人生には必ず心の悩みがつきまといまいます。しかし、それでしぼんではいけません。ゴ

ム風船のようにフワフワと弾力を持って自分の心の中にいこいの場を作って、生きて行かなければならぬのです。それが処世術でもあり、善なる心の外見だと考えて下さればよいのです。

なお、これらの用語の解説において、高橋信次先生の説かれたものと、少し異なる点は、すべて信次先生の御指導に従いました。この章の後に本体、分身の生まれ変わられた人物の表が載せてあります。転生輪廻の参考にして頂ければと思います。

— 著 者 —

名	本 体	分 身
エル・ランティ	ゼウス、高橋信次	パツハ、ベートーベン、空海
イエス・キリスト	クラリオ、アモン、アガシャ、アブラハム、パスカル	アンドレ・ジイド
ブツタ	クレオパローター、天台智顛、不空三蔵、最澄、カント、空華道人	桂小五郎

ラファエル大天使	ウリエル大天使	サリエル大天使	ラダエル大天使	バヌエル大天使	ガブリエル大天使	ミカエル大天使長	モーセ
カーリダーサ、イソップ、レオナルド・ダ・ビンチ、シエークスビヤ、ワーズワース	アレス、素戔嗚尊、リンカーン、洪秀全、孫文	アルテミス、天照大神、マリイ・キユリー、ヤシヨダラ姫、シュバイツァー	ヘルメス、ソクラテス、聖徳太子、デカルト	プラトン、ニュートン、リンネ、メンデル	ダンテ、キルケゴール	アポロ、アレクサンダー大王、聖観世音菩薩、マーチンルッター、アインシュタイン モーツアルト	ポセイドン、フロイト
源頼朝、豊臣秀吉、ダンカン、グリム(兄)、ドストエフスキ、夏目漱石、森鷗外、ゲーテ	シャリー・プトラー、源義経、明智光秀、土方歳三、フランクリン、ルーズベルト、ケネディ	モンガラナー、ピリポ(イエスキリストの十二使徒)、ジャンヌ・ダルク、パスツール	ロベスピエール	メンデレエフ、ボイル、シャルル、アボガドロ	シューベルト、バイロン、ショーペンハウエル	七賢人ターレス、ミケランジェロ、ダーウイン、織田信長、一休、如意輪観音	

名	本 体	分 身
ダニエル	旧約聖書のダニエル、内村鑑三	
カルエル	ニーチェ	
パルエル	クリシツボス	
アルエル	ボルテール	沖田総司
ルシエル	ルシファア	
セリエル	ナイチンゲール	
メイエル	聖マルグリット	アンナ・パブロワ
ルリエル	紫式部、コロ	
リリエル	清少納言	
サイエル	聖カトリーヌ	ニカノル
マリエル	フアラデー	

不動明王	カニシカ王	
毘沙門天	王陽明	
稲荷大明神	老子	
八大龍王	莊子	
摩利支天	司馬遷	
大黒天	二宮尊徳	

注 本体は、本体が合体したという意味で、分身は分身（第六章・正法―補足および用語解説参照）が合体した人です。分身で芳しからぬ史上の人物がありますが、本体が合体したのではないので、力が弱く、破壊の時代と呼びます。現在人間として生まれていられるかたは、G会などの合体霊の混乱から、差支えが生じますので、表に載せておりません。誰が合体しようと、正しい正法を説き、行なって頂ければ良いのですから。破壊の時代にならぬよう、注意して頂ければ良いのです。

## 読者の皆様へお断りとお詫び

千 乃 裕 子

今般昭和五十六年一月一日以降を以て、本書第七章裕田光穂の「盲信の域を脱しよう」は全文削除されました。

実は同年一月二十一日付内容証明により、裕田氏、本名中野裕道氏から、夢にも私の知る所ではありませんでしたが、五十三年すなわち本書初版発行の翌年に既にGLAとの話し合いの結果、相互に事を構えないとの合意に達し、協定を結んでいるから、本書に同氏の文を掲載するのは不都合であると、遅まきながら申し越され、私及び出版社も同意致す旨同じく内容証明を發行致しました。

私としましては、同文掲載の際の裕田氏との合議において双方に納得しておりましたこと、すなわちGLAの混乱、現天上界の証明及び私の受けております天の御加護及び御指導が真実のものであることが証言されるものであれば、別に同氏の文でなくてはならないという事は決してありません。誰でも構いませんので、私に寄せられたものでも百人は居られるでしょうか。その中から選び、又、第四卷「天の奇蹟」掲載分と重複しないものを、急拠代りに掲載させて頂きました。お断り少々お詫び申し上げます。

昭和五十六年一月三十一日

使は「み前の使」(angel of the presence) (イザ 63:9) または「天使のかしら」(archangel) (Iテサ 4:16, ユダ 9 節) と言われ、外典のエノク書には七人の大天使として (黙示 8:2 参照), ウリエル(パヌエル), ラファエル, ラグ エル, ミカエル, サリエル, ガブリエルの名が列挙されている (Iエノ 20:7)。この中のミカエルとガブリエルの名は旧新約共に出ています。なお民族にも個人にも「守護 新聖書大辞典 967 項「てんし」の欄のコピー

## 第七章 天を語る人々

### 第一節 歴史に顕われる七大天使

西澤徹彦

#### 正法の集いに於いて

私達の真の福音を伝える正法流布については、「天国シリーズ」『慈悲と愛』誌の刊行「正法の集い」の三本を支柱に行うものであると天上界より指示を受けて以来、各地に「正法の集い」が増えつつありますが、私達のこの集いが宗教団体視されるむきがないでもないものでこの紙面を借り「正法の集い」についての意義をもう一度確認したく思います。

「正法の集い」はけつして団体や教団の結成を目的とするものではなく、将来に於ても結成しないという事。会費、相談料は一切とらず、主宰も報酬を受けず、純然たるボランティア精神にのみ基づいて行われるものである事を、私達は肝に銘じなければなりません。

これらは、正法流布の集いにあつては最低守らなければならない基本線であり、職業化された宗教団体結成の愚を再び繰り返してはならないからです。(またそれらは徹底して廃してゆくべき事柄でもあるからです。)

しかし現正法は何よりも宗教と銘うつ必要がなくなってきた事も事実であり、過去の残骸と化しつつある「霊||オカルト、宗教」の觀念さえ人々の意識より追いつ出せば、正法ははつきり科学であると認められ得るものであります。また正法は宗教と科学の一致を目指すものであるのなら、真の宗教は科学とも一致しますので本来あるべき真の宗教に正すという意味で宗教という言葉を用いてもよい訳ですが、私達の意識の中に既成概念としてある、墮落し形骸化してしまつた宗教という概念に現正法はあてはまるものではないので、私達は科学と呼び、岩間様の提唱される啓蒙運動とも称する所以でもあります。

そしてまず合理的な科学者の眼をもつて善霊と悪霊の認識を正しく持つという事と、理性を正しく

働かせる事が最も要求されてきます。

パンセの中でパスカルはいみじくも次のように言っています。

「もしすべてを理性に従わせるならば、わたしたちの宗教には、なんら神秘的、超自然的なものになくなってしまふであらう。

もし、理性の原理にさからうならばわたしたちの宗教は、ばかげた笑うべきものになってしまふであらう。」

この末法の世に蔓延る宗教という宗教は正に後者に属し、悪霊に愚弄されるものとなっているのです。

私達正法者が志向するものは前者であり、現正法のあり方を予見しているかのようにみえるこのパスカルの言葉はまさに、正法のあり方を示しているものであり、真に正法は教育に、科学に、芸術に、啓蒙に、真の意味での宗教に、貢献してゆこうというもののなのです。

そして「天国シリーズ」に於いて学び、天国シリーズを補うものとする「慈悲と愛誌」の刊行に於いて天上界と三次元との交流報告を明らかにし、正法の集いに於いて集う人達同士の横の繋がりを保ち、正法を広くなるべく多くの方に知らしめようとするものです。（『慈悲と愛』は現『J-I』誌）

### 批判について

『天国の扉』でベーエルデの方々は人心穏やかで、知的なタイプが多いと述べられておりますが、勿論天上界の方々も同様、千乃様に關しても当てはまるものと思われます。天上界の導きにより輩出した理性知性豊かな過去の偉人達を思う時充分うなずける事だと思わずにはいられませぬ。

そして過去の偉人達も含め、理性知性の豊かな方々というのは一様に執着が少なく、物事をつきはなして見る、いわゆる第三者的に物事を見る事が出来るので、その見方には、一貫した論理性と当事者にはなかなか気付く事の出来ぬ客観性とがあります。

そして批評眼鏡く、批判精神が旺盛で、透徹した眼は、対象のあやまりを即見抜いてしまう故、欠点が目につきすぎ批判せずにはいられぬのです。

日本では、評論家、批評家の概念が西洋から輸入されて日も浅く、定着していない事もあります。が、天上界の或いは千乃様の正当な批判を悪口的な感覚でとらえるむきがないでもありません。正しく批判する眼を持たぬが為に、また理念を正す事が無いが為にそうした見方をするのでしよう。天上界や千乃様が他の悪口を言う必然性は何もないのです。

私達は正しいものを見分ける為に正しく批判する眼をこやしていかなければならぬと思われます。

その為には正しい判断力が働いていなければなりませんのでそれを養う為に反省を積み重ね、偽我を改めていかねばならない事はミカエル様が述べておられました。

### にせものの再臨のキリスト

さて、乱立する宗教教団の中では、我はキリストの再臨なりとか、エリヤの再来とか、観世音菩薩の化身だとか称し、人々の歓心を集めている教祖が多いのですが、いずれもそれら教祖諸氏の身边には決まって、天使の護りがないのです。

守護する天使が名乗り出る事もなく、また三次元側からそれを証明する証言もなく、キリストの再臨であると自分一人で広言してはばからないのです。

かつての偉大な予言者、メシヤと呼ばれた方々がこの世に現われた時はかならず、モーセ様イエス様に限らず、アブラハムやマホメットに於いても同様に、ミカエル様やガブリエル様等や他の天使方が守護され導かれたのです。

にも関わらずキリストの再臨と称する方々の身边には、守護される天使が、名乗り出ていない。

読者が思いつかれる宗教団体の教祖の身边を考えてみて下さい。何人かの天使が護っているというような話があるかどうか。

現在の千乃様の身边を元大天使方が護り導かれておるように天上界は旧約の時代からメシヤや予言者への一貫して変らぬ守護や導きを為してきたのです。

それがなくては真にキリストの再臨とは言えません。本物ならば、新約聖書、ヨハネの黙示録に示されている七人の天の使いが名乗り出ていなければならぬのです。

そうした信憑性のないものを信じる事は、まったく愚かしい話であり、当人が信じ、とりまきが信じ、三次元でそう認めても、天国では通用せぬものである事を認識しなければなりません。

そうした宗教団体でしている事は過去の仏教、キリスト教或いは高橋信次氏の説かれた教えの練り合わせであり、人々をメシヤ信仰へ、盲信へと導いているだけです。

現在の宗教と名のつくものの中には、人間にとって必要なものはもう既に何も無いとの天上界のお言葉です。残されている事は人々が現正法に帰依する事のみであり、世界中がこぞって帰依するものでなければ、ユートピアはほど遠いものとなるでしょう。

今後、他から七大使が名乗り出るようなことがあっても、それはすべて現天上界に背き、三次元を惑わす悪霊の妨害と見做してください。

歴史に顕われる七大使（元）

読者の方々の中には、七人の元大天使の名は聖書のどこに載っているのだろうと、聖書を調べてみられた方はありませんか？

七大天使の事はヨハネの黙示録に録されておりですがミカエル様の名しか載っておりませんし、読者はおそらく聖書をくまなく調べられてもみ使いの頭かしらミカエルと、かの人ガブリエルの名しか出て来ない事に気がつかれるでしょう。

私は、七大天使（元）の名を知って以来、いったいどこにその名が記されているのだろうか知りた  
い思いでいっぱいでした。

七人の名は高橋信次氏の亡くなられる二十日前の東北講演会のテープで知ったのが最初で、高橋氏も七人の名が聖書のどこに載っているかは御存じなかったそうですが、最近やっとそれを知る事が出来、まだ御存じない方のために親しくここに発表させて頂く次第であります。

六月二十九日、国立市の図書館で、私は集いの準備をしておりましたが、新聖書大辞典にある次の事柄を見つけ出しました。

「外典のエノク書には七人の大天使として、ウリエル（パヌエル）、ラファエル、ラゲエル、ミカエル、サリエル、ガブリエルの名が列挙されている（一エノ20・7）」

胸の高なるのを感じた私は早速七月一日の東京の集いに於いて発表致しました。邦語訳があったら読みたいと思っておりましたら、後日岩間様より連絡がありまして、外典偽典の邦語訳の置いてある書店を知っているから見に行こうという事で妻も呼び出して西荻窪の書店に出かけたのですが、果せるかなエチオピア語のエノク書第二十章に六人の天使の名を見出し得た訳です。岩間様と知江子と私と七月九日の夕方の事で、その晩は月の奇蹟の虹が、翌日十日の午後は太陽の虹が見られました。天上界も大きな喜びを表わされたのです。

古き昔より伝わり来た書物に七人の名が載っていたという事は、まったく筆舌に尽くしがたい感激で、八月号に掲載されました米谷様の千乃様へお寄せになられたお葉書の文章を拝見し、同じ感激を持たれた方が居られた事に心から喜びの感を深くしている次第です。

外典（アポクリファ）隠れたるもの（の意）とは一般に聖書正典結集の時、その選に洩れた諸文書で、七大天使の名が録されているエノク書は旧約偽典（偽典とは著者が昔の聖者、義人などの名を借りて書かれたもの、すなわち偽名の書と言われているもの）に属し、外典中、最も重要な文書の一つとされておられ、初代キリスト教会では教父が教科書として用い教えていたもので、エノク書にふれ宗教団体ではないけれども初代クリスチャンのような喜びを感じたと千乃様も申しておられました。

エチオピア語によるエノク書第二〇章（ウリエルの名も見える）

## 第二〇章<sup>(1)</sup>

一以下は、寝ずの番人をつとめる聖なるみ使いたちの名まえである。ニウリエル、聖なるみ使いのひとり、世界とタルタロス<sup>(2)</sup>を見まもる。エラファエル、聖なるみ使いのひとり、人間の靈魂を見まもる。ラグエル、み使いのひとり、世界と光に復讐する。ミカエル、聖なるみ使いのひとり、人類のなかでも最優秀な部分、（すなわち神の選<sup>(4)</sup>）民をゆだねられている。エサラカエル、聖なるみ使いのひとり、靈魂を罪にいざなう人の子らの靈魂を見まもる。セガブリエル、聖なる天使のひとり、蛇と（エデンの）園とケルビムを見まもる。<sup>(6)</sup>

エノクという人については創世記第五章によれば、アダムから第七代目に当たり、ミカエル様によると約五千三百年前の人であるとの事です。エノク五書はエチオピア語のエノク書、第一エノク書とも呼ばれ、左記の五つから成っております。

序論（一） 天使の書（二） メシヤの書またはエノクの比喩、譬え（三） 天文の書（四） 歴史の書（五） 教訓の書、結語

前記のエチオピア語訳の写本に対し、スラブ語訳のものがあり、スラブ語のエノク書、第二エノク書と呼ばれ、エノクは三百六十五歳の時、天使の導きによって天上旅行に出発し第一の天から第十の天にまで巡歴して、第十の天では栄光に輝く至高者のみ顔を仰ぎ、天地創造のことやその終末の事などを教えられる。その後地上に帰ってきて、その子らを集めて、神を恐れることを第一にするようにと教え、誕生と同じ月日に天に昇ったとあります。

エノク五書では(一)と(二)に元七大大使の名がひんばんに出てきております。

第二〇章からの引用では――

以下は、寝ずの番人をつとめる聖なるみ使いたちの名まえである。ウリエル、聖なるみ使いのひとり、世界とタルタロスを見まもる。ラファエル、聖なるみ使いのひとり、人間の靈魂を見まもる。ラゲエル、み使いのひとり、世界と光に復讐する。ミカエル、聖なるみ使いのひとり、人類のなかでも最優秀な部分(すなわち神の選民)をゆだねられている。サラカエル、聖なるみ使いのひとり、靈魂を罪にいざなう人の子らの靈魂を見まもる。ガブリエル、聖なる天使のひとり、蛇と(エデンの)園とケルビムを見まもる。(注IIギリシア語の一つの写本にはこのあとに「レミエル、聖なる天使のひとり、神が復活した者たちをつかさどらされた者。天使長たちの名、七つ」とあります。)へ一、天使

の書より

また第四〇章からの抜萃では――

わたしはその後、わたしに同行して、すべての秘密をわたしに見せてくれた平和のみ使いに尋ねた。「わたしが見、その声を聞いて書きとめたあの四人のみ前（の天使）はだれですか」。彼はわたしに言った。「最初の者はあわれみ深く、めったに怒らない聖ミカエル、第二は人の子らのいっさいの病と傷をつかさどるラファエル、第三はすべての力をつかさどる聖ガブリエル、第四は永遠の生命を嗣ぐ者たちの悔い改めと望みをつかさどるベヌエルである。以上はいと高き神の四天使であり、そのときわたしは四つの声を聞いた。へ二、メシヤの書より」

(三) 天文の書では、選ばれし義人エノクに天文学や暦法に関してウリエル大天使が教え導き啓示を与えております。

エノク書は外典中最も多く七大大使の名が残されている書と思われれます。

他の文書では、旧約外典エズラ第二書に、予言者エズラに啓示を与える「み使いウリエル」。同じく旧約外典トビト書には「七人の聖なるみ使いのひとりなるラファエルなり」と録されております。死海文書の中でヨハネの黙示録を思わせ、クムラン宗団独自の文書とされている「光の子と闇の子

の戦いの書」にはサリエルとミカエルの名が録されていると岩間様より御教示頂きました。

聖書外では七世紀マホメット教（イスラム教）の聖典コーランの中に、ガブリエルはマホメットに啓示を与えた天使として、ミカエルは、天地に対する神の命を実行に移し、西風を送る天使として録されております。

フランスでは十五世紀にジャンヌダルクに啓示を与え、フランスを救う事を命じた天使として聖ミカエルの名が史実に残されております。

旧約外典エズラ第二書は、エズラの黙示録ともよばれ、ヨハネの黙示録、バルクの黙示録（旧約偽典）に並ぶものとされ、最後の審判についても述べられておりますが――

この最後の審判については、黙示録に示されているだけでなく、紀元前七世紀ゾロアスター教の聖典アベスタに、またマホメットの聖典コーランにもその事がふれてあり、天上界は旧約の時代から、時代の流れ、動きに応じて、法という一つの事を説いてきたその片鱗が窺われるようで興味深く思われます。

そしてこれまで挙げた事柄から、私達の擁護する天上界が現在の千乃様を護り導かれているように、実に旧約の時代から人々を善導して来られた、そしてそれは昔も今も変わらない法一つに貫かれた

ものであったと思われ、畏敬の念を禁じ得ません。

現天上界が古くから実在していた事の確信を深めるものとして、この記事が広く受け入れられることを祈りつつ筆を置かせて頂きます。

《参考文献》『新聖書大辞典』キリスト新聞社 『聖書外典偽典④旧約偽典Ⅱ』教文館 『アポクリフ  
ア』(倫聖公会出版) パスカル著、田辺保訳 『パンセ』新教出版社

## 第一章六十頁の証言

千乃裕子

GLAでは左記の記事が平井和正氏自身の手で外部に公表されているのを知らず、高橋佳子氏の神話作りに専念し、佳子氏を著者として、後に三部作の出版記念会まで、文化人を集め、大々的に催しました。新興宗教の例にもれず、一事が万事、すべて作り事で虚飾を施し、ミカエルの本体とまつり上げた佳子氏の精神病院（後に入院）の事実など（『慈悲と愛』誌掲載）ひた隠しに隠して、卑劣なやり方で天国シリーズ及び私の中傷、悪宣伝を、外部団体や、外部の元GLA会員などを用いて行なっております。（次巻『天国の証』にも詳述）GLA会員こそ気の毒と言わねばなりません。

（一九八一年二月二十四日）

× × ×

とにかく大天使の書記役として昨年十二月から約二カ月間、「ミカエルの本」製作に協力し、このほど完成させた。出版社は祥伝社、三月刊行の予定である。世界に類例のない本であって、……中略……三部作の第一弾で、巻を追って「見えない世界」を解明し、真実の「創世記」を詳述する予定になっている。……後略……

平井和正

(一九七七年四月号 SF雑誌『奇想天外』から引用)

× × ×

読者の方からおハガキが届きましたが、例の平井和正氏が徳間文庫版『新幻魔大戦』巻末の自筆年譜に次のように書いています。

「昭和52年（一九七七）38歳

高橋佳子さんに乞い、ミカエルの言葉を採り続けることに専念する。休筆七ヶ月に及んだ。採録三千枚を超える。もはや元には戻れない。この年の新刊の刊行は一冊もなし。しかし文庫本などが驚くほどの売れ行きを示した。超常現象を思わせるほどだった。」

何時これを書いたのか知りませんが、確か佳子さんは一九七六年三月にミカエルの現象を初めて行い、高橋信次先生は六月に他界、十ヶ月の中にGLAはミカエル佳子宗教に転じ、悪霊に踊らされるまま講演会ショーを続けて、その間に一九七六年十二月から、「ミカエルの本」三部作製作に平井氏が専念予定、一九七七年三月には第一部刊行——と一九七七年四月号のSF雑誌『奇想天外』に書いていますね。七ヶ月というから十月から年末にもなったでしょうか？ 第二部、第三部と発刊の間、こちらでミカエル様、ガブリエル様、ラファエル様、他七天使やイエス様、ブッタ様、モ—セ様の御協力、御助力の下、信次先生も時折参加されて『天国の扉』を執筆、一九七七年十二月五日に発刊致しました。ということはそれ以前に平井氏が新刊は一冊もなしと書いたということになります。この年譜がウソでなければです。念の為、平井氏の書かなかった事を補足します。第二部からは勿論、ミカエル様はGLAには不在、私の所へ来られましたので、第二部以降の「ミカエルの言葉」なるものは誰の言葉やら判らないということ。平井氏は、これを書き落としていますね——ここはウソになっている訳です。虚偽の証言ノ

(一九八六年一月十四日) 千乃裕子

## あとがき

本文中に説明いたしましたように、第七章原稿を急拠入れ替えるに当り、初版の為に書きましたあとがきを削ろうかなと思いましたが、そうしますとあの素晴らしい天の奇蹟の虹について語る場所がなくなりますので、再度当時の感激をそのままに伝える文章を引用、掲載させて頂くことに致しました。

それは、この『天国の扉』という本がこの中に現れている霊界の高次元の霊の意志、すなわち天国の意志と計画であるという証しに、大いなる奇蹟が再び示されたということなのです。この本に書かれていること、ならびに大部分が霊によって語られたことを伝えるという有り得ないようなことがらがすべて真実で、ここに三次元の常識では計りがたい天上の意志が働いていることの証しでもありました。

原稿がいよいよ校正の段階にいたり、校正を済ませて出版社に返送した十月二十八日の夜半、正確には二十九日の零時頃から一時過ぎぐらまで約一時間のあいだ、星が良く見える晴れた夜空でしたが、こうこうと輝く満月の周囲に白く薄い小さな雲が集まり、それを包み込むように、地上からは直径約五

千メートル、上空で計測すればおよそ五万メートルはあろうかと思われる巨大な虹が夜目にも鮮やかに円形に浮かんでいるのを目撃しました。それは、第二次の虹と呼ばれるもので内側が赤、外に向けて七色に変わり、一番外側が紫色でした。母を呼び出し、通りがかった五、六人の人にも声をかけて、靈視ではなく三次元の光景であることを確認しました。誰もが生まれて初めて接する壮大な美しさと夢幻の境のような光景に見とれて、絶句するほどのものでした。土田展子さんに時間に構わず電話をしましたら、驚ろきで足が震えると思感を述べました。それは、太陽の光暈（こううん）に似たものだと考えて下されば、皆様のご想像の形がはつきりするかとも思います。

これは何うと、一億分の一の確率で、しかし恐らく宇宙生成いらい初めて行なわれた奇蹟で、ペー・エルデでもその同盟星でも、もちろん地球上でも、かつてなかったことだそうです。天国の喜びを表わすため、モーセ様が試みられました。

この大いなる奇蹟を私とともに同じ国で、同じ地球で目にしたかたも少なからずいられると信じますが、思い出すたびにあの印象深い夜のことを、私は生命ある限り忘れないでしよ。

## 翻訳出版について

この本を読まれたかたで、説かれている理論に共鳴され、ぜひ外国の人にも紹介してみようと思われるかたは、しかるべき専門家に頼まれて、英語・フランス語・ドイツ語・デンマーク語・インド語など、どの国の言語にでも翻訳されて、ご自由に海外出版なさって下さい。

ただし著作権の問題などありますので、その旨、著者（または、ジェイアイ出版）までご連絡下さい。また、外国人のお友達で日本語を研究していただけるかたに、この本をどしどし紹介して頂いて結構です。

著者

天上界の眞実と証をこめて

シリーズ 第二卷

最後の審判より希望の星へ

# 天国の証

第一作『天国の扉』に続く天上界との交流報告。人類の救いに至る最後の審判に対して、ミカエル、ガブリエル等、天使達やエホバのメッセージ。進化論に基き、宗教と自然科学の一致を立証ノ 天上の霊達の作詩やカラー絵も多数。定価一、二〇〇円 送料 二五〇円



エクソシズムから

アトランティス大陸の解明

# 天国の光の下に

シリーズ 第三巻

天国シリーズ第一作、第二作に喚起された  
人達の宗教遍歴、憑依体験、奇跡の体験寄稿  
集。編者による霊能、霊界の科学的分析に加  
えて、アトランティス大陸の実証などを網羅  
した傑作。

定価 一、三〇〇円 送料 二五〇円

エクソシズム(悪魔払い)から  
アトランティス大陸の解明

## 天国の光の下に



狂気の可憐な女が悪魔に憑りつかれた15年  
間の苦闘の記録。新宗教の書生と悪魔の子  
より教わられた人々の喜びの手記から、化学者  
の正統肯定論と教育者によるアトランティ  
ス大陸の検証まで。

# 聖書の奇蹟とその神秘

をすらすらと解明

## 天の奇蹟 上巻

天地創造の由来、エデンの園の場所は、ノアは実在の人物か？を自然科学に基づき解明。ラファエル元大天使が奇蹟の原理と天の目的を証言。UFOと奇蹟の虹カラー写真掲載

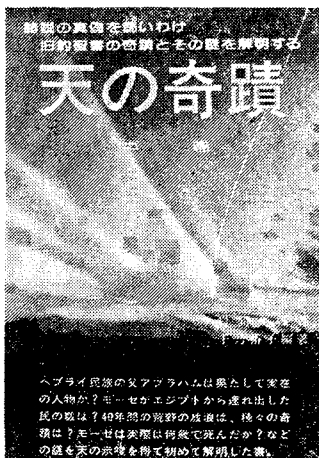
定価一、〇〇〇円 送料二五〇円

シリーズ第四巻



諸説の真偽を<sup>ふる</sup>篩いわけ

旧約聖書の奇蹟とその謎を解明する



# 天の奇蹟

中巻

シリーズ第四巻

ヘブライ民族の故郷<sup>ふるさと</sup>ハランを旅立つアブラハムは実在の人物か？モーセは民60万をエジプトから連れ出したのか？四十年間の荒野放浪は事実か？種々の奇蹟は？モーセは<sup>し</sup>実際は何歳で死んだか？など多くの謎を天の示唆を得て初めて明快に示す。トリノの聖骸布の真実もミカエル様他元大天使により余すことなく公表。定価 1200 円（送料 250 円）

# シリーズ第四巻完結!

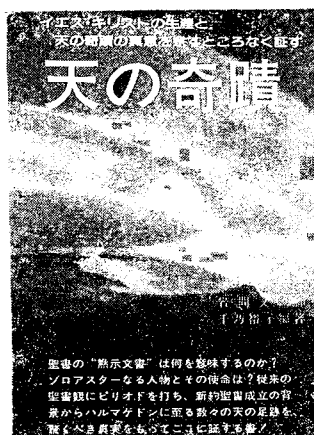
イエス・キリストの生涯と

天の奇蹟の真意を余すところなく証す

## 天の奇蹟 下巻

聖書の「黙示文書」は何を意味するのか?  
ゾロアスターなる人物とその使命は? 従来の  
聖書観にピリオドを打ち、新約聖書成立の背  
景からハルマゲドンに至る数々の天の足跡  
を、驚くべき真実をもってここに証する書!  
(上)・(中)に続く完結編!

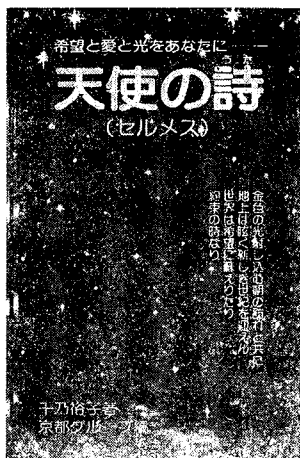
定価一、五〇〇円 送料三〇〇円



次々とベストセラーの作品  
セルメスシリーズ第一巻——

希望と愛と光をあなたに

# 天使の詩うた (セルメス)



人類が求め続けてきたユートピアへ、人類滅亡の危機の時代に今どう生きるべきか？  
天上より三次元の人々へ警鐘。希望あふれる天使の詩。悩めるものへ希望と愛と光をもたらす。

定価六八〇円 送料二五〇円

次々とベストセラー入り  
セルメスシリーズ第二巻

光に生きる人生をあなたに――

# 天使の冠かんむり (エルフォイド)

神様ってどんな方？ 悪魔って本当にいるの？ 人はどう生きれば良いのでしょうか？ 誰もが一度は突き当たる問いに多角的にアプローチ。悪魔の憑依から救われ、神を見た人々の手記、アトランティスの謎の解明、正法概説を含め現代の人々に光に生きる人生をもたらします。

新書判 定価七八〇円 送料二五〇円



またもやベストセラー入り

セルメスシリーズ 第三巻

☆ 光、光、光の世界をあなたに——



☆ 天使の群むれ (エルバーラム)

誰もが夢見ずにはいられない理想社会（ユートピア）。そこに至る道はいつの時代でも遠く険しい。高次元の天上界が今はじめて明らかす真実の数々——イエス・キリストの復活とトリノの聖衣の謎他。大天使方が人類に贈る真理と希望のメッセージ集!!

☆



☆



新書判 定価七八〇円 送料二五〇円



セルメスシリーズ第4弾!!

光、光、光、の世界をあなたに――



# 続天使の群 むれ

(続エルバラム)

人々よ、悪に魂を委ねんと志し居るか。  
 神の声を聞けと天の使いは呼びかけ給う。  
 自ら伸べられし手をつかみ救われよと――  
 21世紀を目前にし、人類に迫る核戦争、共  
 産主義の恐怖、しのびよる環境破壊。人々  
 は愛を捨て、希望を失い、闇をさまようの  
 み……。



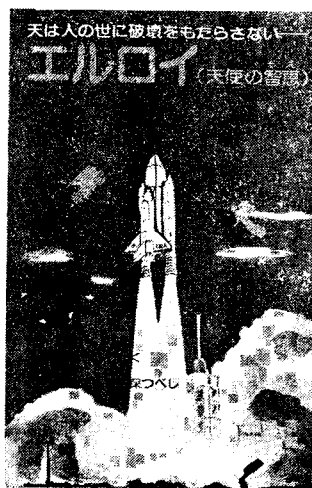
新書判 定価八八〇円  
 (送料 二五〇円)



セルメスシリーズ第五巻

天は人の世に破壊をもたらさない——

# エルロイ (天使の智恵)



未来へ向う若者たち、未来を案じる大人たち、何も知らない子供たちへ愛と希望と勇気を今ここに贈る——

21世紀へ向けてのエネルギー問題、自然健康法、今話題の「聖骸布」の実験成果、正法と人類と進化に関する物ほか、卓越した内容を網羅。

新書判 定価八八〇円 送料二五〇円

☆セルメスシリーズ 第6巻☆

天は愛と義と智に満ちた人々のためにある

つのおえ

# エルカロム (天使の角笛)



希望の胸をふくらませ、未来をみつめる人類のために、今、天は時の流れを交える角笛をならす！  
心の分子レベルでの物理化学的分析、天界と古代日本に関する考察を加え、新たな真実を発表。

新書判 定価八八〇円 送料二五〇円

大好評の千乃裕子天国シリーズ

英訳版 ついに 第一巻 天国の扉 発売

# The Door To Heaven

The Door To Heaven  
In Search Of Future Happiness

Yuko Chino  
Editor and Author

新発売 大好評の千乃裕子天国シリーズ

英訳版第一巻「天国の扉」

神・天国とは？ 創造神とは？ 天国の神々とは？  
と本書は深く、徹底したに基づき宗教と科学の一致を究明し、  
天の真実の方向を明らかにする。 之編 2000頁

## Contents:

What is "God" - "Spirit" - "Heaven"? Do Heaven and Hell really exist? In terms of science, this book replies to all these questions. It also concurs with the theory of evolution. Other established ideas on religion are attacked and clarified in relation to science.

A5判上製美本

英訳版「天国の扉」は美しい美術装幀で、外国の友人、知人へのシリーズ紹介、贈り物に最適です。直訳でなく工夫して訳してあるので、英語を学ばれる方にも読み易くなっています。

定価 ¥2750 \$12.50

Je-i-Ai Publishing Co., Ltd.

P.O. Box 10, Koganei, Tokyo 184, Japan

HORKOM International Corp.

1377 K St., N.W. #59

Washington, DC20005 U.S.A.

大好評の千乃裕子天国シリーズ  
英訳版第二巻 天国の証

To the Star of Hope through the Last Judgement

**THE WITNESS OF  
THE KINGDOM OF HEAVEN**

This book sends you the Truths of Goodness, Justice and How to Live in the modern delusive society. The Messages from Jesus and the Angels on the Last Judgement; also proves the Concurrency of Religion and Natural Science.

Photos of the miraculous rainbows around the sun and the moon are illustrated.



「天国の扉」を英訳でお読みになりいかがでしたか。ひきつづきここに「天国の証」英訳版をおとどけ致します。美しい装幀、さし絵、そして「扉」以降に明かされた天の真実をぜひ英訳でと望まれる声にお応えした千乃裕子著英訳版天国シリーズ第二弾！

定価 ¥3280 \$ 14.95

Je-i-Ai Publishing Co., Ltd.  
P.O. Box 10, Koganei, Tokyo 184, Japan  
Tel: 0423-83-3533/Transfer Account No. 1-167145 Tokyo

大好評の千乃裕子天国シリーズ

英訳版第三巻 天国の光の下に

## UNDER THE LIGHT OF HEAVEN

From Exorcism To The Explication  
Of Atlantis

What sort of personality is God? Is there really a devil? How should people live? An approach from all angles to these problems that everyone faces at some time or other! Diaries of people who were saved from the possession of the devil and who saw God.

Explication of the enigma of Atlantis. The basic principles of the *Shoko*. All of these are presented here to bring a life of light to the people of today.

Under The Light Of Heaven  
From Exorcism To The Explications Of Atlantis

Yoko Chino  
Editor



A 5 判上装美本

ついに英訳版第三作目『天国の光の下に』が出ました！ジャンヌ・ダルクあり，トリノの聖骸布の章もあり，興味深い編集と内容です。 定価 ¥3280 \$14.95  
(ペーパーバック 定価 ¥1750 \$7.95)

Je-i-Ai Publishing Co., Ltd.  
P.O. Box 10, Koganei, Tokyo 184, Japan  
HORKOM International Corp.  
1377 K St., N.W. #59  
Washington, DC20005 U.S.A.

次々と発刊される予定の各国語版を御紹介致します。

\*英訳版シリーズ第4弾ノ―「セルメス(天使の詩)」

★SERMES SERIES VOL. 1★

# SERMES

(The Poems of The Angels)

Edited by Yuko Chino and Kyoto Group

The miracle of resurrection was carried quite scientifically by the power of Archangels and Angels. The Holy Shroud of Turin is the only proof of the miracle. A physiotherapist solved the enigma as a human approach with physicochemical experimental data, which agreed completely with Michael's explanation.

Paperback US\$ 7.50 Publication due February, 1984!



英訳版天国シリーズに次ぐ英訳版セルメスシリーズ

A 5判 定価1750円(千250)

日本を超え近隣アジアの国々へ—  
日本語版・英語版に続く韓国語版・  
中国語版の堂々の発刊です。



未來의 幸福을 찾아서  
**天国의 門**

千乃裕子著  
金鏞漢譯

A 5判

定価1200円

(送料別)



邁向幸福的未來  
**天國之扉**

千乃裕子著

B 6判

定価1200円

(送料別)

☆人は理性と真理と希望につらなる

未来を求めてやまない——

# 天上界メッセーヅ集

千乃裕子／J I 編集部編

21世紀に至る人の真の望みは何であろうか？  
世の滅亡を計る悪魔の思想を絶対の真理  
と仰いではならない。世の平和を虚しいもの  
にしてはならない。

「最後の審判」という大いなる法の裁き続行  
の下で現天上界が語る数々のメッセーヅ。美  
しい地球を死の星とするか、未来へ続く希望  
の星とするか、今、読者に本書をもって問うノ

英訳版も発売！

The Messages From Heaven  
God's Sacrifice  
People Never Cease to Seek  
Which Brings About Reason, Freedom and Hope  
Edited by Yuko Chino  
J. I. Editorial Staff  
Franklin & Johnson Co.

人は理性と真理と希望につらなる  
未来を求めてやまない  
天上界  
メッセーヅ集

千乃裕子 J I 編集部編

A 5 判 一三〇〇円

A 5 判 一三〇〇円

☆人は理性と真理と希望につらなる

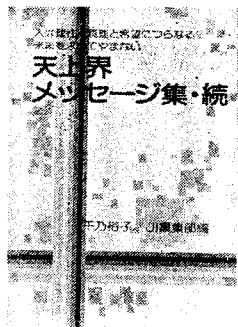
未来を求めてやまない——

# 天上界メッセーシ集・続

千乃裕子／J・I編集部編

A 5 判 一 二 〇 〇 円

「神と人類の虹のかけ橋」——人類の永き歴史を通じて、この地球をユートピアにする為に、モーセをブッタ（釈迦）をイエス・キリストをそして、多くの聖人・賢者を教え導いてこられた天上界高次元の方々の偉業のメッセーシ。大反響を呼んだ『天上界メッセーシ集』に続き天上語によるメッセーシ、天使の詩を含めて珠玉のメッセーシを一挙収録ノ



## 正法講座テーブルリスト(1)

No.1	欠番	
No.2	欠番	
No.3	欠番	
No.4	正法基礎講座「ミカエル様の法話」	S.52.6.23 現象 土田展子
No.5	正法基礎講座「明るい心、暗い心」	S.52.7.18 講師 千乃裕子
No.6	正法基礎講座「高校生クラス」	S.52.8.1 講師 米本 明
No.7	正法講座 「『天国の扉』出版お祝いの言葉と共に」 (ミカエル様、イエス様)	S.52.12.1 現象 土田展子
No.8	正法講座(イエス様、ミカエル様)	S.52.12.14 現象 土田展子
No.9	正法改正理論	S.53.3.21 解説 千乃裕子
No.10	正法を学ぶ人のためにⅠ「後継者について」(ミカエル様)	S.53.7.10 現象 千乃裕子・土田展子
No.11	正法を学ぶ人のためにⅡ(ミカエル様、イエス様)	S.53.10.16 現象 千乃裕子
No.12	正法を学ぶ人のためにⅢ(ミカエル様) 「メッセージ」(ブッタ様)	S.54.2.1 現象 千乃裕子 S.53.10.1 現象 土田展子
No.13	心の働き	S.54.3.17 講師 岩間文弥
No.14	正法の歩みーギリシャ時代	S.54.6.3 講師 岩間文弥
No.15	身体と霊体の成り立ち	S.54.9.2 講師 岩間文弥
No.16	ミカエル様メッセージ ウリエル様 正法講座	S.54.11.4 現象 土田展子
No.17	イエス様 クリスマス・メッセージ	S.54.12.23 現象 土田展子
No.18	「魂の研磨」について(ガブリエル様)	S.55.2.10 現象 土田展子
No.19	「宗教と人間の関係」(ガブリエル様)	S.55.3.9 現象 土田展子
No.20	再び愛について(ミカエル様)	S.55.4.6 現象 土田展子
No.21	原罪とは(ラファエル様)	S.55.4.13 現象 土田展子
No.22	現正法と転生輪廻	S.55.5.4 講師 岩間文弥
No.23	A.心の美は(ガブリエル様) B.「天上界よりの通信」1977年の約束(ミカエル様) GLA関西新年講演会(於東大阪市民会館)より抜粋	S.55.5.11 現象 土田展子
No.24	第1回慈悲と愛協会総会(ミカエル様メッセージ)	S.55.5.18 現象 土田展子
No.25	天国語の語源について(ラファエル様) 質疑応答	S.55.6.29 現象 土田展子
No.26	良き人間関係について(ミカエル様) 質疑応答	S.55.8.10 現象 土田展子

## 正法講座テープリスト(2)

No.27	正法流布について (ガブリエル様) 質疑応答	S.55.8.11 現象 土田展子
No.28	自己犠牲について (ミカエル様)	S.55.9.14 現象 土田展子
No.29	イエス様クリスマスメッセージ「愛と信仰」	S.55.12.21 現象 土田展子
No.30	啓蒙運動としての現正法	S.56.4.12 講師 岩間文弥
No.31	天上界と質疑応答 (ガブリエル様)	S.56.9.10 現象 土田展子
No.32	物の見方について (ラファエル様)	S.56.9.15 現象 土田展子
No.33	慈悲について (ガブリエル様)	S.56.9.13 現象 土田展子
No.34	霊について (ミカエル様) 霊能と天上界高次元の霊について (ラファエル様)	S.56.10.18 現象 千乃裕子 土田展子
No.35	クリスマス・メッセージ (イエス様 ラファエル様 ガブリエル様 ミカエル様)	S.56.12.20 現象 土田展子 谷田三枝 金鐘漢
No.36	消滅について (ガブリエル様)	S.56.12.27 現象 土田展子
No.37	イエス様 ウリエル様 サリエル様 パヌエル様 ラグエル様 メッセージ	S.57.1.10 現象 土田展子 谷田三枝
No.38	ユートピアについて(ウリエル様) ガブリエル様メッセージ	S.57.1.17 現象 土田展子 谷田三枝
No.39	進化の歩みをたどりて	S.58.7.10 講師 岩間文彌
No.40	ガブリエル様 イエス様 メッセージ	S.58.7.10 現象 谷田三枝
No.41~No.44	欠番	
No.45	天の奇蹟・下巻 発刊によせて (ラファエル様)	S.62.7.5 現象 金鐘漢 千乃裕子
No.46	「天の奇蹟」完結にあたって」 「天上界と古代日本」	S.62.7.5 講師 岩間文彌 西澤敬彦